
機動戦士ガンダム S E E D ブリュナーク

ニーチェ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEEDブリュナーク

【NZコード】

N5384C

【作者名】

二一チエ

【あらすじ】

CE71年から二年後。戦火はいまだに止むことはなかった・・・。全ては『アーモリー・ワン』MS奪取事件から始まったのであった・・前作『ブーステッド』の続編。クロト視点から描く、もう一つのガンダムSEEDディスティニー

登場人物

O・M・N・I（地球連合軍）

クロト・ブエル Age 20歳

地球連合軍少佐。特殊部隊“ファンタムペイン”所属。副指揮官。
元生体CPU。全大戦でAAに保護されアーヴェンジエル

以後、オーブに渡り 再び連合に戻る。薬物投与を止め、狂気な一面は消える。

ステイニング・オークレー Age 17歳

“ファンタムペイン”所属のパイロット。エクステンデット。

ナチュラルとは思えない戦闘能力を持つ少年。少尉。

アウル、ステラの兄貴分。リーダー格。

アウル・ニーダ Age 16歳

“ファンタムペイン”所属。少尉。ステイニング等二人と同様

優れた戦闘能力を持つ。

ステラ・ルーシェ Age 16歳

“ファンタムペイン”所属 少尉。普段は茫洋としているが
恐るべき戦闘能力を持つ。

ネオ・ロアノーク Age 31

地球連合軍大佐。特務部隊“ファンタムペイン”的指揮を執る
仮面の男。AAのクルー『ムウ・ラ・フラガ』に似ているが・・

イアン・リー

地球連合軍少佐。“ファンタムペイン”的母艦

『ガティー・ルー』の艦長。

Z・A・F・T（ザフト軍）

シン・アスカ Age 16

元オーブ国民の少年。先の大戦で家族を失った後、プラントに渡りザフトに入隊。

ルナマリア・ホーク Age 17

少女でありながら、自分専用のザクウォーリアを操る。

ザフトのヒーローバイロット。

レイ・ザ・バレル Age 16

ザフトのヒーローバイロット。常に冷静な判断力を持ち

シン達のリーダー役を務める。

メイリン・ホーク Age 16

ミネルバの艦橋でMS通信管制を担当する。

ルナマリアとは姉妹で妹にあたる。

タリア・グラデイス

ザフトの新造艦『ミネルバ』の艦長。決断力、判断力、行動力に優れ
クルーの信頼を集める。プラント最高議長であるギルバート・デュ
ランダルとは

昔の恋仲同士。人前では言わないが、互いに名前で呼び合つ。

アーサー・トライン

ミネルバの副長。時に型破りな決断をするタリアの元で

苦労をする青年。

ヴィーノ・デュプレ Age 16

シンの友人で、ミネルバのMS技術スタッフを担当する少年。

ややお調子者。

ミウラン・ケント Age 17

ヴィーノ同様、ミネルバのMS技術スタッフを務める少年。やや斜に構えた性格を持つ。

ギルバート・デュランダル

プラント最高評議会議長。ナチュラルとの融和政策を

推進するいわゆる穏健派の政治家。『ミネルバ』の艦長である

タリア・グラディスとは昔の恋仲。常に彼女を名前で呼ぶ。

O・R・B (オーブ連合首長国)

カガリ・グラ・アスハ Age 18

現オーブ連合首長国代表首長を務める少女。前大戦でキラ達と共に

愛機『ストライク・ルージュ』で戦場を駆け抜けた。

アスラン・ザラ Age 18

元ザフトレッド（赤服）。前大戦後、オープに亡命し

カガリのボディーガードになる。カガリとは恋仲同士。

キラ・ヤマト Age 18

アスランの親友でカガリの弟。『フリーダム』のパイロット。

前大戦で活躍した伝説的パイロットだが、今は隠棲中。

ラクス・クライン Age 18

前大戦の終結に力を尽くしたプラントの歌姫。

現在はキラと共にオープで隠棲している。

マリュー・ラミアス

元地球連合軍軍人。前大戦後、オープに亡命。マリア・ベルネスを

名乗り

技術者となつてゐる。

アンドリュー・バルトフェルド

前大戦では“砂漠の虎”と恐れられた元ザフト軍人。現在はオープに亡命してゐる。

第一話『奪取』

宇宙に無数の砂時計が見える。『プラント』と呼ばれたその建物は、『人間もどき』、

『コーディネーター』達が住む世界だつた。

シャトルの中で、サングラスをかけた青年は隣にいる、小奇麗なドレスを着た少女に喋りかけられる

「クロト！ 外、綺麗・・」

「ん？」

青年と少女は窓をのぞく。無数に存在する『プラント』の外壁が白銀に輝き、綺麗だ。

少女はうつとりとその砂時計を見て、一二コリと微笑む。その中、機内でアナウンスがなる。

『当機はまもなく、アーモリーワンに到着します。お忘れ物が無いようご注意下さい。』

『クロト』と呼ばれた青年は、アナウンスを聞くと前の席で眠っていた『お仲間』の一人を起こす。

目付きの悪い少年と一見、無邪気で女の子のような顔立ちの少年は欠伸や軽く体を伸ばした。

少し軽い振動が起きると、シャトルはアーモリーワンに着陸した。数十人の人々がシャトルから下りていく。

この中で『ナチュラル』は何人乗っているだろうか。彼らも、その後に続いてシャトルから下りる。

しばらく、空港の中を見物する四人。

「作戦時間まで、結構時間があるな。」

『ステイング』と呼ばれた少年は左腕の腕時計を確認してクロトに言った。

「じゃ～どっかで何か食べる？俺、腹減ったよ

青髪の少年『アウル』はシャトルに乗つてからほとんど食べ物を口にしなかつたので、そうとう空腹状態のようだ。彼は軽く自分のお腹を触り、顔色悪そうに言った。クロトは右腕で髪の毛をクシャクシャにする。

「我慢しろよ。」

「あ～！自分の金を消費したくないからって、そういう事を言つて…ひで～」

アウルはクロトにからかうように言った。

彼ら三人にお金は無かつた。一銭も。

三人のお金を探しているのは『保護者』であるクロトに任せられてるからだ。

「これから暴れるのに物を食つたら吐くぞ。絶対

厭された顔でクロトはアウルに言った。しかし、隣で

ステラのお腹から小さな音が鳴ったので、クロトはさらに厭ぎれて、仕方がないと思つたのか自分の財布の中を確認する。

「ステラ、お腹すいた」

「あ～～～はいはい。」

「ずるいよーステラの時だけ“ひいき”してさー。」

駄々をこねるアウルをステイニングは見ると、ステイニングはアウルの肩を叩いて言つ。

「アウル、見苦しいぞ。」ううとうときはな、女の子が優先されるんだ

アウルにはその意味が解らなかつた。

ただなんとなく、ステラのほうが偉いと思つた。

それだけだつた。

アウルの顔が理解が出来ていない顔だつたので、ステイニングは軽く苦笑した。

クロトは適当な店にしようと、喫茶店に入ろうとした瞬間、アウルに制止される。

「こんな所じや、満足しないよーーあそこがいい！な、ステラー。」

「うんーー。」

「・・・・・」

アウルが指を指した方向は喫茶店から3軒隣の『ステーキハウス』だった。

何故、彼がステーキハウスを選んだのかは解らない。
たぶん、匂いに誘われてだらう。

わざわざ高いところに行きたくない。クロトは思うが
『妹分』のステラも行きたそうだったので、しぶしぶ行くはめにな
つた。

ステラは別にどこでも良かったのだろう。お腹が満たされれば。
ただ、アウルに同意を求められたから、答えただけだと思う。

「いらっしゃいませえ）。何召さまですか？」

「四人です」

「禁煙席でよろしいですか？」

クロトは最近、煙草を吸うようになった。
と、言つても一日に5~6本だけだが。
彼ら三人の体を気にして、クロトは禁煙席を選ぶ。
テーブル一つに席が四つあった。

「えへへ・・何を食おうかなあ・・」

アウルは笑いながら、メニューを確認している。
すると、店員が四人分の水を運んできた。

水が入ったグラスの中には、水が氷結して出来た『氷』が入ってい
た。

氷を見るのが初めてなステラは、まじまじと氷を見つめた。
アウルは食べたいものが決まつたらしく

「ここに決めた！！」

「……げつ……」

アウルがメニューに指を指したのは定価9800円で400㌘の最高級ヒレ肉らしく、こここの店のオススメと書いてある。メニューに載せてある写真の中で確かに、美味しいそうに写してある。クロトは別にもどうなつても良かつたので

「……もう何でも食え。」

飽きれ口調で言った。

ステイキングはそれを見て、苦労してゐなあと思い、共感してくれた。

「ステラも、アウルと一緒に。」

決まつたと思い、ステイキングは田の前にあつたボタンを押すと、チヤイムが鳴り

店員がここに来た。

アウルが急ぐように店員に言った。

「ボクね、これね。これ」

「はい。当店由慢の400㌘ステーキですね。焼き方は？」

アウルは、はて焼き方って何？と思い、少し黙る。

困つたアウルはクロトに助けを求める。

クロトはアウルに好きな肉の硬さを聞くと、アウルは柔らかいの、と言つた。

「じゃあ、ミディアムレア（やや柔らかい）で。」

店員は自分の持ってきた電子計算機に入力する。次にステラに聞かれる。ステラもたどたどと考えるがやはりクロトに助けを求める。

「ミディアム（中くらいの堅さ）で」

「かしこまりました。」

ステイキングは別に食べたそもそもなかつたのでクロトと同じコーヒーを選択した。

「注文の品は以上ですか？」

店員が別のテーブルに行く。

アウルは早く来ないかと待ち遠しく、メニューをひたすらと見て、お腹を満たそうとする。すぐに店員は戻ってきた。コーヒーを一つ持つて。クロトとステイキングはコーヒーをする。

ステイキングは再び、時計で現在の時刻を確認する。

「あと、2時間と17分ですね」

彼らが時間を確認しているのはわけがあった。それはアーモリーワンに存在する

彼らの任務はその『新型MS』の『奪取』だった。

この情報は一ヶ月ほど前に察知されていた。

そこで、任命されたのが彼ら『第81独立機動群ファンタムペイン』だ。

特にファンタムペインの中でも『実験段階』である『エクステンデッド部隊』を

採用している。エクステンデッド。名前から察するとおり、全体戦で使われた

『ブーステッドマン』の別種類にあたる。戦闘前にブーステッドマンは薬物投与を

行うのに対して、エクステンデッドはそれをしない。

かわりに、精神的な処置が行われる。それにより、ブーステッドマンよりも

思考能力が確保が出来た。秘密工作、潜入といったより高度な作戦が立てられるようになった。

肉が焼ける音と香ばしい匂いが彼らの席を包むと

二人が注文したステーキが来た。

店員は自らが持ってきたレシートを、クロフトの目の前に伏せた。

二人がステーキを自分が食べやすい大きさに切つて一口食べる。

「うんめえ～！」

アウルが歓喜の声を上げる。

そしてまた、肉をほおばり続ける。

二人はしばらく無言で肉を食べた。

まるで、お腹を空かした獸のよう。

「ステイニングも食つか？つめえ～よ

「いや・・俺はいい。」

ステイニングはステラを見ると、ステラのドレスがステーキのソースで汚れそうだったので、彼はナップキンで前掛けを作り、彼女にそれをつける。

「ドレスが汚れるぞ。」

30分もすると、ステーキは無くなつた。
400gは相当な量だと思ったのだが、一人は後一皿ぐらい、いけそうな顔をしている。

「そろそろ出るか。」

クロトはレシートを持つてレジに向かつた。
彼はお金を支払い、外にでて繁華街をぶらつぐ。

「後、1時間50分かあ・・・・」

アウルは不機嫌そうに空を見上げ、立ち止まる。

「ここには太陽がない。」

「それにしてもさ～、ここって雨ふんの？」

ステラは黙つて頷く。

「さあ？どうだろうな。降るんじゃねえの」

ステイニングも口を挟む。

「降つてもさあ、つざくね？雨が降るの嫌だなあ、ボクは」

アウルが不満そうに言つた。そしてまた、歩き出した。

途中、ステラはショーワイングに映る自分の姿を見つめる。ドレスを着たのはこれが初めてだった。

自分が小奇麗なドレスを着ていると、まるで人形のように可愛い。少し回ると、ふわりとドレスの裾は宙を舞う。ステラはそれがうれしくて、ぐるぐると回る。袖もふわりふわりと舞う。

まるで、お姫様のようだった。

先を歩いていたアウルはステイニングに訊いた。

「何やつてんだよ？あれ」

「浮かれた馬鹿の演出」

ステイニングは答える。アウルはますます、解らない顔になる。するとステイニングは軽薄な笑みを浮かべて肩をすくめる。

「お前も馬鹿をやれよ。馬鹿を・・・」

ステイニングもいつもより解放的な気分になっている。しばらくピリピリとした張り詰めた空気の中で『戦闘』をしていたせいで

常に警戒心を高めていたのだが、ここアーモリーワンに着いてからま

それは無くなつてリラックスしている。

ステラは浮かれた気分のまま、踊るように彼らについていく。道行く人々の視線に気づかずくぐるぐると回りながら角を通ると誰かにぶつかつた。

「つおつ・・・とー」

買い物袋がどさつと地面に落ちる。はすみで跳ね飛ばされそうになつた

ステラの体を誰かの手が後ろから抱きかかえて、それを止めた。

「大丈夫？」

無造作に頭上にかけられた声を聞いたので、ステラは振り向く。すぐ目の上に、鮮やかな紅い瞳と吸い込まれそうな黒髪が見えた。自分と同じくらいの年齢の少年だ。

「誰？」

ステラは紅い瞳が嫌いだった。自分の嫌いな言葉に似ているからだ。そして彼女は山猫のように豹変して、少年の手を振り払い、ステイングたちの方へ走り去る。少年は少し驚き呆然として彼女を見た。理不尽だと思った。

向こうだつてよそ見していくくせに、これではまるで自分が悪人のようだ。

すると、少年の後ろから彼の友人らしい人物から声をかけられる。

「・・・胸、つかんでたよ。お前

「いっ・・・?」

まるで、ではなく自分は完全に悪役だったらしい。
これではあの子も怒つて当然だな。

少年は思つ。

「いっのラッキースケベ！」

「え・・・ち・・・ちがつー！」

少年は真つ赤になつて弁解しようとする。

とつその出来事だったのでも胸をつかんでいたとは思わなかつた。
どうせなら、ちゃんと感触を味わつておくのだつた。
不埒な事を考えつつ、自分がさつき胸をつかんだ手を見つめた。

「あつ・・・すいません。怪我はありませんか?」

少年達の横から声がした。紅い瞳の少年はそちらを向いた。
クロトは彼らに謝罪する。

「いえ、自分の不注意だったので・・・」

「すみません、馬鹿な『妹』で」

「妹さん・・・ですか?」

「えりです。今年で16です」

クロトは礼儀正しく答える。これも、オープで教わった事だ。
少年は年齢を聞くと、自分の年と同じだということにビックリする。

(じゃあ、俺と同じ年なんだ)

クロトは再び軽く頭を下げて、ステラ達3人の方に向かった。

四人は町外れの大きな看板の前に居た。電子ボードはザフトのマークを映し出し

宇宙空間にあるプラントをでかでかと映し出した。
さつきからステイニングは腕時計ばかりをみつめる。

先ほどから數十分待っていたので、四人はのどが渴いていた。

クロトはすぐ近くの自動販売機で四人分の飲み物を調達してくると
三人に一本づつ、飲み物を手渡した。

プシュウっという音共にカンのフタをあける。

クロトの飲み物がだいたい半分くらいになつた頃に、バギーが一台
彼らの目の前に停車する。どうやらこれが、待ち合わせている相手
らしい。

ザフトの軍服を着た男がステイニングと目を合わせ、黙つてうなずく。
四人はバギーの後部座席に座る。

バギーは街からさらに離れ、軍事工場の敷地内に入つていく。
入り口のゲートで前座席の男が『偽』のIDを見せ、
VIPを案内する係り員のように振舞う。誰もが彼らを不審に抱か

なかつた。

見学者の姿を見つつ、バギーは工場を走りぬけ巨大なハンガーの前に停車した。

重圧なシャッターが音を立て開く。それと共に、5人は工場の中に入つていく。

案内役の男が武器を渡す。4人はすぐに渡された武器に弾倉を装填する。

ステラは鞄からナイフを抜き放つた。白く光る刃を見ると、彼女に『スイッチ』が入る。これからが本番。今まで見たいに、のんびりとした
彼女はもういない。

クロトは小声で4人に言った。

「あんまり殺すなよ。MSを奪取するまで、動けなくするだけでいい。」

あまり人は殺したくない。なるべく被害は最小限に。
四人は納得しない顔でクロトを見る。

アウルとステイニングは舌打ちをするも、理解は出来たようだ。
ステラはキヨトンとした顔でクロトを見て、頷いた。

ステイニングが目で合図して、みな、一斉に物陰から飛び出す。
誰もが彼女らの進入に気づかないうちに、銃声がこだまする。
ステイニングの連射を食らった兵士達は、なぎ倒される。

アウルは空中で側転しながら両手の機関銃から弾をばら撒く。

ステラは兵士達の中を叫びながら飛び込む。片手のナイフで兵士達の腕や足を切り裂く。兵士達は悶えながら空しく天に銃を撃つ。

ふわりと白いドレスが舞うたびに、血しづきがまだらに描く。

クロトは両手のハンドガンを数発、数人の兵士に発射する。兵士の間接部分を狙つた攻撃に彼らは持つていた武器を落とした。正確なこの攻撃は、昔、アスランに教えてもらつたものだ。

「アウル、上だ！！」

周囲に機関銃を連射しながらスティングはアウルに声を飛ばす。アウルはその声を聞くと、クローラーの上に立つていた兵士達に振り向きもせず背中越しに両手の銃口だけを向けて撃ち落した。

数分のうちにハンガーの内部は制圧された。奇襲であつたとはいえコーディネーターの兵達がたつた5人の男女に敗北した。

ハンガーの中の兵士達はみな、虫の息では合つたが死んでなかつた。クロトはそれを目にすると、こさか自分が恥ずかしくなつた。昔の自分だったら、上の言う事も聞かず好き勝手やつっていたからだ。クロトは周囲を確認して三人に声をかける。

「いいぞ、お前ら！」

三人はすぐに三基のクローラーに飛び込む。彼らは開いたままだったコクピットの中に入り、シートに着く。〇〇を起動させると、手元のモニターが明るくなり、〇〇名が浮かび上がる。

「どうだ？」

ステイニングは一人に訊く。

「OK。情報どおり」

アウルが応じ、ステラも起動動作業を行う。

「いいよ」

まるでいつも乗っている機体のように、格スイッチを押して起動シークエンスをこなす。

「量子触媒反応スタート。パワーフロート良好。全兵装アクティブ、オールウェイポンズフリー。システム、戦闘ステータスで起動。」

エンジン音が低く響く。二機のMSはクローラーごと起き上がる。ロックが外れて、電子ケーブルがはじけ飛び。MSがついにクローラーを離れ

ゆっくりと歩行する。

重傷の兵士が力を振り絞って、警戒ボタンを押す。しかし、遅かった。

クロトは三機が起動するのを確認すると、自分も脱出用の機体を探す。

ちょうど、訓練用なのか『ゲイツR』がある。

使ってほしいといわんばかりに、都合よくコクピットが開いている。すぐにゲイツに飛び込みシートに座ると、クロトもMSを起動させ、機体を

クローラーから起き上がらせる。

三機の“ガンダム”と“ゲイツ”は警報音の鳴り響くハンガーに立ち並び、

その威容である姿を堂々と見せ付けた。

第一話『衝撃』

工場の敷地でサイレンが鳴り響く。

その中、一つのハンガー（格納庫）から

巨大な扉を数条のビームが貫いた。

扉は吹き飛ぶように溶け、ビームが飛び込んだ向かい側のハンガーが誘爆する。

「カガリッ！」

とつさに藍色の髪の青年『アスラン』はオープ連合首長国代表『カガリ』を抱いて、物陰に飛び込んだ。

「なにつ・・・？」

カガリはもがくように身を起こし、爆発があつた方を見上げ呆然と声を上げる。

風で吹き流されていく爆煙の後ろから、見慣れた巨大なシルエットが目に入る。

「『カオス』、『ガイア』、『アビス？』」

議長の随員が、煙から現れたシルエットを目にして驚愕する。

外見から判断すると前大戦で連合から、

奪取した『G』の流れを組まれているのである。

特徴のある一つの目、2本の角を持っているそれは、『ジン』や『ゲイツ』とは

全く違うフォルムだ。

「あれは・・・」

アスランが思わず絶句し、カガリも驚き咳く。

「・・・『ガンダム』?」

『カオス』のシートに着いている少年、スティングは他の『G』タイプに乗っている一人に声をかける。

「まずハンガーを潰す! MSが出てくるぞ!」

『アビス』のアウルがそつなく、ステラに命じた。

「ステラ。お前は左」

「わかった」

ステラは答えると、言われたとおり左方へ『ガイア』で駆ける。黒いモビルスーツは空中で変形し、四速歩行型に形態を変える。それはザフトの『バクウ』に酷似したものであつた。

『ガイア』は四本の足で大地を蹴りハンガーを駆け抜ける。そして背部ビーム砲を放つた。ビームはハンガーの中に並んでいた『ジン』を貫き、さらに誘爆を起こしてハンガーが崩れ去る。

『アビス』は両肩の貝殻のようなシールドから、一本突き出した砲

□から

火を噴き、別のハンガーを容赦なく破壊する。

ステイリングの『カオス』はビームライフルで、式典用装備の『ジン』
を

片端から狙い、破壊する。

次に背中に装備されている『機動兵装ポッド』を開き、数十もの『
サイル』が

高い弧を描き放たれると、並んだハンガーに次々と命中して爆発を
生む。

強襲用機体である『カオス』にとって、うつてつけの仕事だらう。

敵も反撃の狼煙を上げようとしていた。

『ディン』は翼を開いて飛び立ち、『ガズウート』が戦車形態から
一足歩行に切り替わり、こちらに攻撃を集中させる。

ステラはすかさず大地を蹴り『ガイア』でそれらの頭上に飛びぶと
お返しにビームライフルで鈍重な『ガズウート』を破壊する。

たくさんの炎と煙がアーモリーワンを焦がす。

躍動する機体を動かし、鋼鉄の人形達を破壊する。

ステラの血がどんどん熱くなっていく。

(最高だ・・・)の機体は!)

同じ頃、クロトの『ゲイツR』も空中の『ディン』をビームライフルで

狙撃する。ディンは羽と、武装をもつている腕を破壊され、もがく
よつに落とす。

さらに、地上の戦車形態である『ガズウート』を

『ゲイツR』の足で側面から勢いよく蹴り飛ばして横転させる。

クロトは中で小さく「必殺！」と呟いた。

MSに乗ると、落ち着かなくなる自分がいる事に気づくと

彼は苦笑した。

やはりMSに乗つて敵を倒す事は最高だ。この上ない喜びだ。クロトの口が引きつり、口元に笑みが浮かぶ。

彼もまた、ステラ達と同じなのだ。

再び『ディーン』が数機、彼の『ゲイツR』をロックオンする。ロックされたので『クピット』の内部で警報音が鳴る。

クロトは『ゲイツR』を振り向かせ、腰部にマウントされてくるレールガンを『ディーン』の『クピット』に向ける。

トリガーを引こうとした瞬間、キラの顔が脳裏に浮かぶ。

「・・・・」

クロトは『クピット』から、やや左の左翼部分にロックを向けレールガンを発射した。飛行能力を失つた『ディーン』は地面へと落下して戦闘能力を奪われる。

殺してはいけない。そんな事すれば、また『あの頃』に戻ってしまう。

殺戮と破壊を楽しむ悪魔のような戦闘兵器だったあの頃に・・・。

瓦礫の渦の中、アスランはカガリを連れて避難場所を探す。黒い機体が変形し、背中の一枚の翼を展開すると

『ディーン』の『クピット』を両断した。

その爆風が二人を襲う。アスランはすぐにカガリを自分の体で押さえ込み

彼女を爆風から守る。『ディーン』の破片が周囲に飛び散るが

運良くもアスランの体には突き刺さらなかつた。

カガリは恐る恐るとアスランの無事を確認しようと、彼に訊く。

「アスラン・・・！」

彼は彼女を安心させるように、微笑む。

「大丈夫だ」

なんでこんな事になつてしまつたのだろう。

アスランは苛立ちながら思つた。あの三機の『G』タイプの中に乗つてゐるのは

いつたい誰だ？連合・・・？

『連合』と考えた瞬間、クロトの顔が頭に浮かぶ。

違う絶対に違う。彼がいるはずがない。アスランは否定してもクロトの顔が頭から離れなかつた。

考えれば考えるほど彼を混乱させる。

だが今一番大事なのは、カガリを守る事。

彼は周囲を見渡す。そして路上に倒れていた機体に気づいた。
『ザク』だ。先に見た新型だ。

「来い！」

彼はカガリを連れて、駆け出した。

幸運にも『ザク』はコクピットのハッチが開いていた。

「乗るんだつ！」

「えつ・・・・・・・？」

カガリを強引に「クピットに乗せ、彼はシートに座る。

彼は慣れた操作で機体を起動させる。

忘れようにも忘れられない、体に染み付いた動き。

彼は皮肉に思う。

「お前……」

カガリは不安気に彼に身を寄せる。

アスランがMSに触れるのは先の大戦以来だ。

彼には一度と触れて欲しくなかつた代物。

アスランは短く吐き捨てる。

「君をここで死なせるわけにいくか！」

この状況ではむしろ、ここが安全だ。

外よりマシな避難所だ。

さいわい、『ザク』にはどこも以上が無い。

操縦系統も旧型とさほど変わりも無い。

エンジンが低く唸り、頭部のモノアイが光る。

モニターが周囲を映しだし、胸の排気口から熱せられた排気が噴出し、機体の上に積もる瓦礫がバラバラと落ちる。

「よし、いける！」

が、その動きが敵の注意をひきつけてしまった。

目の前に先ほどの黒い『G』が映った。

黒い機体がビームライフルを構える。

アスランはとっさにレバーを操作して、ペダルを踏み込む。

『ザク』はスラスターを噴射すると共に横へ飛ぶと

背後のハンガーに放たれたビームが壁を焼く。

黒い機体は『ザク』のショルダーアタックをまともに受けで

背後に吹き飛ばされる。

アスランは息を呑む。

予想以上のパワーとスピードだ。最初に自分が乗った『G』と変わらない

戦闘能力だ。

黒い機体が起き上がり、今度はビームサーベルを構える。

アスランはそれに応える様に、自らもシールドからビームトマホークを構える。

下がりながらビームサーベルをシールドで受け、ビームトマホークを振り落とす。黒い機体もシールドでそれを受けた。

「くつ・・・」

このままでは不利だ。いぐり『ザク』といえど、このまま長期戦になれば『G』の方がパワーもある。それに戦つ為に、これに乗ったわけではない。

元々はカガリを守り、避難場所を探すため。

黒い機体はビームサーベルを打ち込み続け、『ザク』はそれを受けるので精一杯だった。

ピーチとコクピットの中では警報音が鳴り響く。

（しまつた！後ろを取られた・・！？）

黒い機体と同じ新型の『G』である『カオス』が背後から接近して

いる。

アスランは背筋を凍らせる。脳裏で「やられる」と絶句した。

『ザク』を必死で防御姿勢を取るとするも遅すぎた。

だが、『カオス』の攻撃はコクピットから大きくずれて、ビームサー贝尔が

『ザク』の左腕をもつていく。

『カオス』の背中で放たれたミサイルが炸裂したのだ。

「ふん、これでおあいこだ！」

棒立ちになつた『カオス』の横を戦闘機が過ぎ去る。後から戦闘機に続いて二つの機影もやって来る。

それらの三つの機影は元々一つであつたかのように

『合体』してMS形態に変化する。そして最後に四つめの機影が合体したMSの

背部に装着して、灰色だつた機体色は鮮やかな赤色に変わる。

フェイズシフト装甲が起動したのだ。

そして、背部にある一本ある長大な大剣を抜き放ち、地上に降り立つ。

大剣は柄の部分で結合して、大きく頭上で振りかぶる。

合体した新型の『G』の中で黒髪の少年は憎しみを込めて叫ぶ。

「また戦争がしたいのか！？あんた達は！」

第二話『恐怖』

「こいつ……！」

突如と現れた紅いMSをみてステイングは啞然とする。
特徴的な頭部を見れば、自分たちが乗っている物と同系統なのだろう。

だが、この紅いMSは自分たちの目の前で『合体』したのだ。

ステイング達が啞然としてる中、紅いMSは長刀を降るつて
ステラの『ガイア』に斬りかかる。

「なんだ、これは！？」

ステラは紙一重でその刃をかわし、後退しながら頭部バルカンを乱射する。

しかし紅いMSにバルカン等効くはずも無い。

PS装甲は通電する事によりその強度を高め、物理的攻撃を無効にする。

このPS装甲を持つ機体を倒すにはビームカッザーを使うしかない。

紅いMSは腰部に備えたビームライフルを抜き放ち、滯空中にいた『ガイア』を狙う。

ステイングは援護のためにライフルを発射する。

モニターには、その機体のデータが照合され

と映りだされていた。

「インパルス？…どうこう」とだ、あんな機体の情報は・・・アウル！」

不意に『上司』が言っていた言葉を思いだす。

（アーモリーワンに製造された『新型MS』二機・・それを獲つて
来い）

としか彼等は告げられていない。四機目？話が違う。
ステイングは急いでもう一人の仲間を呼び寄せる。
その間にも紅いMSと『ガイア』は剣を交えている。
ステラは『ガイア』を獣型に変形させ、飛び上がり、紅いMSとす
れ違ひ

『ガイア』が空中で背部のビーム砲を放つ。
しかし紅いMSは、左手に装着してあるアンチ・ビーム・シールド
を掲げて
それを防ぎ、分離して片手にある長刀の一本を『ガイア』に投げつけた。

『ガイア』はすかさず変形して人型に戻し、こちらも
左手に装着したアンチ・ビーム・シールドで防ぐも、重量のある長
刀を防いだ
衝撃はごまかせず、反動で機体は大きく弾き飛ばされる。

「よおーしー行こう！」

時計を確認した男が号令し、後におどけた調子で付け足す。

「慎ましく・・な?」

仮面をつけたその壯年こそステイニングたちの『上司』である

『ネオ・ロアノーク』その人だ。

“ファンタムペイン”的母艦『ガティー・ルー』のブリッジはその指令を耳にして活氣付く。

『ガティー・ルー』の艦長『イアン・リー』は射撃指揮官に命令を下す。

「ゴット・フリート一番、二番を起動。ミサイル発射官、一番から八番、

コリンクトス装填」

ネオはモニターを見ると、宇宙空間に一つザフトの『ナスカ級』戦艦が見える。

距離にしては遠くはないが、こちらの事は気づいていないようだ。なぜなら、『ガティー・ルー』が存在するはずの宇宙空間にあちらのモニターには

何も映つてはいないのだから。

そう。それは視覚的にも、レーダー等の探索機能を持つてもしてもだ。

ネオはまたも陽気な調子で命令を下した。

「主砲照準、左舷前方ナスカ級。発射と共に“ミラージュ・コロイド”を解除。

機関最大。さて、よつやく面白くなるぞ。諸君」

隣に座した艦長のイアン・リーが固い顔に、かすかな笑みを浮かべた。

そしておもむろに声を張る。

「ゴット・フリート！ てえーつ！」

『ガティー・ルー』の主砲が火を噴く。何も無い空間から一筋の光が放たれる。

太い熱線は真っ直ぐに『ナスカ級』をとらえ、一瞬のうちに大きな爆発が生まれた。

別の頃、密かに『ガティー・ルー』から発進した『ダガーリー』がアーモリーワンの港に潜入する。

港口には先ほど『ガティー・ルー』の存在に気づき、それに対応しようと

『ナスカ級』が一隻、発進を急いでいる。

徐々に、港口を出航しようとする一隻の艦の目の前に二機の『ダガーリー』が躍り出た。

『ダガーリー』はバズーカを撃ちこむと、両方の艦は小規模な爆発を起こし、港口を戦艦の残骸で埋め尽くす。

ここまでではネオ・ロアノークの計画通りだ。

アーモリーワンにかすかな振動が、踏みしめた大地に伝わった。

クロト達4人にとって、それは『時間切れ』の合図だつた。

『カオス』『アビス』『ガイア』はまだ、新型の紅いMSに手こづつていた。

『ガイア』の両翼のビームブレイドをめかせ、『カオス』が

着地した瞬間を狙つて攻撃する。一段構えの攻撃にも敵は機敏に反応し、それらを避ける。

別方向で紅い新型MSを支援に来た『ティイン』が空中から叩き落される。青の『G』、『アビス』だ。

ステイリングのスピーカーからアウルが声をかける

「ステイリング、さつきのー」

アウルもさつきの振動に気づいたようだ。

「わかつてゐる。『お迎え』の時間だろー」

「遅れてる。『バス』行つちやうぜ」

「わかつてると言つたろうがーーー」

「だいたい、何だよあの紅いのー新型は3機のはずだろ?」

「俺が知るか!」

アウルが非難がましく言つから、ステイリングはむつとして言い返した。

「どーすんの?あんなの予定に無いぜ?チツ・・ネオの奴

アウルは内心、指揮官に対して毒づく。それはステイリングも同感だ。この三機の情報は手に入つてゐるのに、なんであれは情報が無いんだよ。

「でも、まおつちや置けないだろ？追撃されても面倒だ。」

言いながらステイニングは背後に接近した『シグー』を撃ち落す。ザフトは奇襲から立ち直りつつある。そろそろ、紅いM1と回り、『新型』が現れるかもしれない。

ここで退却したほうが良いことはわかっている。

ステイニングは『カオス』を駆って、紅い機体に躍り出る。

「はん、首でも土産にしようって？」

馬鹿にしたよひと言ひながら、『カオス』の後に続く。

「かつゝ悪こいつて言ひたじやね？そりこいつの

「こいつ・・何故落ちない！？」

ステラが憎々しげに吐き捨てる。

彼女の目に映るのは、例の新型の『G』のみだった。さつきからこれでもか、というぐらい攻撃しているのに、いつも落ちる気配が見えない。逆に痛手を見せられた。

こちらは4機だといふのに。こんな目障りな敵には出合つたことが無い！

「ステラ、こひま一回退くぞーーお前のエネルギーもヤバイだろ？」

『ガイア』の『クックピット』から信頼する上官の声が聞こえる。

「・・・すぐに沈める・・・！」

クロトの声も届かない。彼は彼女が既に『切れ気味』だと解った。完全に頭に血が上ったステラは、エネルギー切れも近いのにビームライフルを『G』に撃ちこむ。

「こんな・・・私は・・・私は・・・」

紅いMSが長刀を構え、『ガイア』に突っ込む。

『ガイア』はシールドで長刀を受け止める。『ガイア』はすかさず離れて、ビームライフルを撃ちこみ続ける。

「やめる、ステラ！離脱だ！クロトの声が聞こえなかつたのか！？」

『お仲間』のステイニングの声が一瞬、耳に止まる。

だが、私のような『最高の戦士』に『汚点』は残せない。

汚点、つまり新型の『G』を落とせない事。しかも3機がかりでだ。

ステラのプライドを傷をつけた、このMSだけは許せない・・・！

「私がつ・・・こんなあああー！」

苛立ちに沸騰しそうな彼女の耳に、アウルが皮肉げに投げつけた言葉が突き刺さる。

「じゃあ・・・お前にここで死ねよ！」

死・・・死ヌ！

熱くなっていた体が一瞬で氷のようになる気分になった。
まるで血液に液体窒素でも流し込まれた気分。

全身を満たして一気にバラバラ砕け散る。

「ネオには僕から言つていおいてやる。さよならつ・・てさー。」

死又・・私ガ・・・死又・・・?

「アウル! お前!!」

「だつて止まらないじゃん。ステラの奴」

「黙れ馬鹿! 余計な事を・・!」

『お仲間』一人の声がコクピットで響いたが、ステラに届く事は無い。

呆然とステラはコクピットで響いたが、ステラに届く事は無い。
死ぬ。忘れていた感情を一気に呼び起こし、圧倒的な強さで身に迫る。

それは、『恐怖』だつた。

「嫌! 嫌あああ!」

彼女は絶叫し、機体を振り返す。

急加速して天頂方面に離脱しようとすると、それに続いて『カオス』
と『アビス』
が『ガイア』の後に続く。

「結果オーライだろ?」

アウルが悦に入ったようにステイリングに言い放つた。

クロトは三機の『G』が天頂を田指すのを確認すると、パイロット
スーツの

腰のポケットから小さな管を取り出す。

クロトのパイロットスーツだけ少し特別で、首筋辺りに穴がある。
彼はその穴に管を突き立てる。チクッと小さな痛みと共に何かが割
れる
音がする。

クロト専用の「グリフェプタンだ。と言つても、依存性が無く禁
断症状には
ならない。この薬はアドレナリン、脳内麻薬を一瞬で起こす事が出
来る。

クロトの瞳が白色に変わる。彼は『ゲイツR』を駆つて
紅い新型の方へ向かう。

「俺が時間を稼ぐ。お前たちは早く脱出しきー！」

『ゲイツR』の防盾からビームサーベルを形成する。
例の紅いMSの友軍機『ザク』が増えている。
それぞれにパーソナルカラーがあるのか『赤』と『白』の『ザク』
だ。

三機のMSに『ゲイツR』一機で立ち向かう。
久しぶりに『興奮状態』である中、口癖である言葉を張り裂けるほ
ど叫ぶ。

「でっしゃああああああ……瞬殺………」

第四話『感覚』

『ゲイツR』が一機、空中で新型MS群に猛攻を仕掛ける。その動きは並みの『ゲイツR』をはるかに凌駕していた。

『ゲイツR』が紅いMSにビームライフルで牽制し、隙を狙つてはサーベルで斬りかかる。紅いMS『インパルス』は『ゲイツR』にてこずる。その時、『ゲイツR』の背後から、赤色の『ザク』が超射程距離ビーム砲オルトロスを構え、『ゲイツR』に発射する。『ゲイツR』は辛うじてその攻撃をかわすものの、右肩部分にビームがかすり

融解した。赤色の『ザク』に腰部のレールガンを返そうとするが、横から

白色の『ザク』が肩を突き出し、ショルダータックルをする。

『ゲイツR』はその反動で吹き飛ぶ。『ゲイツR』が圧されている。

そんな事は最初から解っていた。

このままだと、隊長が袋叩きにされる。

「・・・やつぱり、ほうつちやおけねえ！」

『カオス』の背部に装着されている機動兵装ポッドを2つ発射するとそのポッドの砲口は『インパルス』と白色の『ザク』を狙いつける。

『インパルス』と白色の『ザク』はそれに気づき、回避行動をとるが

『インパルス』が回避を取った先に

防盾からサーベルを伸ばして待っている『ゲイツR』が目に映る。防御をとる間もなく、『インパルス』の長刀は折られた。

「……いつら、連携が……」

『インパルス』のパイロット、シン・アスカは内心で驚愕する。しかも、盗んだ機体をここまで操るとは一体何者なのだ。

『カオス』の背後を預けるように『ゲイツR』が立ち並ぶ。

「ちつ・・まだなのか？」

クロトは苛立ちながらステイニングに訊いた。
他の2機は何をモタモタしてる。早く『穴』を開けて脱出しなければならないのに。

ステイニングに喋っている余裕は無かつた。

考えてみれば、彼等は初陣なのだ。

どんなに腕が立つからとはいえ、実戦ではまるつきり初心者。しかも、新型MSの登場で困惑している。

相当なストレスがたまっているはずだ。

（俺も・・そうだったか・・。最初は）

クロトが最初に出撃したことを思い出す。
オノゴロ島だつた。

『レイダー』を駆つて『オープ』のMSを狩る。

その時、現れたのがキラが乗る『フリーダム』だ。

『カオス』が機動兵装ポッドを動かして、『インパルス』と白い『ザク』を狙う。

「しつこつ・・・・・」

筒型のポッドからビームやミサイルが飛び出す。

白い『ザク』はシールドで防御するが、『インパルス』は盾を投げつけて、ビームとミサイルを防いだ。

シンは『カオス』の先にいる、他の2機を見た。

『ガイア』と『アビス』は内壁に穴を開けようと、立て続けに攻撃をしている。

このままではアーモリーワンに穴が開いて、脱出されてしまう。まずい、と思つて新型戦艦『ミネルバ』に要請する。

「ミネルバ！ フォース・シルエットを！ ！」

通信でミネルバに要請すると、通信管制を担当するメイリン・ホークがパネルを操作して、戦闘機を射出する。すぐに戦闘機は、戦火が広がる戦場に淡々と現れた。そして『カオス』の頭上を通り過ぎた。

ステイングは一瞬、その戦闘機に注意をはらつ。

「何だ？ 戦闘機・・・？」

その戦闘機は先端部分をバージし、機体後部に装着されているコニットをパッジして
『インパルス』に向かう。
すかさず、『インパルス』も背部に装備されているコニットをパ

先ほど分離したユニットを背部に装着する。

それは、赤外線を通じて行われた。

『カオス』と同じ原理なのであつ。『ドラグーンシステム』で行われているのだ。

「な・・・!?

ステイングは内心、舌巻く。

またしても目の前で合体した。

彼はまさかと思った。

「装備を換装出来るのか!-?」

『インパルス』が新たにユニットをマウントすると、機体の配色を変え

紅色から蒼色に変わる。

『インパルス』はビームライフルを装備し、『カオス』に構え撃つ。その攻撃をシールドで防ぎつつ、返すようにビームライフルを撃つ。『カオス』はビームサーベルを抜き放ち、『インパルス』に近づきサーベルを振り下ろすが、『インパルス』は今まで以上の運動性能で飛び上がり、かわした。

「早い!-! 気をつけろアウル、そっちに行つた!-!」

アウルはステイングの声を訊くと、機体を旋回させて
『インパルス』に砲を定める。

両肩のシールドが開くと、両方にそれぞれ3門づつ内蔵されているビームを発射する。『インパルス』はそれを回避して、ビームサーベルで

『アビス』に斬りかかるが、『アビス』は肩のシールドで剣を受け

た。

「「つおおおおおおー。」

『カオス』に乗る、ステイリングが咆哮すると変形し、全武装を展開させてアーモリーワンの内壁に攻撃する。今まで、『アビス』と『ガイア』が攻撃していた内壁は赤く融解していく。

その上に火力の高い『カオス』の全武装が火を噴いたのでついに融解していた壁は爆発と共に破壊されて、穴が開いた。

「しまった！」

ぽつかりと開いた穴に漆黒の宇宙が広がるのが見える。急速に減圧されたせいで、アーモリーワンの空気が外に流出し始める。

3機の『G』はそれと同時に外に押し出されるようにして、脱出した。

「くつそおー逃がすかあーー！」

シンが必死に機体を立て直しながら三機を追いかけよう、『インパルス』も宇宙空間に流れていく。『インパルス』に続いてレイ・ザ・バレルが乗る白い『ザクファン

トム』が躍り出た。

「くつ・・逃がすもんか！」

ルナマリア・ホークが乗る赤色の『ガナーザクウォーリア』が3機の『G』を追いかけようとするが、目の前には奪われた『ゲイツR』が邪魔をして行かせようとしない。

「なんなのよ！ いつたい！ ！」

ルナマリアが『ゲイツR』に長射程距離ビーム砲『オルトロス』を構えるが『ゲイツR』の動きに翻弄されて狙いが定まらず撃つことが出来ない。

『ゲイツR』は防盾ビームサーベルを伸ばし、赤い『ザク』に近づいて長距離射程ビーム砲を斬りつけた。武器が爆発してルナマリアの目の前が一瞬、見えなくなると次に大きな振動が襲つた。

『ゲイツR』が『ザク』の腹部を蹴り飛ばしたのだ。

「きやつ・・！」

ルナマリアが声を上げる。『ザク』は建物の陰に座るように転び動かなくなる。

「えつ・・ちょっと！」

ガチャガチャと機器を動かすルナマリアであるが、今の衝撃でどう

やら

機体が壊れて、動かなくなつたらしい。
それもそのはずである。整備中の機体を動かしたのであるから
すぐに壊れてもおかしくはない。

死

ルナマリアの脳裏にその言葉が過ぎるが、『ゲイツR』は
それをせず、そのまま三機の『G』の後に続くよう
宇宙空間に飛び出しに行つた。
ルナマリアは恐怖が胸に詰まつて声が出せず
そして、そのまま『ザク』の中で救援を待つしかなかつた。

『エグゼス』と呼ばれた戦闘機のフォルムは前大戦で使用されていた
『メビウス・ゼロ』に酷似したものであつた。後部には『ガンバレ
ル』と呼ばれた

兵装ポッドを搭載してある。これは『ドラグーンシステム』とは違
い、無線式では無く
優先式である。

『エグゼス』のコクピットの中でネオは奇妙な感覚を覚えていた。
その『感覚』に導かれるように『エグゼス』を動かして
アーモリーワンに向かっていく。

彼等が失敗するわけが無い。

あるとすれば何か、不測の事態が起きたのである。

アーモリーワンの周辺に来ると、目の前に小さな穴が開いているの

が分かつた。

その穴の近くに6機のMSが交戦しているのが分かる。

その内の三機は奪ったMSであろう。

『ゲイツR』が三機を支援しているようだ。どうやらあれには味方が乗っているらしい。

そして残りの2機。

一機は白い『ザク』。だがもう一機は見た事も聞いたことも無い。まさしくUNKOWN（未確認機）だ。

四機目の『G』？

「いや確かに、俺のミスかな。」

ネオは彼等が遅れた理由を悟り自嘲した。

キーボードを操作する。“ガティー・ルー”へ通信文だ。通信文を書き終えて、ネオは戦闘モードに入る。

「さて・・その機体も頂こうかー?」

赤紫色の戦闘機の後部から『ガンバレル』と呼ばれた筒型のポッドが新型の『G』に対して飛び出した。

シンは誰かに見られる感じがした。次に熱い感覚に襲われる。

「下?...」

『インパルス』は横に回避すると回避した場所にビームが飛んでいた。

どこからの攻撃だ？

再びさつきの感覚に襲われると、赤紫色のMAが『インパルス』に

突つ込んでくる。

「モビルアーマー…？」

マゼンタ色の『エグゼス』は先端に装備されているビーム砲を撃ちながら

『インパルス』に突つ込む。『インパルス』はビームをシールドで防ぎながら

かわすと『エグゼス』は『インパルス』を通り過ぎ、ガンバレルを操作して

『インパルス』に砲口を定める。

「当たるか…！」

シンはそれを回避するが、ガンバレルは一個ではない。全部で4つあるのだ。

彼が回避した場所に2つのガンバレルは待っていた。

そしてビームが『インパルス』を捕らえるが、『クピット』には直撃せず

全てシールドで防いだ。

「なかなかの腕前じゃないか。ザフトのエース君」

ネオの『クピット』で警報音が鳴り響く。『インパルス』の両機の白い『ザク』が『エグゼス』にビームトマホークを振り下ろす。

「ちいっ…！」

ネオは被弾を覚悟した。

「そりゃああ激殺！！」

クロトが駆る『ゲイツル』の腰部にマウントされているレールガンが火を噴くと白い『ザク』の背中に被弾した。

「くうつ・・・」

『エグゼス』の中でネオは内心、驚く。

「まさかねえ・・・ザフトに！」まだやる奴等がいたなんて

『エグゼス』の中でクロトの声が聞こえる。

「ネオー！」のままじやーーー！」

「分かつてゐー！」

ネオは先ほど被弾した『ザク』にガンバレルを向けようと再び操作する。

白い『ザク』は体勢を立て直して、『エグゼス』と向き合つ。

向き合つた瞬間、一人は何故だか解らなーいがお互いの存在を認識する事が出来た。

その奇妙な感覚の中で一人は口をそろつてコクピットで言つた。

「ネオ・・ネオ・ロアノーク・・？」

「レイ・ザ・バレル・・？」

2機は一瞬、呆けて『エグゼス』は『ザク』の後ろを通り過ぎた。
ネオは不思議に今の共鳴を思つ。

「この感じは・・・？」

さつき、クロトが割つて入る前に不思議な声を訊いた。

(この敵は普通とは違つて――)

通信の混線ではない。はっきりと脳に直接とどいたセリフ。
その『レイ』とか言つ男の声と同じだ。
戸惑いつつネオは好奇心を覚える。

(この感じ・・・まさか・・・奴が?)

ネオは久しぶりに『あいつ』の感覚を思い出した。

「確かに・・・この敵は普通とは違つた」

ネオは笑いながら『エグゼス』を駆つた。

「戦艦？」

ネオはアーモリーワンから回り込んでくる戦艦に気づいた。新造艦であろう。港が復旧したのか？それにしても早すぎる。

先ほどネオが戦闘に入つてまだ数分しか経っていない。足が速いようだ。

「欲張りすぎは・・よくないか。」

ネオは『エグゼス』を旋回させて、母艦に帰還する。それと同時に『ゲイツR』も反応して『エグゼス』の後に続く。突然の退却でシンとレイは反応できず、あつと/or/間に距離を開ける。

それにもしても、ネオが乗る『エグゼス』と互角に戦えるあの白い『ザク』は一体何者なのだろう。クロトは疑問に思いながら“ガティー・ルー”に帰還するのであった。

“ガティー・ルー”のフリーラームで息を整えているエクステンデットの三人。そのなか、余裕な顔をして入ってくるのが赤髪の青年、クロトであった。

クロトは自動販売機のボタンを押して飲み物を買う。紙コップに液体が落ちて、適量まで浸ると同時に小さい扉は開き紙コップを手にとり、それを口にする。

暖かいコーヒーが乾ききった喉を潤し、体が温まるのが分かる。クロトは飲み物をすすりながら、三人の方へ振り向き見る。息を整えている三人を見ていると、若かつた自分を思い出す。薬の禁断症状に苦しみ、息を整えるどころでは無かつたあの頃を。

「ふう」

紙コップの中身が無くなると、三人に言った。

「そろそろ、行くぞ」

三人はクロトの方に首を傾げ、立ち上がりクロトについていく。向かつた先は薄暗い部屋の中心に三つドーム型のベッドが置いてある。

彼等三人は手前の部屋で服を脱ぐ。

ステイングとアウルは、上着を脱いだだけで、シャツとズボン姿だ。しかし、ステラはドレスを脱ぎショーツと下着姿だった。脱いでいる最中はクロトとネオはまじまじと見つめ、アウルとステイングは赤面しながらそっぽを向いていた。ステラはその男四人を不思議そうにいつも見ていた。三人はベットに向かい『寝る』準備をする。

ステラはいつか街に行つたとき、クロトに買って貰つた小さなクマの人形を抱いて寝る。

三人の寝顔はとても愛らしい。

「ま・・成功！つて所ですか？ネオ」

クロトが昔の調子でネオに訊いた。

「ああ。しかしあま・・」うして、こいつらを見ていると
いつちや悪いが、連合軍つて嫌な事ばかりするよな。」

クロトの方を見ながらネオは微笑しながら言った。

「そうですね・・。正直、俺もそう思つてます。」

クロトも同意する。ネオは再び三人の方を見て、何かを思つ。
連合軍の非道さは、誰にだつて明らかだつた。
自分たちがしている事は確かにいい事かもしれない。
だけど、クロトや彼等三人の経緯に至つてはやりすぎている。
コーディネーターを倒すためとはいえ、数多の犠牲と失敗を重ねて
作り出した

人間兵器でコーディネーターを討つ。馬鹿げた話だ。

「だから俺は戻つたんですよ。連合に」

数ヶ月前に言つたクロトの言葉。

(俺は・・俺のような奴らを救いたい)

二人はその場を後にしながら会話を続けた。
ブリッジに一人は着くと、艦長のリーが出迎えた。
ネオはリーに尋ねる。

「ポイントBまでの時間は？」

「一時間ほどです。」

オペレーターが変わりに答えて、リーが探るように尋ねる。

「まだ追撃があるとお考えですか？」

「わからんね」

軽い口調であつさつと答える。

リーは再び尋ねる。

「彼等の最適化は？」

「おおむね問題は無いようだ。皆、気持ちよさげに眠っているよ」

エクステンデットは暗示によって死への恐怖を忘れ、潜在能力を高め
コーディネーターを超える力を身につけたパイロットだ。

ブーステッドとは違い、インプラントと薬での強化では思考能力と
判断能力を失い

作戦行動時間をおーバーすると使い物にならなくなるが
エクステンデットは精神的な強化なので判断力、思考力を確保し
作戦を行う事が出来る。

「ただ・・・アウルがステラに“ブロックワード”を使つてしまつた
らしくてね

ちよつと厄介と言つ事だが・・・」

「あれは、仕方なかつたですよ。ブロックワードを使わなかつたら
ステラはやられてましたからね。」

クロトが弁解するようにネオに言った。

彼等二人には禁句が設定されている。ステラの場合は『死』という単語だ。

ブロッックワードとはエクステンデットの暴走を抑えるものだ。例えば、一年前のクロトのように作戦に支障がでるほどの無駄な破壊行動

裏切りなどだ。ブーステッドは薬での禁断症状を恐れて戦っていたがエクステンデットは薬物を使用しないので裏切る事が可能だ。

なのでブロッックワードは必然と設定しなければならないのであつた。そして、この禁句を言われると、今までに溜めて込んでいた恐怖を呼び起し、パイロットの精神を衰弱させてしまうのである。ブロッックワードによつて蘇つた感情は睡眠中に消去される事になる。恐怖だけでなく、次の戦闘に支障がでるマイナス要因を全てリセットすることも出来る。

この『メンテナンス』によつてパイロット達は常に最高の状態を維持して戦うに臨めるのである。

「何があるたびに、ゆりかごに戻さねばならないパイロットなど・・・

・
ラボは本当に使えると思つてゐるのでしょうかね？」

「それでも、前よりは大分マシだろ?」いつのまゝの言つ事はちゃんと理解している

クロトはネオの台詞に反応し、ムツとして言い返した。

「皮肉・・・ですか?」

ネオは軽く笑い、クロトに返す。

「ま・・本当の事だりつへ、」

クロトは言い返せずに沈黙した。

彼は、ブスツとした態度でネオ達がいる後ろの席に座つて、携帶しているゲームを取り出して、始める。

「今は何もかもが試作段階みたいなものだからな。艦もMSもパイロットも・・・そして、この世界も」

「ええ。わかっています。」

「やがて全てが本当に始まるときが来る。」

ネオは微笑み、リーの手を見つめる。

「・・・・我等の名の下にね」

「やはり、来ましたか・・・」

リーが淡々とつぶやき、肩をすくめた。

新造艦“ミネルヴァ”は予想よりも早く、この二つの距離を縮めている。

「あー。ま、ザフトもそつ寝ぼけてはいよいよつだ」

ネオは微笑しながら、 “ミネルヴァ” を見て、その感想を言つと
彼は声を張り上げて命令をする。

「いこで一気に叩くぞ！総員戦闘配備、パイロットをブリーフイン
グルームへ」

ネオが命令すると、やれやれつといった感じでクロトはゲーム機の
電源を
切つて、三人の元に行つた。

アラーートが鳴り響く中、ステラは目覚めた。

他のベットを見ると、二人がいなかつた。先に行つたのだろう。

軽く目をこすると涙の雫が指先についた。

何故、泣いていたのだろう？

なにも泣く事はないのに。

「起きたか？ステラ」

「クロト・・・」

大好きな人達と一緒にいる自分は快適なのに。
自分は幸せなのに。

「出撃だ。行くぞ」

「うん・・・」

二人がパイロットロッカーに入つていくと、すでにほとんど着替えた姿のステイニングとアウルが楽しそうに会話していた。

「あの新型艦だつて？」

アウルがステイニングに笑いながら訊いた。

「ああ。来るのはあの合体野郎かな？」

ステイニングとアウルは機嫌がいい。戦闘前はいつもこうだ。ステラ自身もMSにこれから乗ると思つと、ワクワクする。

「なら・・今度こそ生け捕るか・・」

「どうちにしる、また楽しい事になりそうだな、ステラ」

ステイニングに話を振られ、ステラは少し戸惑つた。
話をよく聞いていなかつたので、どう答えればいいか分からなかつた。

二人の仲間はぼーっとした彼女の顔を見て、苦笑した。

「お~お~、あんまりステラを虐めるなよ~」

含み笑いをしながらクロトは一人に言った。

「ま、ステラからまともな答えが返つてくるはずがないか~」

アウルは茶化すようにしてステラを見ながら言った。

ステラはアウルが笑つていたので、キヨトン、としてアウルを見る

しかなかつた。

クロトと他の三人はMSテックに着くと、彼等の愛機の前まで行つた。

左から緑色の『カオス』、鮮やかな青色の『アビス』、黒色の『ガイア』

そして、黒と白の色が特徴的で見た感じは『ストライク』に似ている。

しかし装備は両手には拳銃、背部のストライカーパックは今までに見たことがない

物だ。『ストライクノワール』と呼ばれたその機体が、クロトの新しい武器なのだ。

「OSは『レイダー』に近い物に変えてあります。

少佐なら機体のスペック以上の戦果を発揮できると思います」

クロトは整備兵の話を聞くなり、軽くジャンプして「クピットに向かう。

シートに座るとすぐに、OSを起動させる。

機体は発進準備が整う。

「クロト・ブル。ストライクノワール。出るぜえ！」

『ストライクノワール』は漆黒の宇宙に飛び出し、3機の後に続いた。

4機のMSは小惑星を巧に避けながら、相手が出るのを待つた。

攻撃の合図は、戦艦が“ミラージュ・ロロイド”を展開させたらだ。4機のレーダーに例の『合体野郎』と赤色の『ザク』、及び『ゲイツR』が2機と小隊を組んでいる。

母艦が“ミラージュ・ロロイド”を展開させた。

合図だ！

「よし！攻撃開始だ、派手に暴れてやれお前ら！…」

小惑星の陰から4機の『G』が一斉に飛び出す。

『アビス』が胸部と両肩に内蔵されているビーム砲を同時に発つとミラーの残骸の後ろにいた『ゲイツR』を蜂の巣にする。

『カオス』が機動兵装ポッドを一つ射出して、『ゲイツR』を捕らえる。ポッドから放たれたビームは頭部とコクピットを貫くと、推進剤に火がついて

『ゲイツR』は爆発した。

「あつという間に一機も…そんなバカなつ！」

ルナマリアが悲痛な声をあげ、シンは怒りをかみ締める。その時、手元にレーザー通信で送られた電文が入った。それに目を走らせたシンは呆然とする。電文は敵艦の奇襲を受けた“ミネルヴァ”が帰艦を促すものだった。

「“ミネルヴァ”が！？」

ルナマリアはその電文を見て、驚愕した。

「私たち、まんまとほまつたわけ！？」

「ああ、そういうことだね！」

ヤケになるようにシンが返す。

とたんに前方から、『カオス』の兵装ポッドが目の前に現れる。

「くっ…」

シンは声を上げて、シールドでポッドから放たれたビームを防ぐ。

「けど…これで戻れって言つたつて…！」

シンは次々と追いかけてくるビームをかわすのが精一杯で母艦に戻る所ではなかった。

焦れば焦るほど、シンの手元を狂わせる。

戦況は一方的に不利な状況に置かれた。

「逃がさないよ…捕縛…！」

クロトの言葉と共に、『ノワール』の両掌に装備されているアンカーを飛ばす。

赤色の『ザク』はアンカーに足を絡められて、体勢を崩した。

「きやああ…！」

ルナマリアが悲鳴する。

「ルナア！くつそ！新型か！？」

「へへへ・・逃がすかよ赤いの！！」

『カオス』が変形しMA形態に変わると、先端の部分からビーム（カリドウス改）が放たれる。

だが間一髪のところで、『インパルス』がシールドを掲げて防ぎ両肩に装備されている“オルトロス”を構えて『ノワール』に放つ。『ノワール』はすかさず、アンカーを切り離して高出力のビームをかわした。

「さすがエースって所かな」

クロトが感心して感想をもらした。

「さて・・遊んでやるかな・・・ぞいつるーお前等ーー！」

クロトが罵声を飛ばして3機の『G』を一回下がらせる。アウルとステイングはそれに苛つき、無視しようとしたが、JUJで命令無視したら

『禁句』を言われると思ったのでやめた。

しかし、たった一機で2機のMSに立ち向かうなんて馬鹿なことをすると思つた

彼等ではあつたが、次には啞然していた。

『ストライクノワール』が“ショーティー”と呼ばれる小型拳銃型ビームライフルを連射し赤色の『ザク』を牽制する。赤色の『ザク』が後退するのを確認すると

次に両肩に装備されているビームブレイド、フラガラッハ3に装備を持ち変える。

『ストライクノワール』は『インパルス』に突進してビームブレイドを振り下ろす。

『インパルス』は“ビームジャベリン”に持ち替え、応戦する。

二つの得物が交差してスパークを上げる中、遠距離から赤色の『ザク』が

超長距離ビーム砲からビームを発射して『ストライクノワール』を下がらせる。

「大丈夫、シン？」

「くっ・・遊ばれてる・・！」

今度はうちに仲間の機体が攻撃すればいいのに、高みの見物をするかの「ことく

何もしてこない。作戦の内とは考えられない。

たった一機のMSにこつまで、てこずるなんてシンは思えなかつた。シンが『インパルス』のパイロットに選ばれたのは努力と才能だつた。

アカデミーでは他の候補生を差し置いて、だんとつのトップであつたのに・・

「こんなあああー！」

『インパルス』は腰部にマウントをねてあるビームライフルを連射するが『ストライクノワール』には、かすりもしなかつた。

「ちえ・・クロトばっかり、ずるいぜ」

アウルが「クピットで愚痴を溢す。

「しかたないだろ・・?まあ・・少し癪だけどな。」

ステイングもアウルに同意する。

確かに上官だからといって、これは無い。

彼等三人が出た意味が無いからだ。

「次の戦闘になつたら、隊長は俺たちに華を譲つてくれるはずさ。
アウル」

その直後。三人の背後で綺麗な花火が三つ打ち上げられた。

「ああん?」

クロトも機体を動かすのをやめて、花火を見上げる。

「ネオの奴・・しくじつたか?」

「クピットの中でクロトは咳き、三人のほうへ下がり距離をとる。

「ずりいよークロトばっか!」

アウルが溜めていた文句をクロトにぶちまける。
ステイニングはモニター越しでやれやれ、といった顔で呆れてアウルを見る。

「悪い悪い。ちょっと調子に乗つてな」

クロトはその場から逃げ出すように母艦に戻る。

「あー・・」

ステラはうつとりとしながら、花火を見ている。
3つの花火は赤色、青色、黄色と分かれ、どれも純粹に綺麗だった。

「ステラ、ネオが呼んでるぜ。『帰つて来い』ってさ」

『お仲間』のステイニングの声を聞き、ステラは機体を動かして三人の後に続いていった。

シンは『クピット』の中で息を整えながら、帰還していく四機を見つめた。

三機の『G』は単体で戦えば自分と互角ぐらいであるので何とか対応できる。

しかし、隊長機なのか黒い『G』は無理だ。
機体越しに何か違和感が来る。

「大丈夫？シン・・」

ルナマリアがシンを心配そうに問う。シンはとつあえず、ああ、と答えた。

「追撃はしなくていいのかな？」

「黒い『G』タイプが強いよ。今、追撃しても勝ち目ないし・・・」

「そう・・。私たちも帰りましょう。“ミネルヴァ”へ」

『インパルス』と『ザク』も機体を動かして母艦に帰還する。

シンは帰還途中に妙な違和感を漂わせていた、あの黒い新型機の事を考えていた。

フォース・シリエットを装備させた『インパルス』でも歯が立たなかつたと思った。

しかも、攻撃するときに重圧感を発せられていた。

それは以前にも感じた事があった。

(Uの間の紫色のM Aと同じような感じだった)

この妙な敵との遭遇がシンにとって、大きな成果になる事は彼にはまだ知る由も無かった。

第六話『恋心』

『ユニウスセブン落下から数日がたった。

私、クロト・ブルはユニウスセブン落下の際、一機のザク・ウォーリアードと戦闘を行っている。

そのザク・ウォーリアードのパイロットは、いまや伝説的パイロットである

ザフトの元フェイス、アスラン・ザラ。

私は彼が戦闘ではなく、破碎作業を行っている事に気づくと、その場で命令を無視し

独断で破碎作業に参加するも、ユニウスセブンを完全に破壊することは不可能だった。』

キーボードのキーを押すのを不意にやめるクロト。

何故、あんなところにアスランがいるんだ？

アスランはオープにいるはずだ。何の理由があつてザフトの艦に？

クロトはため息を漏らす。

現在、クロトと他のエクステンデットを含めた4人は地球に降下し、それぞれの

休暇を楽しんでいる。休暇を取っている地域は非戦闘地域だからだ。外はもう暗くなつていて、波のせせらぎがなんとも美しい。何年も見ていなかつた気がする。

他の三人はそれぞれ別々の趣味に漫つていた。

緑髪の少年、ステイキングは自分のパソコンを動かし、ザフトの新型機『インパルス』の戦闘シミュレーションを行つている。

青髪のアウル・ニーダは今、外から戻つたらしく、汗をかいて

いるから

走ってきたのだろう。

唯一の少女、ステラ・ルーシュは自らが飼っている熱帯魚をつつと
りと見ている。

その顔は何とも言えないくらい幸せそうな顔だ。

兵器として生まれた彼女に『戦場』というステージを与えなければ、
極普通の少女なのだ。

「明日、ザフトの基地にラクス・クラインが来るみたいだぜ~」

アウルが唐突に口を開いた。
ステイニングは肩をピクリと動かして、パソコンを閉じ、
彼に真剣な顔で訊いた。

「それ・・本当か?」

「ああ。外で走つてたときにザフトの奴らとすれ違いに聞いた。」

実はステイニングは、ラクス・クラインのファンなのだ。
その事は、クロトと本人しか知らない。

「明日、ザフトの基地を見に行こう。戦力とかも気になるし・・

「見に行きたいだけだろ・・」

アウルが皮肉気に呟いた。

あんなコーディネーターの歌声の何が良いのだが・・
所詮は作られた存在だろ?あの容姿も、声も、体も!全部が作り物
だらうが。

アウルは複雑に思いながら、冷蔵庫の扉を開けて飲み物を手に取つ

た。

一方、ステイキングはキーボードを操作して、とあるホームページを開いて見ていく。

トッカページには、派手な服装のラクス・クラインが映っていた。

ラクス・クライン フアンクラブ

アウルは飲み物を飲みながら、パソコンの画面に目を向けると嫌な顔をしてステイングに訊いた。

「そんなにいいの？ その、コーディネーターは・・・」

ステイキングはそんな、アウルをちらり、と見るのがすぐに
パンロロンの画面に顔を戻る。

アリスは気分を害したのか
舌打ちをして
隣にあるソーテーの上
に寝転がる。

「なーにふてくせれてんだよ?」

「なんでもねえ——よ！」

「ふんつ・・！」

お互いに苛立つた一人。

ステインングにしてよく噛み付いてくる。

いつもは、はいはい、と適当に済ませて、アウルをなだめるのだが・。

憧れのアイドルに対していちやもんをつけられたからであろうか？

「みなさ～～ん！ラクス・クラインで～す！」

空中からド派手に降下してきたのは、ピンク色のザクの掌の上に乗るザフトのアイドル、ラクス・クラインだつた。ピンク色のザクに乗るラクスの声を聞くと、回りのザフト兵達はそれに応えるかのように歓喜の声を上げる。

いや、ザフト兵だけでなく、この町『ディオキア』の住人もそうだ。そして一人だけ、連合軍のにもかかわらず、満面の笑みで

「ラ・ク・ス！」

と叫ぶ者もいる。

クロトを含めた4人は『ディオキア』のザフト基地施設の近くでジープを停車して

ラクス・クラインのコンサートを眺めている。

と言つても、ステイング以外はまるで興味を示していないわけであるが。

ピンク色のザクの手の上でラクスが歌いだすと、ラクスのファン達は一斉に

手拍子を合わせる。ステイングもそれに乗つて、自らも手を叩き始める。

アウルは呆れ果て、終わるまでジープの中で眠つているし

ステラは海を眺めている。

が、クロトだけは眉を細めてラクスを見ていた。

知つてゐるからだ。あれが本物のラクスでは無い事が。

本物のラクスは今頃、オープにいるはずだ。

コンサーントが終わった時はもう日が少し暮れていた。
ステイニングは満足気にジープを運転している。

「でも、なーんか楽しそうだつたよな。ザフトの奴ら」

アウルはシートを後ろに倒して、眠そうに言った。

「そんで、結局また戦うの？あの艦と？」

結局のところ、ステイニング達4人はラクス・クラインのコンサーントを觀に行つた訳
では無いのだ。『デイオキア』に停船中のザフト艦『ミネルヴァ』
の情報を

自分たちで確認したかっただけなのだ。

実質、その仕事は1割で、9割がたはコンサーントだったのであるが。

「そうだろうな。まあ、ネオはその気だひつ」

「ふーん・・何か面倒くさいなー。」

「俺たちにとつて必要なのは、この戦争の行く末とかじゃない。
ようは、勝つか負けるか、だ。」

「わかつてゐよつ・・。俺たちに負けは許されないんだろ？」

アウルは面倒くさそうに答えた。

だが、ステイニングは念を押して再び言い放つ。

「そうだ・・・！ファンタムペイン（俺たち）に負けは許されねえ。」

ステイニングはアクセルを踏み込んで、スピードを上げた。

俺たちは勝つために生まれてきた。コーディネーターに勝つために。でも俺は違う。勝つではなく負けない存在になる。負けない。負けちゃならない。絶対に・・絶対に。負けなければ、いつかは勝てる。そう信じている。

コーディネーターだと、ナチュラルだと関係ない。ようは、負けなればいい。

幼少の頃からコーディネーターを倒せ、倒せと研究員に教えられてきたけど

でも、実際は違うのではないか？自分たちは確かにコーディネーターを倒すために生まれてきた。けど、それは存在理由であつて自分たちの考えは違うのだと思つ。自分たちは自分たちのやり方で任務を遂行すればいい。

ステイニングは子供の頃を思い出した。朝から晩まで戦闘訓練。コーディネーターは敵だと洗脳される毎日。

そして、ファンタムペインに所属するまでの日々を。よくよく思い出せば、幼少の頃からずっと一緒にいた二人とまさか、同じ部隊、同じ指揮官の下で仕事をするとは思つてもいなかつたし

運がいいと思つてもいる。

それに、クロトもどこかで会つてゐる気がする。ビートたれつ・・

最近、物忘れが酷いのか？仕方が無いか。いつも、アレで眠ると嫌な事やどうでもいいことは忘れてしまつ。

きっとクロトとも会つた事があるのだろう。

クロトもロードニア出身だつていうし、研究所であつたのかもしけない。

アクセルを踏み込み、シフトを変える。

今日のステイニングは、機嫌だ。

ラクス・クラインのコンサートもあつたからだらうか。

翌朝、気持ちよく眠れた4人は同時に目が覚めた。

テラスから射す光は部屋を明るく照らして、4人は爽快な気分になつた。

「う～ん・・天気、いいね」

「そうだな。久しぶりにいい天気だな、ステラ。」

ステラとステイニングの会話も会話として成り立つのはやつとだつたが受け答えが長くなつた気がする。いつもは一言、一言で終わるのだが。

「つうか・・今日も休暇？飽きちゃつたよ僕

「しょうがねえだろ？ネオから何も聞いてねえし

「あんた、俺たち（ファンтомペイン）の副指揮官だろ？
何か聞いていないわけ？」

「だあかあらあ！聞いてねえつて！」

アウルは戦闘が無くてつまらない様子だ。それもそつか。クロトはため息を漏らして、備えてある「コーヒー・ポッドの中身をカップの中に入れて、それを飲む。

「あ～あ～つまんね～・・・散歩してこよつとー。」

「つておい！ アウル！ ・・夕方までには戻つて来いよ！」

返事は返つてこなかつたが、伝わつたであろう。
しうがない奴だ。あいつの散歩は長いからな・・・。
と、言つても俺も戦闘がなければ何もやる事が無いし
どうしようか・・・。

「ステイニングー。 チェスでもやらね～か？」

「ああ。 いいですよ。」

クロトはいい暇つぶしになりそつだ、と思つと
ソファーの上に座つて、テーブルの上を片付ける。
テーブルの中央にチェスのボードを置くと、黒と白を分けて
チェスを始める。

ステラはそれを、じーっと見ている。

二人はボードの上で華麗な戦闘を繰り広げている。
頭脳戦だ。ポーンの位置、ナイトの移動、クイーンの封じ・・・と
縦横無尽に駆け巡る。クロトは3手、4手と脳内で読むが
それが限界にもかかわらず。

ステイニングはその10倍以上の手が読める。
天才的な能力だ。全ての駒の配置、移動を全て考えた結果、駒を一
つずつ

動かしていく。H₂O測定で180以上を叩き出したのは伊達ではないようだ。

數十分するとステイングがたたみかけ一

「チニック」

と弦いた。クロトはまだ中盤戦だと想っていたがステイングにとつては終わっているのだ。

「どうして？」

「よく、ボードを見てくださいよ。」

「え？・・・あつ」

どう動かしても、負ける。それが答え。クロトは負けたのだ。

「くそ――今度こそ――もう一回だ――」

ステイングはやれやれ、と思しながら、クロトに向き合つた。

「もう一回よアスランさんのバカあー。」

ルナマリア・ホークは海岸でふてくされていた。

アスランとラクスが一緒の部屋で寝ていたからだ。

ルナマリア自身、アスランに恋心を抱いていたし、アスランが言い

訳したもの

何だか嫌な気分だった。

「ホントツー信じられない！！」

怒りしんとうする彼女だった。

その時、海岸をふと、誰かが走っているのが見えた。
綺麗な青髪の少年。だぶだぶのシャツに首にペンダントをたらして
砂浜を走る。

彼女はそれに興味を示したのか、少年の近くに行くと
急に少年は走るのをやめて、今度は腕立て伏せと腹筋を始める。

「58、59、60、・・・」

「何してるの？」

「ああ？見ればわかんだろ？運動だよ。う・ん・ど・う」

ネイビーブルーの瞳は何か吸い込まれそうだ。
不思議な感覚。

「で？何？勧誘？ウザイんだけどさあ～？」

「あ・・・え・・・ヒ・・・その

「ハア？はつきり言よ。」

ルナマリアは顔を赤らめているのを隠そつと必死で下を向いて
答えた。

「暇だつたら、付き合つてーーー！」

「え？ ナンパ？ 何だ。はっきり、言えばいいじゃん」

アウルは笑うと、ルナマリアは顔を紅葉のようにならに赤くした。何を言つてゐるのだう。この少年と話してゐると、何を言つているのか

分が空なくなつてくる　諦子が猶う

「で、どこ行くの？僕は暇なんだけど・・・？」

血らが語り出したことを今更、無かつた事にしてなんて言えないし・

「え・・えつとね・・」

口が上手に動かない。緊張しているんだ私は。
何で？わかんない・・・うー・・・どうしよう。唐突に変な事言つ
ちゃつたな・・・

「僕、お腹減ったな? 食べ物、食べに行きたいんだけど。」

「えーうん。そつだわ。そつしましまう」

「アーネスト・・・」

アウルはチラリとルナマリアを見つめて

「お金持つてる? 僕さー、お金持つて来てないんだー」

「・・・しょうがないわね」

二人は『ディオキア』の街の繁華街に行く事になった。

ザフトの基地から借りてきた、赤いバイクをシンは意氣揚々に乗り回していた。海沿いの道を走り、風が吹きぬけ、低音のエンジン音が鳴り響く。バイクに乗るのも久しぶりだ。思えば、アーモリーワンで乗つてからずっと戦闘ばかりだったなあ。

「つと・・・

シンはバイクから降りると、波の打ち寄せる崖の上から海を眺める。潮の香りがする。いい匂いだ。

シンは口いっぱいに、それを吸い込むと、気持ちがいい気分になる。

「・・・ん?」

崖の近くで小さな少女がクルリクルリと踊りながら歌を歌っている。少女は笑顔で踊つていて、シンはそれに魅せられた。世界はこんなにも美しいのに、何故、争いが起きるのだろう。理屈は分かるけど、酷すぎる。

でも、あの女の子どこかで会つた気がする。

シンは、アーモリーワンの繁華街で胸を触つた女の子を思い出した。

そうだーあのときの女の子・・・

「ねえ、君！」

「あつ・・・

「えつ・・・？」

あどけない声がすると、少女は消えた。
シンはびっくりして、まさかと思う。
案の定、彼女は崖から落ちていた。

「ええ！ 嘘だろ？ 落ちたあ？」

マジかよ？ つうかバカ？
でも、ほうっては置けないよ！

シンはすぐニ、少女を助けようと崖から身を躍らせる。

どこに行つた？ ぐそ！

シンは必死で水中を探す。

いた。あの子だ。泳げないのか！

シンはもがいてる彼女の体を持ち上げて呼吸をせよとすると
彼女は突然の事で暴れて、シンの顔を引っ搔く。

シンの頬に三本の傷が出来る。痛い。けど、今はこの子を助けるのが先だ。

「落ち着けって！」

シンの顔に無数の傷が出来た。引っ搔き傷とほとんどは打撲だ。彼女は普通の女の子よりも力が強いのか、肘が顔面に飛んでくるとクラクラするほど痛い。彼女を助けるよりも先にこっちが参つてしまつ。

数分してやつと彼女は落ち着いた。

落ち着いたので彼女を、浅瀬まで運ぶと、これまで溜めていた怒りを一気に

出して、怒鳴りつけた。

「死ぬ氣かこのバカ！」

少女はビクつと体を縮み上げる。

「泳げもしないのに！あんなトコーなのに、ぼーっとして……」

言いながら、シンは彼女の異変に気づいて、怒鳴るのをやめた。もののすぐ去った顔で彼女は体を縮めていた。

「い・・・や・・・嫌・・・い・・死ぬのは・・嫌あ・・・」

そして、急に立ち上がり

「いやあああああ！」

彼女は叫ぶと、海に向かつて走り出す。

シンは彼女の行動に戸惑うが、このままだとまた溺れるかもしれない

いと

思つて、彼女の後を追う。

「ちょっと、待つてつて！」

「死ぬのは嫌あ！嫌ああああ！」

「だから、待つて！行くなつて！…」

少女は今、この場から逃げ出したくなつた。
だが、皮肉にも海が足に絡んで、いつこうに前に進まない。
彼女は足がもつれて、ヨロヨロとこける。

必死に彼女は言う事を聞かない足で、前に進もうとする。

「死ぬのぉ…！撃たれたら…死ぬのぉ！」

シンは彼女の言葉を聞くと、この少女も戦争の被害者なんだと分か
る。

自分と同じだ。彼女もきっと戦争で酷い目にあつたんだ。
シンは唇をかみ締めると、彼女の体を抱き上げた。

「大丈夫！君は、死ない。」

ぴくり、と少女の体が動く。

「君は、君はちゃんと俺が守るから。」

少女のこわばつた体からゆつくりと力が抜けていく。
その紅の瞳は嘘ではなさそうだ。やつとシンの顔を見れたと思つと
彼女の目から涙がこぼれ落ちていく。

「ごめん。俺が悪かつたよ・・・」

少女はシンにすがり付いて、そして思いつきり泣いた。

「大丈夫。もう大丈夫だから・・・君は俺が守るから・・・」

「まも・・・る?」

シンはたどたどしく答える彼女の顔を見た。
全てを任せきつていいる子犬のような彼女。
今にも壊れそうな命を守った感覚。
シンはそんな彼女を好きになつた。

「うん。・・・だから。もう、大丈夫だよ」

少女は両手でシンの手をとり、その感触を確かめる。
暖かくて、優しい手。

彼女の体は次第に彼になついて行く。

「守る・・・?」

シンは微笑んだ。

「うん。守る・・・」

アウル自身、こういう場所に来るのは少ないが、何よりステラのようないい子だ。

『妹分』以外の女性と来るのは初めてであった。

ルナマリアの好みに合わせたのか、二人はパスタ店に入る。さつそく、席に座つて注文をとる。

注文をとつてゐる間、二人はやつとゆつくり会話を始めた。

「そういえば……君の名前、聞いてなかつたよね？」

「あ、私はルナマリア。ルナマリア・ホークよ」

「僕は、アウル・ニーダ。アウルでいいよ。ニーダって呼ばれるの嫌いだし。」

「じゃあ、アウル。……私も、ルナでいいよ。」

「ふうん……」

二人はしばらく会話を楽しんだ。

家族の事や、年齢。プライベートなど……色々。アウルが身寄りの無い子供だと、彼女は分かると少しだけ暗くなる。そんな、彼女をアウルは見ると笑つて元気をださせる。

「なーに、暗くなつてんだよ？だつせー」

「な、何よーべ、別にあんたなんか……」

彼女は何かを言いそうになつたが、そこで注文したパスタが来た。アウルは、ニコニコしながらパスタを見つめてフォークを持ち、食べる。

アウルはボリュームがあり、肉がたくさん入っているパスタだった。彼女は驚いた。パスタの量もあるけど、以外にもアウルがテーブルマナーを知っていたのだった。

「あんた、マナー分かるんだ……へえ、以外。」

パスタをチュルチュルと音を立てずに食べているアウル。

ちょうど、ルナマリアが食べ終わる頃にはアウルの皿も空になる。そして、支払いを済ませて店を出た。

二人は適当に繁華街をぶらつく。

すると、近くで銃声が響いた。

何？銃声？

ディオキアは中立の町であるから「コーディネーター」とナチュラルの争いが絶えない。それぞれの反対派が争いあうのも無理は無い。

ルナマリアは一様、護身用に持つてきたピストルをバックの中から出す。

（早く、ここから逃げなきや……）

「アウル、行こ？・・アウル？」

アウルはニヤニヤと銃声がするほうを見つめていた。そして、彼も懐からピストルを取り出して

「ちょっと、見てくる」

ルナマリアはギョッとした。見に行く？何で？危ないよ。

「駄目！行っちゃ駄目だよ！死んじゃうんだよ！？」

アウルは引かなかつた、むしろワクワクしながら走り出す。一般人を死なせるわけには行かない。それが軍人としての勤め。

ルナマリアは少なからず、そう思う。

アウルの後をついていかなければならなかつた。

ルナマリアは吹き飛ばされたテーブル破片の後ろに盾を作るよう隠れる。

が、そんな慎重な行動をするルナマリアではあつたが、ただ一人無謀に突っ込んでいく少年がいた。

アウルだ。

彼女は再びギョッとする。

この子はとんでもないバカなのか？何があるかもわからない場所に平氣で突っ込むなんて、神経がイカれているのではないか？

そもそも、何でピストルを持っているのだろうか？

頭の中に疑問が駆け巡つていたが、数十秒立つと銃声が鳴り響いた。アウルが仕掛けた。一発、二発。適当に撃つてるとと思うが実は全部、命中している。足や体。正確な射撃だ。

アウルは弾が切れたのか、ルナマリアの方までローリングして戻る。

「ちょい数が多いけど、僕の敵じゃないね~」

笑いながらアウルはルナマリアに言った。

アウルは銃弾を装填し終わると、今度は欠けたテーブルの破片を胸を守るようにして

持つて、再び突っ込む。

ダダダダ・・

マシンガンの音が鳴り響く。

アウルは一旦、物陰に隠れてマシンガンが撃ち終わるのを確認すると横にローリングしながらパンパン、と連射する。

アウルの得意な撃ち方だ。

しばらくして、アウルとルナマリア以外に銃を持っている人間はいなくなつた。

アウルの出現に、他の奴は逃げ出したのだろう。

ルナマリアが物陰から出てきた。

「あなた・・一体・・何者なの?」

その身体能力、射撃能力。どれをとっても特A級だ。

ザフトでもそこまで出来るは少ないだろう。

シンと互角・・いや、それ以上かもしれない。

とにかく只者じゃないのは確かだ。

アウルは一瞬、ルナマリアの方を見る。

すぐに、ルナマリアの方へものすごいスピードで走り出してルナマリアをかばう様に倒れこむ。

残兵だ。アウルの肩と背中に銃弾がかすめた。

彼はすぐに振り返り、右手に持つピストルで反撃する。

見事に相手の胸に命中して、残兵は倒れこんだ。

「う・・・撃たれたの？」

「かすり傷だよ。気にすんな」

「気にするわよーー何なのよ一体、あなたは！
急にこんな事に巻き込んで、それでもって鎮圧しちゃって…
私を助けるために・・こんな傷まで・・」

最後まで言い切った時にはルナマリアの瞳に涙が溜まっていた。

「いめん」

アウルの一言でついにルナマリアが号泣した。
彼の胸の中で思いつきり泣いた。

回りはもう、夕方だった。二人は公園にいた。
アウルの背中と肩の傷は、すでに血も止まり、傷もふさがりかかっていた。

すごい回復力だ。

ルナマリアは水のみ場でハンカチを濡らし、アウルの背中と肩に付着した
血を拭ぐ。

「痛！」

「沁みる？ それもそうよね。撃たれたのだもの。」

「かつこ悪い・・・」

アウルが呟いた。まさか自分が撃たれるなんて。たとえ、それがどんな形であっても。そんな自分が、かつこ悪いと思った。

「そんな事無いよ。アウルはカッコよかつた。・・・あたしを守つてくれた・・・」

ルナマリアは微笑む。

しばらく、ベンチでボーッと座る一人。数分経つて、アウルが口を開く。

「帰らねえと。」

「そつか・・・」

ルナマリアが黙り込む。

「また・・・会えるかな?」

「分からねー・・・」

ルナマリアはから元気で笑顔になつてアウルに応える。

「今日は楽しかったわ。・・・ありがと・・・」

精一杯の気持ちだった。

彼女の精一杯の。

アウルにはそれが分かつた。

ありがとう。

アウルは一度と忘れられなくなつた。

その後、二人は公園を後にし、ルナマリアが手を振つて別れた。

また・・会えるかな？

彼女の言葉がふと、リピートされる。

アウルは恥ずかしいような気持ちになる。

忘れない。絶対に。

アウルは思つた。

アウルは停泊している屋敷に戻ると、血相を搔いた一人がいた。
彼が戻ってきたのを確認すると

「ステラがいなくなつた！」

と一言言つて、3人でステラを探しに行く。

ステラは出かける前に何も言つてなかつたから手がかりが何も無い。
3人はステラが行きそうな場所をしらみつぶしに探す。

「ステラの奴・・どこに行つちまつたんだ・・・！」

ステイニングは責任を感じていた。
俺が少し目を離したばかりに・・・。

3人は崖の上に来ていた。彼等にはわかつていながら
ここがステラが落ちた場所なのだ。

「まさか・・落ちたんじゃ・・・？」

クロトが呟く。
ステイニングは少し驚く。

「くそつ・・ステラ――――――」

「どこだ――――この馬鹿――――――」

アウルも一緒になつて叫ぶ。

もし、ステラが溺れでもして死んだら・・・
いつも一緒になつてやつてきた、いわば家族みたいなもの。
ステラが居なくなつたら・・・
いや、そんなことは考えたくない。
生きている。絶対に生きている。

「他の場所を探そう。」

ジープに乗り込んで、叫びながら探す3人。

すると、ザフト製のジープが3人が乗るジープの前に停車した。

そして、見覚えのある少女が駆け出して、クロトに飛び込んできた。

「ステラー。」

ステイニングとアウルはホッと胸をおろす。

そして、ステイニングの一聲がステラにとんだ。

「馬鹿！ 勝手に表に出るなってあれほど言つただろうが！ どうしたんだ・・？ お前・・？」

そこで黒髪の少年がステイニングに事情を説明した。

「海に落ちたんです。俺、ちよつじそばにいて。ああ、でも良かつた。この子のこと全然分からなくて・・ どうしようかと思つたんです。」

少年の背後に立つてゐる赤服。間違いないザフト軍人だ。俺達の事をただの民間人だと思つてゐるらしい。

「そうですか・・それはすみませんでした。ありがとうございます。」

ステイニングは自分たちの緊張を抑えながら、一コヤカにお礼を言つ。

「ザフトの方々には色々お世話になつて・・」

皮肉気に喋るステイニング。

「何で・・・？」

ステイニングの背後でアウルが咳いた。

その声色は何かに絶望したようだつた。

何で・・?

その目に映るのは、ステラが乗つっていたジープの後部座席に乗つた
ハネつ毛で赤いザフト制服に身を包めた少女だつた。

「る・・な・・

だんだんと小さくなつていく声。

アウルにとつて、最悪な再会。

まさか・・ザフトだつたなんて。僕たちの敵だなんて。

アウルの存在にルナマリアも気づいて、笑顔を取り戻す。
彼女はアウルの前に来て

「アウル! また会えたね・・

アウルは淡々と言つ。

「ザフトだつたのかよ・・!

「えつ?」

アウルは怒りの形相でジープに戻つた。
ルナマリアは何が何だか分からなかつた。

一方、旧友との出会いに浸る一人が居た。
クロトとアスラン。

「ザフトに戻つてたのか・・お前。」

アスランは申し訳なさそうな顔で頷いた。
今では後悔している。

「すまない・・・でも、仕方が無かつたんだ。いつするしか・・・」

「じゃあ、今度は敵どうしで、お前と撃た合つんだな・・・」

お前を撃つ。

なんて重くて、心にのしかかる言葉なのだろう。
自分自身が悪い。分かつてゐるからこそ、その言葉の重みが分かる。

「シン、行つちやうの?」

「え? あつ・・・『めんね』

ステラは酷く悲しげな顔で聞いたので、シンは少し困惑つた。

「でも、ほら。お兄さん達が来ただろ?」

「ん・・・」

「えと・・・また、会えるから・・きつと・・・」

シンはアスランが乗るジープの後部座席に乗る。
ジープが走り出すと同時に

「『』めんね、ステラ！また、会えるから！つてか、会いに行く！…」

シンが見えなくなるまで、ずっと路上に立ち尽くしたままの彼女。

「シン…・・・」

彼女の頭には彼の顔しか浮かんでいなかつた。

クロトはステラの頭をぽん、と手を置いてステラに聞いた。

「あのシンって子が好きなんだろ？ステラ」

ステラが思つてゐる好きは、ネオやステイニング達に抱いていいる好きではなくて
一人の異性としての好き、なのだらつ。

「また、会えるといいな」

「うん・・・わふと・・会えるよな」

第七話『鬼さん捕まえた』（ステラ編）

地球軍空母「・P・ジョーンズ

「マジかよ・・ネオ・・」

曇った表情のクロト。それに淡々と答えるネオ。

「ああ・・。軍からの結論は『処分』だそうだ」

クロトは思わず、持っていた紙コップをグシャリと握りつぶす。しばし、その空間に沈黙が出来た。

彼の曇った顔は次第に、悲しみのあふれた顔へと変わっていく。

ロドニア研究所

思えば彼の育った唯一の場所。
いわば、故郷のような場所だ。

それが壊される。守れなかつた自分に、彼は腹が立つ。

「いざれは・・彼等に伝えないとならぬな

ネオは冷ややかにそう言った。

クロトは「クと首をつなぎ、その場を去つた。

フリールーム近くの自動販売機。
そこに腰掛ける。

彼はつづむきながら事の重大性を考えた。

(あそこにはまだ・・たくさんのがいるんだ・・)

ネオの言葉が胸に突き刺さる。

『処分』

きつと、機密保持のために・・彼等も・・

クロトの皿から熱いものがこみ上げてくる。
また、守れなかつた。

“あいつ”的に・・守れなかつた。
後悔と悲しみの思い。クロトにはそれで一杯だつた。

そんな中、突如アラームが鳴り響く。

「何だ！？」

彼はすぐにネオの元へ向かつた。

「どうした！？」

クロトが罵声を飛ばす。

連合の士官は困惑した顔で答える

「ステラ・ルーシュが『ガイア』に・・

「えつ・・？」

クロトの間に、怯えきつたアウルの姿が入った。

アウルは数人の研究員とネオに囲まれ

一言、「母さん・・しんじやう・・」と言つて泣いている。

クロトはまさかと思い、自らもハンガーに向かつた。

「何で『ガイア』を出した!?」

「い・・いえ・・ですが・・」

彼は左を向くと、大きな穴が開いたハッチが目に映つた。ビーム系の武器で壊されて、まだ少し熱が残つている。

「クソ・・・俺も出る!『ノワール』は?」

「ま・・まだ修理中でして・・」

ノワールはこの間の戦闘で壊された。

オーブとの同盟でザフトの新型艦“ミネルヴァ”を叩く。が、予期せぬ別勢力が現れ、その際に“ノワール”を大破させてしまったのだ。

招かれざる客・・“フリーダム”と“アーク・エンジェル”

「ウインダムを出す!」

黒色に塗られたウインダム。クロトのパーソナルカラーだ。すぐに「クピットに座ると慣れた手つきでシステムを立ち上げていく。

ウインダムの瞳が光ると、壊れたハッチから黒色のウインダムが飛び出した。

「連合のエクステンデット（強化人間）あなただつて・・知つてい
るでしょ？」

タリアが初めてその単語を口にした。

回りは実験に使われたと思われる、脳や骨格などが
ずらりと並べられていた。

画面には、ここで『強化』を行われた子供の記録が載つて
いる。記録の中に見覚えのある顔をアスランは見た。

GAT-X370『レイダー』

「クロード？」

彼自身何度も戦つた事があるし、何よりも強かつたので覚えていた。
何度も彼等を苦しめた機体。そして、今では親友のパイロット。

「遺伝子操作を忌み嫌うブルーコスマスが、薬やその他様々な手段
を使つて

作り上げる生きた兵器。」

タリアは淡白な調子で話し続ける。

「そしてここは、それを作り出す生産施設つて事よ

「ステラ！戻れ！」

“ガイア”は変形してある地点を目指している。クロトは彼女がどこを目指しているのかはすぐに分かつた。先ほどから無線連絡をしているのに彼女はそれに応えようとしない。

「ステラ！ちつ・・」

“ガイア”的スピードに“ワインダム”が追いつかない。着いていくのが精一杯だった。

クロトは歯軋りしながら“ガイア”を追つた。

ついに目的地とも言える『ロドニア研究所』まで来てしまった。目の前には“インパルス”とこの間の戦闘でアスランが搭乗していた赤い機体もある。

クロトは冷や汗が出た。

“ワインダム”じゃ話にならない。

“ガイア”は地を蹴つて“インパルス”に向かっていく。

“インパルス”はとつさにシールドを構え、“ガイア”を受け止める。

「うああああ！」

“ガイア”はMS形態に戻して、シールドでなぎ払う形で“インパルス”を地面に叩きつけようとする。

そして、ビームサーベルを構え、“インパルス”に猛攻を仕掛けた。“インパルス”もそれに反応し、自らもサーベルを抜き放つ。二機の機体はサーベルで互いの剣を受け止めあう。

その中、割り込んで来たのは、アスランが乗る“セイバー”だった。“セイバー”は両肩に装備されている大型のプラズマ砲『アムフォルタス』

を構え、“ガイア”に放つ。

“ガイア”はバックステップしそのビームをかわした。

こうなつた以上仕方が無い。

クロトも応戦する。

“ウインダム”の背部のミサイルが2機の機体めがけて発射される。そして、シールドで機体を守りながら、“セイバー”に突進する。

“セイバー”はシールドでそれを守るも、密着状態から

“ウインダム”のサーベルを抜き放たれ、シールドを破壊される。

だが、“ウインダム”は背後から迫つてきた“インパルス”には対応できず、“インパルス”的サーベルで両腕を切られてそのまま地面へと落下する。

「呆気なさすぎるううう！！」

クロトの悲痛な叫び。

シンは次に、“ガイア”に目を向ける。

先にアスランから言われた言葉を脳裏に浮かべてサーベルを構える。

「爆散させるな・・か」

シンは操縦桿を握る手に汗を浮かべて

一気に“ガイア”に突進する。

「クピットにサーベルが一閃する。

今の衝撃で、ステラは氣を失い、そのまま“ガイア”は地面へと落下していく。

彼は“ガイア”的パイロットの顔を一目見よつと、一閃したコクピットの隙間から、拡大してパイロットの顔をコクピット画面いっぱいに映し出す。

まだ幼さが残る顔の女性。シンは蒼白な顔で呟いた。

「す・・てら?」

今まで戦っていた“ガイア”的パイロットがステラ? 嘘だ。嘘だ。嘘であつてくれ。

目の前の現実から逃げ出したシン。

だがこれは、事実なのだ。

だつて今、俺・・ステラを殺そと・・していた
そんな・・

シンは額から血が出ている彼女の顔を見ると
いてもたつてもいられなくなる。

“インパルス”を動かして、“ガイア”的近くまで行くとコクピットを開いて、“ガイア”に飛び移る。すかさず、彼はコクピットハッチの隙間から彼女を出して“ミネルヴァ”的医療ルームに向かつた。

「おいー・シン!-?」

アスランは呼び戻そとするが、この黒色の“ウインダム”的パイロットも

連れて行かなければならぬと思つた。

タリアに事情を説明して、"ウインダム"のハッチをこじ開ける。アスランは右手に銃を構えて、"ウインダム"のパイロットに突きつけた。

彼は驚きと惑ひ。

「クロト……！」

そこには、血を流して微笑する青年がいた。彼はかすれた声でアスランに話す。

「よう・・・アスラン・・・」

割れたバイザーからクロトの顔が田に映るとアスランもシンと同じに行動をとる。彼の体を担いだ。

「歩けるか？」

「体中が痛え・・・」

彼等は"セイバー"のコクピットに移ると、"ミネルヴァ"の医療ルームへと向かう。

「先生ーこの子を早くつー！」

軍医とナースは驚いた顔で振り返る。

「一体、何だね？」

軍医はシンが抱いている傷を負った少女の制服に気がついた。

「その軍服・・連合の・・・」

「でもケガしてるんですつーだから・・・！」

シンは苛立ちを覚えながら、軍医を急かした。

その苛立ちは、自分の言っている事を聞いてくれず早く行動に移してくれない

軍医にもあるし、シン自身がステラを殺そうとしていたと自分自身の苛立ちもあった。

「だが・・敵兵の治療など、艦長の許可なしで出来るか！」

「そんなもんはすぐとるー！」

シンがつっこみ怒りを爆発させて軍医に罵声した。

「俺からもお願ひします・・・」

シンの背後でアスランが言つた。

彼が担いでいたのは同じ連合の制服に身を包んだ赤毛の青年だった。アスランは深く頭を下げるが、軍医は聞いてはくれなかつた。

「だから早くつーー死んじやつたひどいすんだよーーー！」

シンの大声のせいか、ステラはハッと目を覚ます。

悲鳴を上げながら、シンに飛びついた。

すさまじい勢いでシンの喉を握る。とつたのことでシンは受身を取れず

勢い良く床に転ぶ。彼女は頭を打ち付けて、彼の喉元から手を離す。

シンはぐるしそうに喉を押されて、咳き込んだ。

彼はクラクラする頭を抑えて、ナースに馬乗りになっているステラを見る。

「やめるんだ、ステラ！…」

シンがあわててステラを引き離すと、ドアが開きそこから、銃を持った保安要員と、艦長であるタリアが立つ。状況を見たタリアは「待つて」と保安要員を抑える。

ステラは保安要員を見ると金切り声を上げて、シンの懷で暴れる。シンは思った。今、ステラを話したら絶対に撃たれる。彼は必死でステラを『守る』

「ごめんっ！ステラ、俺が悪かった！」

ステラは必死でシンに抵抗するが、彼も必死で彼女を離すまいと体を張る。

彼女をなだめるようにシンが言った。

「もう大丈夫だから・・落ち着いて！」

シンは彼女の体を抱き取ると、暴れるのをやめて大人しくなる。彼はホッとした顔で見上げる。自分を鋭い目で見ているタリアの顔が映つた。

「申し訳ありません。」

タリアの厳しい言葉がシンに突き刺さるが
後悔はしていない。例え、自分に大きな罰が下るうど。
とにかく艦長から敵兵の治療許可が下りたので、自分の行った行動に
意味はあつたと思った。

タリアの厳しい顔はまだ終わらなかつた。
今度はアスランに目を向けた。

「あなたもよ、アスラン」

大抵の厳罰の事はシンに話したので、アスランには手短な話だつた。
アスランもシンと同じように敵兵を無断でここにつれてきた。
タリアは彼が連れてきた青年を知つていた。
ロドニア研究所のエクステンデットのデータに写つていた
GATT370のパイロット。

タリアが彼等に話そうとした瞬間、インターフォンが鳴り
彼女の話を断ち切る。そして通信を開いた。

「何?」

呼び出しが医務室からだつた。

シンはまさか、と思つた。

「わかつたわ」

三人は不安に波立つ心を抑えながら医務室へと向かう。医務室に入ったシンを迎えたのは、拘束具で包まれた愛しいステラの姿だつた。

「なつ・・ステラ！」

シンはあわてて彼女の枕元に顔を寄せる。ステラはシンの顔を見上げ、そつと呟いた。

「・・・・・し・・・ん？」

衰弱しきつた体に鞭をうち、彼女は呟いた。先ほどから暗かつたシンの顔が、ぱあっと明るくなるとシンの目から涙が出てきた。

覚えてくれてたんだ・・

だが彼女はシンを覚えていたのだが、ここがどこだか分からなくて笑顔だつた彼女の顔が一気に困惑する。

「いじはつ・・・・！」

彼女は拘束されていることに気がつくと体を思いつきり動かして、拘束具を必死で千切ろうとする。ベットがギシギシと揺れた。

ステラは身をよじり、肌がベルドですれて血が滲み、力強く唇を噛むので、血が吹き出る。

「ステラ！大丈夫だよ！ステラ！僕がいるから！――！」

ステラはシンの言葉にも反応するが、すぐに元の行動に戻った。
彼女は子供のよつよつ泣き叫ぶ事しか出来なかつた。

「ステラ・・・」

軍医がすかさず鎮静剤を注射すると、ステラの体からゆっくりと力
が抜けていき
ついに動くのをやめた。

彼女の瞳から涙があふれ出でくる。

「シン・・・いや・・・」

ただ、好きな人の名を呼びながら眠りについていった。

ステラの隣で椅子に座り、後ろに手を回し、手錠を掛けられている
青年がいる。

「それで、そつちは？」

タリアがアスランに言った。

彼は彼の関係と事情を説明し始めようとする。

「自分で言えるよ・・アスラン。」

クロトが口を開いた。

「第81独立機動郡“ファンタムペイン”所属、クロト・ブル少

佐であります」

タリアがピクリと体を動かす。
ファンтомペイン？この青年が？

「じゃあ、あなたはエクステンデットなの？」

「いえ・・・違いますよ。確かに昔はそうでしたけど・・・」

まるで尋問のような会話が続けられ、アスランの顔が次第に暗くなつていく。

シンもステラを見つめ、ただ彼女が目覚めるのを待つていた。

クロトとタリアの会話が終わる頃には、医療室の外にルナマリアとヴィーノ、そしてハイネの姿があった。タリアはドアから出ると3人とばつたり会い、3人は敬礼した。彼女はため息をつきながら、自らの部屋に戻つていいく。三人は再び部屋をのぞくと、重苦しい雰囲気だつた。場違いと思つた彼等はそこを後にした。

「俺はもう自室に戻るが・・・」

「ああ・・・話し相手になつてくれて、嬉しかつた」

アスランはクロトに言つと、そのまま医療室を後にする。自室に戻ると、パソコンを動かしてエクステンデットのデータを吸い上げる。

久しぶりに会つたキラと会つた時を思い出した。

勝手な事ばかり言って自分の事は何一つ考えてくれなかつた。
現実をまるでわかっていない。

クロトも彼の話に共感してくれた。少し嬉しかつた。

（キラは・・奇麗事ばかり言って、話を逸らすからな・・）

クロトの言つた台詞を思い出すと、アスランは笑つていいのかダメ
なのか
解らない複雑な気持ちになつた。

第七話『海』（アウル編）

地球連合空母「・Pジヨーンズの甲板で困惑した顔のアウルがそこにいた。

大切な者や物を一気に失つて空っぽな気持ち。自分の故郷のロドニア、ロドニアにいる自分の母。天然でどこかほおつてはおけない、お馬鹿なステラ。頼れる兄貴分だったクロト。

彼はただ哀愁にふけ、遠くをぼんやりと見つめている。

彼を癒してくれるのは『昼寝』と『戦闘』くらいだった。次の睡眠と戦闘の時間を待つ時間が増えた気がした。

「な、に黄昏てんだよ。」

ステイニングだ。緑色の逆毛は彼のヘアースタイルだと決まっている。今日もワックスをつけてご機嫌が良い感じだ。

ニコニコしたステイニングの顔を見ると、アウルはいらだつた。

（何でニコニコは笑つていられるのだろうか）

大切なものを失つたのはこいつとて同じである。でも、何故わらつていられるのだ？

彼はキツとステイニングを睨みつけて罵声を飛ばした。

「何でお前はニコニコ笑つてられんだよ！クロトもステラも俺たちの故郷もなくなつちまつたんだぞ！」

アウルが罵声したがステイングは驚いた仕草もせず、冷静な態度でそれに答えた。

「嘆いたつて戻りはしない。そつだらっビリセ“あれ”で眠れば何もかも忘れちまうよ・・・」

ステイングが淡々にアウルに言つ。

アウルは怖かつた。

つながりが出来たから、失うのが怖い。自分たちが忘れる事は、ステラやクロトの事も忘れてしまうことだ。やつと出来たつながり。言わば家族だったのに・・。

アウルは小さく頷き、再び彼と一緒にぼんやりと沈む夕日を見ていた。

夕日を見ていると彼女を思い出すからだ。

数分するとネオ自身が甲板にやつってきた。

『睡眠』の時間だそうだ。

二人はしぶしぶ行く。

眠りにつくまえに、ネオにアウルが頼んだ。

「僕は記憶を消したくない・・・あいつらを忘れたくないんだ・・・頼むよ・・・」

頼むよ、と声こぼにはアウルの瞳から涙がこみ上げてくる。アウルはドーム型のカプセルの上でうつ伏せになると自らが持っていたペンダントを握り締めて眠りにはいる。ペンダントにはクロト、ステラ、ステイング、ネオ

そしてアウルが写っている集合写真が撮られている。

ファンタムペイン結成時の写真だ。

彼は大事にペンダントを握りしめて眠った。

明日は絶対に彼等が帰つてることを願つて。

目が覚めると、アウルの瞳から一筋の涙が零れていた。
自分が何故泣いているのか分からなかつた。

隣にはすでに着替えが終わつたステイングが立つていて
彼の涙を見て笑つていた。

目をこすり、涙をごまかす。

ガラス越しにネオが申し訳なさそうにこちらを見つめている事に気づいた。

仮面越しだつたが、それはよく分かつた。

「何でネオのやつ、こっち見てるのかな？」

「知らねー」

そつけなくステイングは答えた。

彼は上着を着て、その部屋から出て行つた。

「本当に良かつたんですか？彼等の・・・」

眼鏡をかけた研究員はネオを見ながら言つと、ネオは淡々と答えた。

「邪魔な記憶が効率を下げるわけには悪いだろ。」
彼らには記憶が無いほうが幸せなんだよ。」

話が終わるころにはネオの声が少しかすれていた。
仮面の内側に悲しさを秘めている感じがした。

二人は格納庫に来ると、違和感を覚えた。
ステイリングの機体、アウルの機体。だが、その後ろには
無駄な空きがあった。

「なーんか大事なことを忘れてる気がするんだよなー」

アウルがつぶやく。
ステイリングは苦笑しながらそれに答える。

「気のせいだろ・・つっても、俺も忘れてるような気がする

「だよな? 何だらう・・・」

疑問に思いながら、一人は自分の機体に乗つて発信準備が出来るまで
待機する。アウルは深く考えた。
何かが欠けている気がしてならない。
いつからこんなに忘れっぽくなつてしまつたのだろう。
アウルは不思議でしょがなかつた。

オープ軍と連合軍が“ミネルヴァ”を沈めるために動き始めると
二人の出番がようやく回ってきた。

ステイングが乗る『カオス』は空中を指揮して、アウルの『アビス』は水中から攻めることとなつた。

「ああて、暴れるぜ・・・」

アウルの『アビス』は空中をブースターを使い空中にジャンプするとかさず変形して、水中に飛び込む。

彼はソナーを使い“ミネルヴァ”の居場所を突き止め、そのまま直進する。

さつそく獲物を見つけた。

例の『インパルス』とか言つやつじやない。『ザク』だ。だが彼にとつてはどうでもいい話だ。

「今日の俺は機嫌が悪いんだーさつそく藻屑にしてやるぜー・・・

アウルはMS形態に変形し、赤いザクに猛攻を仕掛けた。

赤色の鮮やかな『ザク』はスラッシュショウイザードと呼ばれるバックパックを装備して

近接戦闘に特化した形になつている。

水中戦闘用に改造されているのか、水中での機動力は『アビス』と並んだ。

「早いじゃんーけど勝つのは・・僕だよー」

笑みを浮かべながら、背部にマウントされているビーム・ランスを両手に持つて相手に斬りつけると、『ザク』もそれに応戦するよつてビームアクセスを交差させ、互いの得物が中心でスパークを放つ。

『アビス』を後退させ変形して、動きをかく乱せらる。

変形した『アビス』のスピードは『ザク』を凌駕していたため、相手は動きこ

ついてこぐじが出来なかつた。

ぐるぐると『ザク』の中心を回る『アビス』

ついに、『アビス』は攻撃を開始する。『アビス』の背部のビーム砲と

誘導魚雷が発射され、『ザク』に迫る。

「こんなので、やられると私じゃないんだからー。」

(? ! ? 女 ?)

無線から女の声が聞こえた。先ほど、得物が交差したときに接触回線が開いたのである。

『ザク』はビームをかわし、誘導魚雷を両肩の誘導魚雷で相殺するとビームアクスは『アビス』の肩を貫き、そのまま上げるように切り裂いた。

今の一撃でアウルは怒りを感じた。

自分がこんなコーディネーター相手に遅れを取つた? しかも女に? ふざけるな!

「ちょっとぐらうダメージを『えたからつてふざけるんじゃねえ!』

! -

『ザク』のコクピットの中でルナマリアの体をピクッと反応せらる。聞き覚えのある少年の声。

あの鮮やかなネイビーブルーの髪の毛で、深海のよつに深い蒼の瞳。

(· · · アウル?)

あれに、『アビス』に乗っているのがアウル?
この間、シンが撃破した『ガイア』に乗っていたあの女の子と
アウルは同じ……?

「！？」

ルナマリアが再び前を見ると、『アビス』の姿はもういなかつた
『ザク』のコクピットでアーラームが鳴る。

「下！」

気づいたときにはもう遅かった。

『ザク』の左足を『アビス』のビーム・ランスが貫き切り裂いたの
だ。

片足をもがれた『ザク』にもつ、『アビス』と並んだ機動力を保
つことは出来ず

次に、右腕を切り裂かれ、得物も破壊される。

ただ彼女は『ザク』のコクピット内でひたすらに恐怖を感じるだけ
だった。

体を強張らせ、体を縮みこませる。

『アビス』がどどめに入り、ビーム・ランスをコクピットに向かつて
突きたてようとする。

ルナマリアは声を張り上げて叫んだ。

「アウル――――――！」

奇跡は起こった。『ザク』のコクピットは潰されず
胴体の前で寸止めされている。

「・・・・・ルナ？」

アウルの頭の中でわけの分からぬ記憶がフラツシュバックする。
彼女の困った顔や怒った顔。笑った顔や泣いた顔。

「うああ・・・うああああ

アウルは何故自分が『ルナ』と言つたのかが分からなかつた。

思い出せそうで思い出せないもどかしい気持ち。

頭が割れるような気分。

彼は頭を抱え込み、恶心を我慢する。

次の瞬間、パツと彼女の顔が映りだすと彼は顔を上げた。
そこには見覚えのある少女の顔があつた。

「・・・アウル？ 分かる？ 私よ、ルナマリアよ・・・？」

アウルの頭の中を包んでいた暗闇が一気に晴れる。
そしてアウルは答えた。

「・・・分かるよ・・・」

アウルに笑顔が戻つた。

「アウル・・・」

しかし二人は静止していた。互いの立場や戦闘を忘れ
互いの存在感だけを感じていた。

モニター越しにじだつたが彼らはお互いの顔を再び見れて再開の喜びを感じ合つ。

「僕は・・ルナの敵だから・・」

彼はつぶやき、悲しげな表情を見せる。

(アウル駄目！いつちや駄目・・・)

『アビス』は『ザク』を通り過ぎて、『ミネルヴァ』の方へと向かう。そこで通信を彼は強引に切つた。

でもこれが普通なのだ。お互いの立場は敵同士だからだ。

「アウル・・・」

「いた・・！」

アウルは『インパルス』を見つめた。

装備を換装して、大型の砲門を一門装備した姿になつてゐる。

小破した『アビス』を操り、右門と胸部のビーム砲を『インパルス』に

発射する。

『インパルス』はそれにいち早く気づき、盾でガードする。

『アビス』は『インパルス』の前に躍り出て、ビーム・ランスで斬り付ける。

「その首・・今日こそはーーー！」

空中では例の“アーケンジェル”的『フリーダム』と『カオス』の一騎打ちが繰り広げられていた。

『フリーダム』の機体性能の差をステイニングは腕でカバーしようと必死だった。

『カオス』の背部のポッド一つを射出し、『フリーダム』を翻弄する。

「こいつー墮ちろー！」

ステイニングはポッドを操作しながら自らの頭を今まで以上に回転させる。何とか突破口は無いのだろうか。ステイニングはあらゆる点を模索するも

『フリーダム』の動きはステイニングのイメージを遥かに超えていて、なかなか『答え』が出せない。

鬼神のような『フリーダム』は『カオス』のポッド一つをビームライフルで打ち落とした。

「ちつー！」

舌打ちをするステイニング。

「まだ負けちやいねえ！」

彼は腰部のサーベルを構え、『フリーダム』に攻撃を仕掛ける。しかし真正面からは無謀だった。『フリーダム』はそれに反応して

サーベルを構え、カウンターしたのだ。
案の定、『カオス』の左腕と頭部は破壊された。

「くそおーーー！」

そのまま真下に『カオス』は落下していった。

「その首・・今日こそこそはーーー！」

田の前に躍り出た『アビス』を見てシンは毒づいた

「そんなボロボロの機体で何をーーー！」

『インパルス』の頭部と胸部のバルカン砲『CIWS』が起動して
『アビス』の頭部と左腕の装甲を貫いた。

「うわあああー！」

後方に下がる『アビス』。シンは今だ、と思い
自らの得物を思い切り『アビス』めがけて投げつけた。

『アビス』の頭部に吸い込まれるように槍は貫いた。

『アビス』の頭部が爆発して、フラフラと水中に落下する『アビス』
爆発の影響でコクピット内部は至る所にスパークしていた。
先の水中での戦いで『アビス』の電力は少なく、『インパルス』の
バルカン砲を受けた時には、既にPS装甲が切れていたのだ。
不運が重なり、アウルの体を痛めつける。

「死ぬのかな・・・」んな所で・・・

アウルは泣き言をこぼした。

せつかルナと会えたのに、記憶が戻ったのに・・・

そして、吸い込まれるように水中に沈んでいく。

その時、誰かが自分を抱きかかえる感じがしたのだ。

「カオス・・・?」

微かに見えた緑色の機体。

ステイングの奴だ。

こいつもボロボロじゃないか。

彼は痛みのショックが強く、気絶した。

間一髪のところだったかもしねない。

幸運にも沈みかけた『アビス』の上空を『カオス』が落下していたのだ。

近くに『インパルス』の姿もあつたが、先の『フリーダム』と戦闘を始め

こちらには気づいていなかつた。

そして『カオス』は変形して『アビス』を抱き上げると、そのまま母艦に向かう。

「俺たちの完敗だ・・・

大破した灰色の『アビス』を見て、ステインングが悔しそうに言った。

彼女が再び目が覚めたときは、明るい部屋だった。

目を開けると、明るい天井が見える。

体中に違和感を感じる。呼吸がしづらい。

定期的に聞こえる機会音は彼女の耳に障った。

全身に力が入りにくい事がわかると、苦しさを覚えた。

思つよう動かず、筋肉を動かそうとしても力が抜けしていく感覚。要するに、嫌な気分だ。

「まつたく、どうかしているよ」

誰か男の人の声が聞こえる。知らない声だ。

彼女は首をかしげると、白衣を着た中年の男が見えた。

誰と話しているかは知らないが、デスクに向かって執拗に話す。

「・・・この一人を生きたまま本国に移送するなんて」

（い・・そう？）

「議長は何をお考えなのか知らないが、早くここから離れたいよ

入り口の扉が開く。

黒髪に紅色の瞳をした少年。

彼女は彼の姿を見ると安心した。

先に行っていた医師の言葉が彼女を緊張させたからだ。

「シン・・怖い・・」

彼女は体をこわばらせ、震える。
この場所は怖い。安心できない場所。
彼女自身、身も心も限界にあつた。

「大丈夫、俺がいるから安心して」

シンは微笑んで、ステラを安心させる。
彼は彼女の震えている手を握つて暖めるような仕草をすると
彼女の震えは次第に落ち着き始めた。
やつれた顔に頭部に巻いた包帯が痛々しい。
シンは隣で拘束されている赤毛の青年を見て思いだす。

（ステラは、ある一定の期間に特別な処置を行わないと生きていけ
ない。）

シンはこの事を聞いていてもたつてもいられなかつた。
すぐここからステラを出したい。けど、そんな事をすれば重罪だ。
彼は迷いを見せる。

「ステラ・・・」

眠りに落ちた彼女。
シンは決意した。

（俺が守るんだ。死なせない）

拳を握りしめながら彼は部屋を出て行こうとする。

シンはこいつの間にか、アスランの部屋の前にいた。
彼がその時何を思つていたか
察しているとおりのことだつた。
硬い形相でアスランの部屋の扉を開けると
そこにはやはり彼がいた。

「どうした？ シン」

「俺・・俺は・・・・・・」

泣きそうな顔のシン。アスランには理由がまったくわからない。
どうしてこの少年は泣きそうなのだろうか。
悩み事がありそうな顔だつた。

シンはそれから何も言わず、部屋から走つて出て行つた。
その時、どうして彼の気持ちをわかつてやれなかつたのかと思つと
やるせない。彼はシンの後を追つた。

追つた先には思つていた事が起きていた。
起きて欲しくなかつた事が。

目の前に気絶した女医が倒れている。

「シン・・お前？」

シンはクロトの縄と手錠をはずしている最中だつた。
アスランが入つてきた時、一瞬こちらを見たがすぐに首を戾した。

「死なせたくないから返すんだ・・・・」

シンはクロトに話した。

彼がこの強化人間の少女にそんな思いで接していたことをなぜ気づかなかつたんだろう
アスランはどうすればいいかわからなかつたが
すぐにクロトが困惑した顔のアスランにアドバイスした。

「自分が思った行動をとることは・・・時にはよい選択だと思つぜ」

（自分が思った行動・・・？）

シンは彼女のベットを動かして走るように廊下を駆け抜ける。
クロトもアスランもそれに続く。
走りながらシンは彼女にささやくよつと言つた。

「言つたろ？俺はステラを守るつて・・・」

「シン・・・」

格納庫まで着くとすでに警報音が鳴り
銃を構えた兵士が待つていた。

「何をしている、とまれ！」

3人は困惑するが、数人の兵士の後ろから何者かが
奇襲した。

兵士は一瞬油断して、後ろを狙つ。
ブロンドの長い髪の毛、大人びた雰囲気の少年。
レイだつた。

シンもレイに続いて兵士を殴り倒す。

「一ティネーターの動きに反応できず、そのまま氣絶していく兵士たち。

だが、生き残った兵士が銃口を向ける。

銃口を向けた先はクロトだつた。

それにいち早く気づいたアスランはすぐに走り出し

兵士の銃を蹴り飛ばして、踏みつけ氣絶させた。

そしてコアスフレンダーに乗るためエレベーターに乗り込む。

閉まる直前、レイがエレベーターのドアをとめる。

「返すのか？」

その質問に迷にも無くシンは答えた。

「このままじゃ、死んでしまつーそんなのは俺、嫌だ！」

レイは少し間を空けて再び質問した。

「お前は・・きっと戻つてくるな？」

シンはアスランを見る。そして答えた。

「ああ・・・必ず戻つてくる」

レイは「そうか」と短く答えた。

アスランは困惑した顔でクロトを見やつた

彼の悲痛な顔は察知できたクロトは小さく微笑む。

「全部捨てて・・戻つて来いよ」

クロトは何も言わなかつたが、アスランにはそつまつしているように聞こえた。そしてエレベーターのドアが閉まる。

アスランとレイはすぐに管制室に向かい、コアスプレンダーの発信を急がせる。

扉から兵士の声やざわつきが聞こえるが、レイは気にしなかつた。

「いいぞ。」

“ミネルヴァ”から大空へ向かうハッチが開き始める。そして、コアスプレンダーは羽ばたき優雅に空を舞う。さらに、ヘッドフライヤー、レッグフライヤーが発射され空中で“インパルス”へと合体する。

ある程度、進むとシンはあらかじめ用意しておいた“ガイア”的識別コードを入力して連合に入電する。シンはマイクに話した。

「ネオへ・・ステラが待つていてる。」

数回、その作業を繰り返した後、眠っているステラを起こして外を見た。

外は夕日が輝き白い雲を夕日色に染めあげる。ステラは目を大きく開けてうつとりと見上げた。

「きれい・・」

彼女は初めて夕日を見たわけではなかつたが、彼と、好きな異性と一緒に見るのはこれが初めてだつた。

“インパルス”は小さな孤島に止まる。
島には白色の機体があつた。

形状は“インパルス”に似ている。
それは前大戦使われた伝説の機体。

“ストライク”だ。

それの下に、例の『ネオ』と呼ぶ人物が立っていた。
シンは彼の方までステラを連れて行く。

(こいつが、ネオ……?)

何を考えているかわからない。
仮面をつけているから表情さもわからない。

「あんたが……ネオ……?」

「まったく、大胆なことをしてくれるね。坊主君」

シンはむつとした。『坊主君』とは自分のことだらうか
彼はキツとにらみつける。

「度胸のいい少年は嫌いではない。むしろ好きなほうだ
その言葉がシンに親交があるとわかつた。
シンはネオに近づき、ステラを渡すと
ひとつ約束事を言った。

「約束してくれ、ステラを……一度と戦争とか！戦いとか！
そんな世界から開放するつて……！」

ネオは少年の瞳から涙がこみ上げてくるのがわかるとつばを飲み込む。

(せうか・・彼がステラの・・)

「約束・・する・・必ず」

そして、ネオは後ろに振り返り愛機のコクピットに向かう。ステラはシンが遠くなつていく事がわかつて悲しそうな顔した。

シンも彼女の顔が遠くなつていくにつれ泣きそうになるがそれを我慢した。

抑えきれない衝動。もつと話したかった。もつと一緒にいたかった。俺のステラ・・。

「シン！一緒に来い！」

シンは後ろを振り向く。

「俺たちと一緒にやつてこい！」「…

シンは本当に敵なのか分からなくなつてしまつた。

なぜ、敵の自分に対しても優しく声をかけられるのだろう？・シンの気持ちが揺らいだ。

一緒に行けば元気なステラと一緒にいられる。信頼してくれるクロトもいる。でも・・・

不意にレイの言った言葉を思い出す

「お前は・・・きつと戻つてくるな?」

あそこには『仲間』がいる。

守りたい『仲間』や『艦』がある。

だからいけない。

「俺は・・・行けません! 俺にはまだ、守るものがありますから!」

シンは走りだし、“インパルス”のコクピットに座るとすぐに機体を動かして“ミネルヴァ”へと帰還する。ただ瞳からこぼれる涙だけは止められなかつた。

「いい目をした坊主だつたな。名前はなんて言つんだ?」

「確か・・シン。シン・アスカだつたかな」

ネオは遠くを見つめ、黒髪の少年を思い出す。まつすぐな目をした勝気な少年。

「シン・・アスカ・・か・・」

第九話『梅干』

「医療班は速やかに負傷したパイロットの治療を・・・」

艦の中でアナウンスが流れる。

台車の上で、呼吸器や心拍数を示す機器をつけてぐつたりしている
アウルがいた。

体には無数の包帯を巻いていて、目では見えないが包帯の下は
たくさん傷が出来て、出血をしていた。

多量の血液が流れ、彼の意識はほとんど無かった。

その光景を痛々しく、ステイングは見ていた。
自分もやられ、アウルもやられ。

お互、苦汁をなめた。

先の戦いで急に出現したあの白い機体、『フリーダム』

彼は手も足も出なかつた。

ステイングは悔しくてたまらなかつた。

その事を思い出すと彼は、壁に向かって拳を突き立てる。

鈍い音が伝わつた。

彼は静かにその場を去つて行つた。

あの戦いから数日が経つた。

アウルとステイングは自室でトランプで遊んでいた。
ポーカーだ。

もちろん勝っているのはステイニング。

アウルは先ほどから彼に、何回も負けて腹が立っていた。

しかしこの回、初めてアウルがほくそ笑んだ。

手札の役は『フルハウス』だった。

これならステイニングに勝てる。

アウルの手札のクイーンが、彼に初めて微笑んだ。

しかし、ステイニングはそれをさらに上回った。

彼は『フォーカード』で勝負をしかけてきたのだ。

見事にアウルは彼女に裏切られ、再び彼に苦汁をなめさせられる。だが、アウルは変なことに気がついた。

彼の手札をよく見ると、自分の手札と同じカードが一枚、入っているではないか。

「スペードの12・・・・！」

アウルはすぐに彼がイカサマをしていることに気づくとステイニングに飛び掛った。

「てめえー！」んなずるい勝ち方して楽しいかよーーーー！」

ステイニングは笑いながら謝った。

と、後ろでドアがブシューと音を立てて開いた。

二人は振り向くと、そこには見覚えのある青年の顔と少しやつれたブロンド髪の少女が立っている。

「クロト、ステラー！」

アウルが思い切り立ち上がり、歓声の声が部屋に轟く。
しかし、ステイングだけは彼等が誰なのか全く分からなかつた。

「誰だ・・・あんたら?」

クロトは状況をすぐに把握して、

「俺はクロト、こつちはステラだ」

簡単な自己紹介をした。ステイングは今までの記憶が『無い』のだ。
ステイングは一人の手をとり軽く握手をして、部屋を出て行つた。

「ステイング・・・」

ステラは悲しげに彼の名前を発した。

彼は妹分であつたステラさえ忘れてしまつた。

どこか見たことのある少女。

誰だつけ?

忘れた。

ステラ。

知らない・・?

いや・・知つてる?

また・・『あいつら』に記憶を消された。

知つてるんだ・・いや、知つてたんだ。
あの子を、そしてあの青年を。

「俺は・・・どうなつちまつたんだ・・」

ただぼんやり、あの三人を頭に浮かべた。

「また・・楽しいことになりそつだ。」

食事の時間になつて4人は食堂にいた。

「今日のおかずは何かな～」

アウルがウキウキとした気分でおぼんを持って回る。
ステラはぼーっと立つて食べ物を取ろうとしないので
しかたがないと思ったのか、ステイングが彼女の分も回つた。

「はいよ

ステイングは彼女の前にトレイを置くと、彼女は笑顔で笑つた。

「ありがと・・ステイング」

(何か昔もこんなことがあつた気がする)

「ステラ・・ブロッコリー・・嫌い」

「ステラがブロッコリーを一生懸命、端に寄せれる。

ステイングはそれを見て、無意識にステラに言つた。

「ちやんと「ロシ」「リー食べろー・ステラー!」

「つまーー・・・

元気なさそうに彼女は「ロシ」「リー」を口に寄せ、そのまま放り込みあまり歯まず、一気に水で流し込んだ。

(何で今・・ここに言つたんだろう・・?)

彼の脳裏に記憶の断片がよぎる。

お馬鹿なステラにナプキンで前掛けを作つた記憶。

お馬鹿なステラがいなくなつた記憶。

お馬鹿なステラが「一ディネーターの野郎に惚れた記憶。

(何なんだよこれは!?)

今までずっと一人でやつてきたじゃないか。

アウルと俺の一人で・・・。

なのになんで・・?

「ステイングーー!」

アウルの罵声にハツと我に返る。

「何ぼつーとしてんだよーボケー!」

「あ・・ああ」

クロトがアウルに続いて彼を馬鹿にする。

「 こいつのをお猿さんって言つたじゃね？」

（お・・お猿さん？何言つてるんだこいつ？）

「 ほら、早くこれ食べてよーいつもステイングの仕事だろー」

「 あ？」

（そりだー俺はこいつも残飯処理をやらされてたんだ。こいつらにー）

ステイングは3人のお皿に残された食べ物をみて身震いした。
彼がもっと嫌いな食べ物。

何故、地球上にこんなものがあるのか？疑問に思つほど
その食べ物は彼は嫌いだった。

「 い・・嫌だー！」

アウルがニヤニヤしながらステイングにじりじりと迫る。

「 何言つてるんだよ。ステイング、好きだろ。これ

クロトも言つ。

「 そりだそりだ。いつも『最高』とかいいながら食べてただりつ

拳句の黒てにはステラまでもがステイングに言つた。

「ステイニング、これ美味しいって、パクパク、食べてた」

ステイニングには3人の微笑が、悪魔の微笑みに見えた。

それが刺さったフォークが彼の口に迫り、彼は涙目になつていく。

そして、『それ』はついに口の中に入った。

「梅干は嫌だああああああああ！」

干した梅はそのまま彼の体内に入る。

強烈な酸っぱさが彼の口内を破壊し、喉も焼かれた。

彼はそのまま、後ろに大きく仰け反つて

大きな音を立てて倒れた。

口からは泡を吹き、白目をむいて、涙も出ていた。
すぐに医療班が来て、ステイニングを運んでいった。
彼等三人は少し、やりすぎたと反省し食堂を後にした。

そして、ステイニングはその日、三人の事を全て思い出した。

第九話『梅干』（後書き）

アホな小説で本当に申し訳ありません。

シリアルも糞も無いですね。

内容的には金色のガッシュで清がアンサーティーカーの能力をバ

力な夢を見て失う・・といった感じであります。

第十話『ベルリン』

辺り一面の雪景色。

白い雪が激しい雨のように降る。

現在、クロト達5人は新たな命令を受け、ロシアに向かっていた。
「けつ・・まつたく、今度はえらく邊鄙な所へ連れてきてくれたじ
やねえか」

白い息を吐きながら吐き捨てたのはステイニングだった。

「しょーがないよ。これも命令だしへ」

軽口をたたくアウルに、ステイニングはため息をついた。
体を擦るような仕草を見せる彼は、どうやら寒いのが苦手らしい。

「わー！ステイニング、クロト！外、真っ白だよー！」

ニコニコしながらステラは戦艦『ボナパルト』の窓をのぞく。
彼女に呼ばれ一人も、揃つて彼女に続いて窓をのぞいた。

「つて俺は？！呼べよーー！」

アウルも遅れて窓をのぞいた。

雪は、まるで踊るようにふわりふわりと舞う。
その景色は今までとは違った雰囲気をもたらし
神秘的だった。

「なんつうか、不思議な感じがするよなー。」

アウルが感想を述べる。

「んじゃ、俺はネオの所行つてくれるわ~」

クロトは廊下を曲がり、ネオがいる場所へと向かった。

「まーた、ジブリールのおっさんの奴に言われたねえ・・

クロトは下を向いてため息をつくと

ネオは、皮肉気に笑つて彼の肩をポン、とたたいた。

「ま、あの『ミネルヴァ』を何度も逃してるのは事実だしなあ。」

「『アーク・エンジェル』も出てきて散々だしね。」

今まで、何度も『ミネルヴァ』を追い詰めているの^元何故、落とすことが出来ないのだろう。
ザフトの奴らの底力も舐めたものではない。
そして不確定要素の『アーク・エンジェル』。
奴らの動向も探したいところだ。

「なあ、ネオ。俺の新しい機体って・・何のことだ?」

ネオは少し間をおいて、クロトに返した。

「今までの戦闘の結果を見て、『ノワール』だと機体が思うように動かなかつたはずだ。」

「ああ。『ノワール』が俺の反応速度についていけないし、どうしようかと思つていた所だつたんだ。正直」

いつの間にか、二人は『ボナパルト』の格納庫の扉の前に足を止めた。
二人は中に入ると、そこには妙に黒光りした巨大なMAとMSが目の前にあつた。

「」いつは・・・・

ネオは少し冷めた声で機体について話し始める。

「GFA S-X1『デストロイ』戦略装脚兵装要塞と言われるほどのバケモノだ。」

「バケモノ・・・！」

クロトは少し驚いた様子を見せるが、再び『デストロイ』を見上げた。

「まさか・・ネオ・・。」いつで『ベルリン』を？」

彼は冷淡になつて、クロトに頷いた。

「大量虐殺兵器じゃねえか・・・」んなの！」

ガツとネオの襟首を強く掴み罵声を飛ばすクロト。

彼も真の平和を望むもの、こんなバケモノでベルリンの町を焼き払うの
あまりにも残虐だ。

「お前の気持ちも分かる！」

クロトの手を思いきり振りほどいて、乱れた服を直す。
そして、冷淡にクロトに言つた。

「これも任務なんだ・・役割を果たせ。」

クロトは舌打ちをして、もう一方の機体を見上げた。
彼は目を大きくした。

見覚えのある機体。PS装甲の電力が供給してないから暗灰色であるが
その機体の風格が伝わってきた。

ガンダムタイプの頭に、両腰に装着されているサーベルとレールガン。
翼が生えたその機体はまさしく

「フリーダム・・・！」

「そうー。」

これが彼の新しい機体なのだ。全大戦で最強、最凶と呼ばれた
機体はまさしく今の彼にはふさわしい機体であろう。

「GAT-X410A『ブリュナーク』。条約違反ではあるが、核
エンジン搭載型MSだ。

『フリーダム』の性能とほとんど大差無い。」

「すげえ・・・！」

ネオは彼の輝かせた目がまるで、新しい玩具をもらった子供のよいで微笑した。

「気に入ってくれたかな？」

「ああ！それにしても、よく『フリーダム』のデータなんか取れたよな？」

「ま、お偉いさん達が何をしているかは知らないけどな・・・」

彼は一つの機体を見ながら、クロトに囁くような小さな声で言った。

「これがステラの新しい機体だよ」

ネオは優しく、ステラに言い放った。

彼女はこの巨大な機体を少し不気味に思つ。

「これが・・・ステラの？」

「ステラも『これでまた・・・戦わないとな・・・』

ネオの台詞に、クロトは不安な顔でステラの意気揚々の顔をのぞいた。

本当は彼女にはもう戦つて欲しいと思ってもいなかつたし、それにあのザフトのエース、シン・アスカとの約束も破つてしまつたとも思つた。

彼があんな危険な事を犯してまで、彼女を助けたのに、それに対しても自分達はまた、この少女を兵器として扱つ。

「でも・・シンは、シンは戦つちや駄目だつて・・言つてたよ・・・？」

ステラはネオの顔を不思議そうに見ながら、そう言つた。
彼は申し訳なさそうに、下を向いて、ステラに話した。

「戦わないと、また敵が来て私達を殺す・・・。」

殺す・・。そう彼は言つた。

その言葉に反応したステラは、不安につぶやいた。

「」・ろ・す・・ステラも？」

「そう・・。私も、クロトも、アウルも、ステイングもだ・・・」

「駄目・・！死ぬのは・・駄目！・！」

泣きそうになつたステラの頬を優しくなでるように触るネオ。そして、笑つた顔をしてステラを落ち着かせる。

「なら・・戦わないとな。心配するな。私達が守るよ。」

「ま・・も・・る・・」

あどけなく彼女はつぶやくと、その言葉でシン・アスカと過ごした時間を思い出す。彼女の嫌いな瞳をしているのに、彼女を守る、といつた。

その真剣なまなざしに彼女は甘え、安らぎを覚えたのだ。ネオも同じだと彼女は思い、黙つて頷いた。

ついに発信準備が整い、四機のMSと一機のMAは低いなり声をあげながら

雪上を進んでいく。

『ストライク』に乗るネオに、ステイングは不満そうな顔で通信を入れた。

「何で“アレ”俺にくれなかつたんだ？」

“アレ”とはステラが乗る“化け物”の事だろうか。ステイングは少なからず彼女のことを心配しているのだろうか？ それとも純粹にあの機体が欲しかったのか。何にせよ、ネオは淡々とその質問に答えた。

「適正なんだ・・・！ステラのほうが効率が良いと・・データ上でな！」

「けどよ・・ステラはさつきまで瀕死だつたんだぜー！」

それ以上、ネオは言葉を交わさなかつた。

ステイングは彼女のことを少なからず心配しているみたいだ。

『デストロイ』を護衛するかのように上下左右に4機のMSがついた。

左右には『ストライク』と『カオス』。後ろにはアウルの『アビス』前には新型の黒と白に分けられた『ブリュナーク』。だが、『ブリュナーク』は背部に装備されている羽型のブースターを起動させ

一気にベルリンの都市まで駆け抜ける。

「すげえ早さだ！これが『フリーダム』かよー通りで『レイダー』が勝てないわけだ」

2年前の大戦の断片を思い出すクロト。

単機で『フリーダム』に挑んでいた頃が懐かしく思う。

ベルリンに到着すると、生活を営んでいる人々がそこにいた。

これから戦闘など起こるはずも無いと思わせるような平和そうな街。『ブリュナーク』の機体がベルリンの街の上空に現れるのが分かると住民はギョッとした顔で『ブリュナーク』を見つめた。

くこれより5分後、ここは火の海と化す！市民は出来るだけ遠くに逃げる！

これは脅しじゃない！>

クロトは通信を切つて街の住民が逃げていくのを確認して、『デストロイ』の到着を待つた。

数秒たつと、多数のザフトMSが『ブリュナーク』に攻撃をしかけてくる。

「『バクウ』タイプ4、『ジン』タイプ3、『シグー』タイプ2』
どれもこれも近接戦を重視した格闘タイプらしく、『ジン』、『シグー』に

おいては対艦刀に酷似した大剣を装備している。

「対テストロイ戦を想定した機体・・か！」

クロトは唇を軽くなめる。

「遊びにはちよづじいい・・新型の性能を試すかね・・！」

『ブリュナーク』は複数の機体に飛び込んでいく。

『ジン』の攻撃をかいくぐり、懷に飛び込んで両足に装備しているアーマーシュノナイダーと呼ばれるコンバットナイフを頭部に突き立てて、再起不能にする。

残りの一機の『ジン』も腰部にマウントしてあるバームライフルで両腕を撃ち落し、落下させる。

「すげえ・・！」

自らの機体の性能に舌を巻く。

『バクウ』が地を蹴り上げ、頭部の口に装備されているサーべルを抜き放つと

そのまま『ブリュナーク』に向かつて突進する。

『ブリュナーク』はもう一方の手でもう一本のサーべルを抜いて、左の手、右の手の順番で『バクウ』の両腕両足を切り裂く。次に三機の『バクウ』が最初の『バクウ』が落ちると同時に四方から『ブリュナーク』を襲うが、逆に返り討ちする。

ついに2機の『シグー』がコンビネーションを組んで『ブリュナーク』に

対艦刀を突き刺そうとするが、『ブリュナーカ』はすばやくビームライフルに手を

伸ばして、装備を換え、『シグー』の対艦刀を持つて腕に撃つ。あまりにも素早い攻撃に、一機の『シグー』は右腕を無残に破壊され、

慣性の方向に落下する。

しかし、もう一機はかわして、『ブリュナーカ』にそれを振り下ろした。

「あぶねえよー！」

シールドで攻撃を防ぎ、ビームライフルで両足を破壊して、落する『シグー』わずか3分弱で9機のMSを撃破した。

「昔は17秒でMSを3機も落としたのになーーー。」

5分丁度に『デストロイ』は街に到着した。

到着した頃には住民は既にシェルターに避難した所だった。

「クロト・・まさかお前・・・。」

「ジブリールのオッサンに言われたことは一つ。都市を破壊しろだ。住民を殺せまで言われていなってね」

「・・・後でジブリール氏に何を言われても知らんからなーー。」

ネオが笑うと、5機の機体はベルリンの都市を破壊する。

『デストロイ』の蟹のよつた甲羅に装備された四門の砲門から強烈なビームが発射する。そして、半回転させ周辺のビルを一気に焼き払う。

『デストロイ』が来て数十秒で街は壊滅状態に陥る。街を守るように、ザフトのMSが『デストロイ』に向かっていくが『カオス』と『アビス』の攻撃で届かず、散つていった。

「はああああああ！」

ステラが声をあげると同時に、ビームを発射する。

「はあ・・はあ・・」

怖いもの・・『ワイモノ』・・怖いもの皆・・壊す！
壊さなきや、死んじやう・・死んじやうの・・

「あれは・・！」

ネオがレーダーを見て息を呑む。

「大型艦の接近を確認、二つだ！『AA』と『ミネルヴァ』！」

『ミネルヴァ』は『デストロイ』を確認すると、『ミネルヴァ』に積まれている

最高の威力を誇る砲門を起動させる。タンホイザード。肉眼でエネルギーが収束されるのが見えると、次の瞬間それは一気に解き放たれ

『デストロイ』に発射された。

だが、『デストロイ』に直撃はせず、『デストロイ』の手前で弾かれた。

『デストロイ』が攻撃されてきたほうに砲身の狙いを定めると、今度は上空から

ビームが一発撃たれた。

白い天使の守護神、『フリーダム』だ。

「あれは…氣おつけ！ステラ！そいつはフリーダムだ！手ごわいぞ！」

ネオが彼女に言い放つ。

「何だ…！お前はああああ…！」

『フリーダム』は瞬時に『デストロイ』のリフレクターの特性を理解したかのようにビームサーベルを抜き放つ。

クロトはすぐにそれに気づいて、『フリーダム』をとめる。

「止めろおーー！」

『フリーダム』と『ブリュナーク』はお互いの盾で体当たりし、しきがあつ。

「『フリーダム』？これは…！」

『フリーダム』のパイロットであるキラは自分と酷似した機体を見て驚いた。

「エリは、引け、キラ！」

「クロト？」

（あの黒い機体に乗つてゐるの、クロト？）

『ブリュナーク』は思い切り盾を弾いて距離を置く。離れ際に『フリーダム』に胸部に内蔵されてゐるマシンキャノンを連射して視界を弾の雨で一瞬だけ奪う。

クロトはその一瞬を見逃さず、『フリーダム』の胸部に思い切り蹴りをいれ、『フリーダム』を後方へと飛ばした。

「『フリーダム』！」

『フリーダム』をにらみつけたのはステイニングだった。

「てめえは・・俺が！」

恨みを込めた台詞を吐くと背部のドラグーンを2個飛ばして

『フリーダム』を攻める。

キラはこのパイロットが以前よりも格段に成長してゐるのが分かつた。

「ドラグーンの配置が上手だ・・・常に死角を取つてる！」

ステイニングが『フリーダム』の戦闘ショミーレーションを念入りにやつていたのは確かだ。『フリーダム』のよつた高性能MSに対抗するには『カオス』の特色であるこのドラグーン・システムをフルに使つた攻撃を

しなければいけない。だからステイングは、ネオにドラグーンの使い方を学び、空間間知能力を育んだのだ。

「“あのポイント”に入れば・・・！」

『カオス』を限界まで動かし、『フリーダム』を徐々に圧倒していく。

「入った！！」

『カオス』が誘導したのは、背後に動けなくなる場所、つまり背後にビルがあるポイントだ。

『フリーダム』の背後にはビルが立ちはだかり、背後には移動できない。

「止めだ！！！」

ステイングは内心、歓喜の声をあげてトリガーを引いた。ドラグーンと『カオス』のビームライフルの砲門が火を吹き三つのビームは『フリーダム』に集中した。だが、『フリーダム』はその上を行った。

ビームが収束する瞬間を狙い、その一点を盾で防いだのだ。

「何！」

ステイングの悲痛な声を上げる間もなく、キラの容赦ない攻撃が『カオス』を打ちのめした。サーベルで両腕を斬られ、落下していった。

『フリーダム』はすぐに『デストロイ』に狙いを定めた。

第十話『ベルコン』（後書き）

ステイニングは自前の頭（HOR-80上）を駆使して戦っていますが、キラの前では無謀に終わってしまいました。彼はこの戦闘の後、一気にその能力を開花させる・・・予定です。

第十一話『ステラ』

「くそ・・・やられはせん・・・」

『フリーダム』に迫るネオ。

こんな所でステラを落とさせるわけには行かない・・・

そのとき、彼の死角を突いて『ストライク』に迫るMSがいた。青と白と赤のその色はまっすぐに『ストライク』の背後を捉えていた。

「あれは・・・」

『インパルス』・・・あの時の坊主。ネオは愕然として、『フリーダム』をおいて『インパルス』身を返す。

「止める坊主！」

ネオは叫びながら『インパルス』に飛び込む。互いに盾で押し合いながら『インパルス』に搭乗しているシンはネオに叫んだ。

「くそー! どうして約束を破つた! ! !」

「何! ?」

ネオはシンが既に『デストロイ』にステラが乗つていることを知っているようだ。

「分かるのか？！」

それ以上、シンは答えようとはしなかった。ネオは盾をゆっくりと戻すと、『インパルス』はフランクと『テス

トロイ』に

向かっていく。

（そうか、お前も俺と同じようだ……）

ネオと同じような人間。しかも、“血のつながり”が無くてもそれは“わかる”のだ。

鋭い勘でもなければエスパーでもない。そこに誰がいるのかも、何をしようとするのかも分かる。誰かがいる感覚。

「やられねえええ……」

ネイビーブルーの『アビス』は『デストロイ』に近づく『インパルス』にビームランスを突きたてる。

「五月蠅い……」

シンは吐きすてると、『インパルス』のバーニアペダルをベッタリと踏み、

バーニアを全開にして『アビス』に突撃すると、『アビス』の両足を切断し、一閃した。

青髪の少年が乗っているとすぐに感じ取つたから、彼がステラの仲間と分かつた。

『クピットをはずしたのは彼なりの配慮なのだね？』

アウルが悲鳴を上げて、落下していく。

俺がステラを返したから・・・?
全部、自分のせいだ・・・!

俺がステラを返さなかつたら」んな事にはならなかつたんだ！

ふと、彼の脳裏にあるイメージが浮かんだ。

それは突然の出来事だった。

まさしくその姿は、ステラだった。

「スニ ラバ 立ハシル」

そのとき、『デストロイ』は蟹のような形状から変形を始める。人間型になつたそれは、『インパルス』の有に3倍はある大きさで頭部は人間の目を連想させるかのようなカメラアイを持つている。

「ガンダム・・！」

変形した『テストロイ』に『フリーダム』が迫っていた。シンは歯軋りしながら『フリーダム』を追撃する。

(何も知らないにくせに・・・・こつもでしゃばつて!)

シンは『フリーダム』にビームライフルを放ち、『アストロイ』に近づけさせないようけん制する。

だが、決して『フリーダム』に攻撃しようとしているわけではない。

立場は違うが、同じ意思の元で戦っているからだ。

「あんたは下がつてればいいんだ！」

シンは『フリーダム』に乗るキラに對して威圧的な態度を示す。通信越しではあつたが、キラにはそれが分かるくらいだつた。キラはそれに従い、少し様子見をしようと、『インパルス』の背後に回つて

後方に下がつた。

「ステラ・・俺だよ！・シンだよ！」

『インパルス』の『クピットを開いて、彼女の乗る悪魔の機体にゆっくり近づいていた。

『デストロイ』の『クピット内で聞き覚えのある声がステラの耳に伝わってきた。

「し・・・ん・・・・？」

「ステラ・・・！」

「シンー・シンー！」

ステラは『クピット内で歓喜に満ちた声でシンの名前を呼んだ。そして、彼女は自分を守ってくれる存在が近くにいるのが分かると、全身を安堵が包み込んだ。

暖かく、希望が胸から溢れるのがわかると、自然と笑顔と暖かい涙がこぼれた。

「ステラ…会いにきたんだ！俺、言つたら？守るつて！…ステラを守るつて！」

「うん…」

「だから…ステラ…降りるんだ！」それ“から降りるんだ！”

「でも！ネオは…これに乗つてないと”死んじやうつて！”

ステラはビクつと体を強張らせた。自らが言つた言葉があるう」と
か、彼女自身の
”禁句”であった。ステラが包んでいた安堵は一瞬にして、緊張に
変わる。

心中で死への恐怖をとどめていたダムが崩壊したのである。土石
流のようにな
彼女の全身に恐怖が流れ出した。

「だ…だめ…」

急に彼女の様子が一変したのをシンは不思議に思つた。

「ステラ…どうしたの？早くそれから…・・・

「駄目…・・死んじやうは駄目…・・・怖いものは皆…・・・」

ふと、ステラの脳裏に信頼する上官のネオの言葉が浮かんだ。

(ステラも・・これでまた戦わないとな。)

(また、私達を殺しに来る)

「怖いものは皆・・・皆、無くす！！」

シンはギョッとした。何故？上手くいってたのに。ステラを開放でみると

思つてたのに・・・どうして？

そして、『テストロイ』は再び攻撃を開始する。『テストロイ』の胸部の

スーパースキュラがエネルギーを溜めるのがシンは分かつた。

「す・・・ステラ！止めるんだ！もう！」

だが、シンの言葉は、今の錯乱している彼女には届かなかつた。

「ステラあああ！」

悲痛の叫びを出すも、今のステラには何も見えていない。涙がとめどなく流れ

視界を覆つているのだ。

「イヤア嗚呼ああああああああああああああああああああ！」

もう彼女に目に映るのは自らが体験してきた、恐怖と、死のイメージだけだった。

自分が死ぬのは嫌だ。絶対に嫌だ。もつ誰一人が死ぬのは嫌だ。絶対に・・・。

「何で・・・こんな事に！」

シンは自分がステラをここまで追い込んでしまつたと思うと、絶望

した。

自分がもつと上手く説得すれば……。自己嫌悪に陥つてゐる最中、彼の後ろに

存在する『フリーダム』が『インパルス』の前に躍り出た。

「もう止めろー。」

キラは、ビームサーベルで『デストロイ』の胸部を貫こうとする。これ以上、『デストロイ』に街を破壊させてはいけない！ だが、その思いの込めたサーベルは『デストロイ』には届かず、その前に、黒色の自分の同様機に体当たりで止められ、吹き飛ばされた。

『デストロイ』のコクピットが皮一枚えぐれた。

「ぐ……クロト？」

「キラ！ 待つてくれ！」 アレ “ こはー！ ”

「つ……！」

いくらクロトが相手でも、この『大なM.S.』に街を破壊させる訳には・！

そうキラは思つと、『フリーダム』は『ブリュナーク』にターゲットを移し

武装を破壊するために、ビームライフルを連射した。

「あ・・キラーー！」

「たとえ、君が相手でも僕はーー！」

キラも2年前の大戦の時に、守るべきものを無くした。

それ故に、彼はもう大切なものを失わない為に、武器を振るつた。

「僕は君を討つ……！」

「IJWの・・分らず屋……」

「分らず屋は君だ！－！」

そう言つと、一人の機体は高速で動き始める。

互いに接近戦へと移行し、サーベルを構えるとその得物が互いの機体の中心で交差した。

そして、お互に隙を見つければ、サーベルを叩き込むが盾で受け止める。

互いに翼を持つ機体が交戦している内に、シンはステラを再び説得しようと試み始めた。

「嫌ああああ……！」

『デストロイ』の胸部から発射されたビームは都市を再び焼き払う。悲痛な彼女の心がまるで投影されているかのような悲しい攻撃だった。

シン自身もその彼女の悲しみが、彼の心に伝わつてくる。

「俺が・・分からぬなら・・」

シンは『インパルス』を空中に停滞させながら機体のコクピットを開く。

「ステラ……分かるだろ。これならよく見えるだろ。」

彼女は『デストロイ』のえぐれたコクピットからシンの姿を見た。肉眼で確認できるくらい近くで見える彼の顔。すると、彼女はシンと過ごした浜辺を思い出す。互いに服が濡れて裸になつて互いの体を温めた事。そして、あの時もらつた貝殻を。

「つは・・はあ・・はあ・・」

発作が治まつたかように興奮状態が解ける。

彼女は自分の胸に冷たい何かが当たつているのが分かつた。胸に当たつていたものは貝殻だつた。彼女はその貝殻をギュッと掴むと、唇を噛み締めた。

心臓がドキドキしているのが分かり、辛かつたが我慢した。

「ステラ! 分かる?」

「ううう・・・」

「ステラ! ……ステラ!」

「シン・・」

「ステラ・・」

だが『デストロイ』の内部で突然アラート音が鳴り始めた。ステラはビクつとし、コンソールの画面を見る。

そこには彼女の嫌いな色で危険としつかり移しだされていた。

先ほどの『フリーダム』の攻撃が、ここまで響いていたのだ。このままでは『デストロイ』はシンを巻き込んで爆発してしまう。彼女は、急いでシンに向かつて言い放った。

「シン！ 機体に！」

「え・・？」

「デストロイが・・・爆発・・！」

「じゃあ！ ステラも一緒に・・！」

ステラは横に首を振った。

彼が心配すると思つて、彼女は出来る限りの笑顔でシンに言つた。

「ステラ・・殺したから・・」

「何を・・・？！」

『デストロイ』のコクピットの中が次第にスパークし始める。いたるところからスパークを起こし、彼女は体を強張らせて、シンに自分が覚えた異性への愛情表現を静かに言つた。

「シン・・・好き・・・」

「す・・・ステラ！・！」

急いで『インパルス』を動かし、コクピットに手を伸ばす。だが、それは間に合わず、『デストロイ』の口部と胸部の砲口から煙が出て、そして次の瞬間に空中に光を放ち、そして爆発した。

『インパルス』の中でシンは呆然とその光景を見た。
燃える『デストロイ』。
シンは声にならない声で叫んだ。

悲しむ彼のその声は獣の叫びのようだった。

第十一話『決着』

『デストロイ』が爆発後、『インパルス』は空中で停滞し続けていた。

その他にも、『お仲間』の撃墜されたシグナル音がファンтомペイントそれぞれの

機体の中に静かに鳴り響く。ステイングやアウルはもちろん、ネオもクロトも

その事実をすんなりと受け止める事ができず、ただ息を呑んだ。

燃える『デストロイ』を前に、ただ一人、怒りを打ち震えるシン。自分がもてる力で操縦桿を握り締め、そこから半回転して、『フリーダム』が

いる方向へ、『インパルス』を回頭させた。

シンは今の自分が思っている事を静かに、そして冷ややかに呟いた。

「ステラは・・・ただ怖かっただけなんだ・・・」

涙声が混じったシンの言葉。

「ただ・・・助かるうとしたかつたんだ・・・だからつ・・・・・！」

シンの語氣はだんだんと強くなつていく。それは、自分自身が彼女を守れなかつた事実、

そしてその約束を守れなかつた事にやりよつのない怒りと悲しみが、だんだんと彼を蝕み始めたのだ。

「殺す必要なんかなかつた・・・つー」

『インパルス』はビームライフルを『フリーダム』に構える。

「俺は・・・あんたを討つ・・・。今日ーー!!でーー!」

彼の赤く染まつた瞳にはうつすら涙がにじんでいる。

怒りが頂点へと達したシンは、ステラを殺した張本人である

『フリーダム』へ猛攻する。

ビームライフルを連射して、『フリーダム』に接近し始める。

「あんたがステラを殺したああああー!!」

シンの形相はまさに鬼神のようで『フリーダム』を睨み、恨みと怒りを込めた指でトリガーを引きつづける。

その怒りと殺氣を感じた『フリータム』のキラは、背筋が凍るような感覚に襲われた。この感じは一度、キラ自身味わったことがあり、自らも

実行した事がある感覚。

(トールが殺された時と同じ・・!)

自分の友が親友に殺された時に、この感覚に陥つた事がある。今、自分を殺そうとしているパイロットも昔の自分と同じだ。

「くつ・・!」

キラは『インパルス』の攻撃を自らが持てる最大の技量で交わすも、先の戦いより

急成長してゐる『インパルス』の動きに困惑した。

何故なら、彼の動きはまさしく“自分”そのものであるからだ。

ステップしつつ、ビームライフルを『インパルス』の頭部、そして

ライフルを持する右腕めがけ発射するが、『インパルス』はその攻撃を

読んでいたのか、すんなりと回避した。

シンは『インパルス』のシールドを投げつける、回転するそれにめがけ

ビームライフルを発射した。ビームはビームコーティングされた盾に命中し

反射、反射したビームは『フリーダム』の頭部をかすめる。キラは今の攻撃に驚く。

（あ・・当たられた？！）

一瞬パニック状態になつたキラ。

その隙をついて、『インパルス』はサーべルを引き抜いて『フリーダム』の

コクピットにつきたてようとする。

キラは『フリーダム』を後ろにスッテップさせ、それを交わし、今の攻撃で

体制が崩れた『インパルス』の胸部を一閃する。

だが、『インパルス』は驚きの方法で、その攻撃を交わしたのだ。

「まだあああ！」

シンは胸部と脚部を切り離し、『フリーダム』のサーべルを回避したのだ。

考えていたわけではなかつたが体が先に行動を起こした。

そして、残つた胸部で『フリーダム』をがつちりと捕まえて、頭部と胸部のバルカン砲が火を吹く。

『フリーダム』は速射砲の雨を近距離で直撃して、キラの視界を奪う。

『インパルス』の特徴であるコアプロックシステムを上手く活用した戦法で

キラの乗る『フリーダム』を翻弄するシン。

『インパルス』の胸部とコアファイターをも切り離し、戦闘機のみとなつた『インパルス』。

『フリーダム』は必死に胸部のみとなつた『インパルス』の抜け殻を離そうとするも

その腕は、ガツチリと掴まれているから離れない。

「・・・くつ！」

キラは苦渋する。

とどめと言わんばかりに、シンは切り離した胸部とバックパックめがけて

戦闘機のバルカン砲を連射する。

本体を切り離された胸部は、VPS装甲が切れ灰色の装甲は一瞬で穴だらけになつた。

そして、爆発し『フリーダム』は後方への吹き飛ぶ。

今の動きを見て『ミネルヴァ』でその光景を見ていたルナマリアは驚愕した。

「す・・すゞいシン！あんな戦い方・・」

「ミネルヴァ！ヒストライヤーを…それと、フォースシルエットとソートとソードモ…！」

ワンテンポ遅れて、『ミネルヴァ』からフォースシルエットとソードシルエットが

発射され、『インパルス』と合体する。

後方へ吹き飛んでいる『フリーダム』を猛スピードで追いかける。

「つまむむむむむむむむ…」

『インパルス』はエクスカリバーを『フリーダム』の胸部へとめがける。

『フリーダム』もそれにあわせ、『インパルス』にビームライフルを撃つ。

『インパルス』は頭部や肩装甲を打ち抜かれるが、止まらず、次の瞬間

『フリーダム』の胸にそれは刺さり、巨大な爆発を巻き起こした。

『インパルス』は至る所がボロボロになっていたものの、宿敵であった

『フリーダム』を撃破し、シンは歓喜に打ち震えた。

俺が、あの『フリーダム』を討つたんだ！ステラの仇をとつたんだ！

「は・・はは・・ははは！」

虚しく何かぽつかりと胸に穴が開いたような感覚。

必死で自分の中で正当化する。

自分の行動は間違つていなかつたんだ。正しかつたんだ。

俺は・・俺は・・。

・・あれだけ燃えてるんだ、遺体は無い。ステラはもう居ないんだ。シンは虚ろな瞳から一筋の涙をこぼすと、『テストロイ』を見送り中破した『インパルス』を回頭させ『ミネルヴァ』へ着艦させた。

「そ・・そな・・嘘だろ・・」

クロトはこの事実をさらに受け止め切れなかつた。

ステラの死、ましてや予想もしていなかつた最強の『コーディネータ

ーの死亡。

一度に一人の大切な者を失つたクロトも、ただ撃破された『テストロイ』を

見つめるだけ。

何故、自分は今のシンの行動をとめられなかつたのか？

自分でキラは最強だと認知していた故の誤算だったのだ。

行き場のない虚無感が彼の中でどどまり、『ブリュナーク』を『テストロイ』の

近くで止めた。

それに続いてか、『ストライク』に乗るネオも来る。

「せめて、遺体だけだけでも確認させてくれ・・・」

静かにネオは言った。

無駄だと分かつていたとしても、これまでわが子のようと一緒に戦つてきた少女。

その最後を見届ける事が、彼の親御心に似た感情だったのであろう。涙は自然と出なかつた。ネオは『ストライク』を使って、『テストロイ』のコクピットをこじ開ける。

「・・・・・」

ネオは驚愕した。

そこには、擦り傷や、パイロットスーツは焦げているものの、重傷ではない

ステラの姿がそこにあつた。

遺体にしては綺麗な形で残つていた。ネオは『ストライク』の手の中に

ステラをのせて、ネオはコクピットから出ると、ストライクの掌に

飛び乗る。

そしてステラの遺体を抱きかかえた。

「綺麗な顔だ。もう戦わなくて済むんだ。お休み・・ステラ
仮面越しだつたが、クロトにはネオの気持ちが痛いほど伝わった。
俺は馬鹿者だ。あの坊主の約束を破つて、結局死なせちまつた大馬
鹿者だ。

トクン。

誰かの鼓動が聞こえた。ネオはハツとしてステラに視線を移す。

「ケホツ・・ハア・・・はあ・・

ステラの口から息を吹き返すと共に、少量の血液が吹き出された。
ネオは諦めて乾いていた自分の心が再び潤う。
奇跡が起きたのだ。彼女が再び息を吹き返したのだ。

「ステラ・・・・クロト・・生きてるぞー」

クロトは急いで『ブリュナーク』から躍り出で、ネオからステラを抱きかかえると
いたわりながら彼女を『クピット』に連れて、『ブリュナーク』を出す。

まだ間に合つ。もう『お仲間』を死なせはしない。

クロトは彼女の体に『氣』をつけながら、『ブリュナーク』を母艦に連れて帰るのであつた。

「頼んだぞ。クロト・・・死なせないでくれ・・・！」

ここの中、必死に彼女の安否を気にする。
もう後は祈るしか残されていない。

「頼む神様。一生に一度のお願いだ。ステラの命を救ってくれ・・・」
呟くと、『ストライク』を使い、『アビス』、『カオス』を回収するのだった・・・

第十一話『決着』（後書き）

キラとシンの決着がやけに、さうりと終わってしまったので、シン
だけでなく
他のキャラクターの描[写]をそのつまじ書きます。

第十二話『天国』

母艦である『ボナパルト』に帰還したクロトはパイロットスーツを脱がず

すぐさま、ステラを医療室へ運ぶ。

衰弱しきつた彼女の体は血液が循環していないのか酷く冷たく、それはパイロットスーツ越しからでも分かるほどだ。

そのせいか、彼女の顔はやつれて、雪のように透き通った肌。青白く寒そうな表情。

医療室の扉を乱暴に開くと、眼鏡をかけ、カルテを見ていた医師は扉の開く音に反応し、驚いた顔でクロトに顔を向ける。

「な・・なんだ？」

「怪我人だ。すぐに手術をしないと死んでしまう」

「・・・『テストロイ』の生体CPUか・・・任務は失敗したのかな？」

「そんな事はどうでもいいだろつーーー！」

悠長な医師に頭に血が上るクロト。ブルーコスモスに賛同する者にとって

強化人間の扱いなど、MSの部品の一部でしかない事を、改めて自覚する。

彼らにとつて「コーディネーター」と強化人間は紙一重の存在なのだ。

（どうちが人間だ馬鹿野郎）

今まで命がけで戦ってきた者を気にかけるよつた言葉を言わない医師を
クロトは内心毒づいた。

「いいだろう。その『生体CPU』を治そつ。」

「早くしらつ！！」

「おお・・怖い怖い。」

医師はクロトの焦り様を陰で見えない場所で笑うと
看護婦を内部無線でよびかけ、集中治療室へと向かう。
集中治療室はガラス張りの部屋で、医務室からでも見ることが出来
る。

中は、ベッドが一つあり、さまざまな治療機械が存在する。
集中治療室の扉が開かれると、彼女は担架の上で応急処置されていて
人口呼吸器をつけた痛々しい姿がクロトの目に映る。

集中治療室の中央のベッドの上にステラが置かれ、先ほどの医師と
数人の助手が

彼女の周りを囲み、メスを使い体を切開し始める。

数分経つごとに、ステラの体から『デストロイ』の「クピットの破
片が

摘出されたりする。

それから、数時間すると集中治療室の赤く光るランプが緑に変わつ
た。

どうやら手術が終わつたのであらう。

終わる頃には、ステイニングとアウル、そしてネオの3人が
クロトの背後に立つていた。

「どうだ？ 容態のほうは？」

ネオがクロトに訊いた。

「成功したみたい。今はぐつすり眠ってるよ。一、一週間もすれば復帰出来るつて」

「そうか」

ネオは少し喜びつつ、返した。

ステイニングとアウルも彼女の様子を見て安心したようで、ため息をついた。

「次はヘヴンズベースで仕事だそうだ。」

ネオはステラから話題を切り替えして、次の任務内容を軽く3人に伝えると、医療室を1人後にした。

アウルはステラの安否が分かつて、どつと疲れが押し寄せてきたので先に寝ると二人に伝えると自室へ走る。

「ふん・・やれやれ・・・」

ステイニングはアウルの後姿を鼻で笑うと、クロト共に『ボナパルト』の廊下を歩く。

「忙しいやつら・・ですみね」

「・・・あ・・ああ。やつだな。」

「・・・ん? びつたんです? 隊長?」

「いや・・少し疲れたみたいで・・な。」

クロトは蒼白した顔でステイニングに答える。
ステイニングも彼の異変に気付いたのか、しつこく医療室へ戻るよう
促す。

「ほんとに・・大丈夫ですか?」

「ああ・・だから・・・・・・」

言い終わる途中、急に猛スピードでトイレへと駆け込むクロト。
洗面所の前でビチャビチャと水が流れるような音と共に、排水溝が
おびただしい量の
血で埋め尽くされる。クロトの口から血液が流れ落ち、必死で口を
抑え
吐血を隠す。その姿を見たステイニングは目を見開き、驚きを隠せない表情だ。

「びつしたんですね! ? びつか、やらたんですね! ?」

クロトはすぐにパイロットスーツの腰にあるポケットから薬ビンを取り出し、
無造作に手のひらに薬を落とし、それを一気に口の中へ放り込み飲み込んだ。
口に付着した血をスーツを着た腕で拭つと、多量の血がスーツに付いた。

「…………」のことは、黙つてゐよ。ア・カルにもネオにも、そして
ステラにも

自分の死期が近い事を悟つた表情でステイニングに告白した。

「内臓や、脳や、至るところ全部、ボロボロになつてゐるこ
んだ。」

壁にドツと寄りかかり、ステイニングの方へ体を向ける。
クロトは、ステイニングに薬ビンを見せるように手の平へ乗せる。
彼の手の平は震えていて、なんとも痛々しい。

「ここつで延命したのさ……。もつて後、数ヶ月らしい。」

「…………」

ステイニングは何もいえなかつた。彼がそんな体で戦つて来たなんて
事も知らず

その上、残りの寿命のことも聞かされ、どう答へればいいか分から
なかつた。

逃げ場のない立場に立たされ、その責任の重大さに押しつぶされる
ような感覺。

「…………」使つてしまつたけど、『ブリュナーク』、お前に預け
るよう申請
しようとす。

「あつ……俺、どうす……」

たどたどしく、口を開くステイニングの肩に手を置いて、クロトは柔らかい表情で答えた。

「お前に・・まかせたかんな。」

そうすると、クロトは出て行った。ステイニングはしばらく、洗面所の前でぼうぜんと立っていた。自分が彼から伝えられた心。全てを任せられた重み。クロトの言葉は、彼の全てをステイニングにまるまる預けると、言つた意味だつたということ。ステイニングはその意味を深く考え、そして自分の中に消化した。目をつぶりながら、その意味の重大さと責任を噛み締めると、彼はまた一步大人に近づいたのだった。

それから、まもなく、国内回線を使いザフト本国からギルバート・デュランダル議長

直々に演説が行われた。その演説はブルーコスモスの権力を握る賢人会、”ロゴス“

を撲滅するといった内容だつた。放送は、まるで連合は悪者、ザフトは正義の味方といった

図式で語られた。まんまと、デュランダルの政策にはまつてしまつたのだ。

民衆からも嫌われていた、ロゴスやロゴス側の連合は世界の大半以上の人間を敵に回したのである。

それを契機に、ザフト軍ジブラルタルでは、一時的にザフトと反ロゴス側連合軍との同盟が

行われ、その大量の戦力を用いてヘヴンズベースにかくまわれてい

るロゴスを叩きつぶすのが
次に行われる任務だつた。

そんな中、ヘヴンズベースにて新たな任務を下された。

内容はもちろん、ヘブンズベースにて連合の総戦力の大半を用いた
防衛戦、

そう、ロード・ジブリール氏所属のロゴス護衛である。

その中には、ネオ達5人のファンтомペインの姿もあった。
ヘヴンズベースは、大西洋北部アイスランドに位置する場所に存在
する最高軍司令部であり、

そしてザフト軍地上部隊の最大拠点のひとつである、ジブラルタル
と目と鼻の先に存在する。

流石に、地球連合が誇る最大の拠点であるから迎撃体制は完璧であ
つた。

それは、多数のMAが配備され、さらに5機の『デストロイ』もあ
るから鉄壁に近いものだ。

彼ら五人はつかの間を休息を取りながら、次の戦闘の準備を整えて
いた。

「つーか俺らなんで収集されたわけ?『デストロイ』も『カオス』
も『アビス』も

みーんな壊れちまつたから、俺たち乗るもんね?」

アウルはネオにぼやいた。

これだけ面白い祭りが行われよつとしてるのに、肝心の機体が無い
のでは
楽しむ事なんてできないじゃないか

「機体ならちゃんとあるだ。」

「え・・？」

「まだお前だけには見せてないけどな。」

「何でえ？」

子供がクリスマスに玩具をもらはずに苛立つてゐる、そんな表情でアウルはネオを睨む。

「何でえ？ つて・・言わなかつたじゃない。アウル

「ちえつ・・！」

舌打ちをして、キヨロキヨロと周りを見渡すアウル。ステイングとステラ、クロトの姿がさつきから見えないと、ネオに居場所を聞いた。

「ネオー。あいつらビリこつたの？」

「確か、新型の調整をしに出ていつたぞ。」

「んー・・じやあ格納庫にいんの？」

「たぶんな。」

アウルはブリーフィングルームから出ると、すぐに走つて格納庫へと向かつ。

自分の新しい機体と仲間の姿を拝みに。意気揚々と廊下を走り抜け、格納庫に到着した。

格納庫は少し暗く、左右に機体が横一列にあり、それぞれ3機ずつ

合計6機あるのが見える。

一つは『ブリュナーク』、その隣から端まで2機のMSがあつて、見慣れない機体である。どうやらネオが言つていた新型つていうのはこの事であろう。

『ブリュナーク』の向かい側にはダガータイプが2機とネオの愛機『ストライク』がある。

『ブリュナーク』とその隣の新型2機は灰色に近い黒色で静かにたたずんでいた。

どうやら『カオス』や『アビス』と同系統のMSなのだろう。

『ブリュナーク』の『クピット』内で忙しそうにクロトがパソコンのキーを叩いている。

「クロトー。何してんのー？」

言われると、クロトはやつとアウルの存在に気付き、アウルに向かつて答えた。

「OSを書き換えてんの。」

「ステイニングとステラ知らねー？」

クロトは『ブリュナーク』の隣の新型機を親指で指し示した。指した方向の一一番端の灰色の機体の『クピット』に一人の姿が見えるのが分かつた。

「おおーー！ステイニング、ステラっ！」

ステラは顔にバイザーをつけていて、ステイニングが彼女の隣でうるさく指導していた。

ステイニングは彼女に少し席をはずすと囁くと、アウルがいる場所へ、クレーンを使って移動する。

「どうした？」

苛立つた形相でステイニングがアウルに尋ねた。

「ヒマだからバスケでもしょーぜって思つたら誰もいなかうさー。探しに来たつてわけ。」

「悪いな。今、ステラにドラグーンの使い方を教えてたとこだ。後にしてくれ。」

「へいへい。」

「そうそう。お前のは真ん中の”そいつ”だから。」

ステイニングが指で真ん中の機体を指し、アウルに教える。

彼は新しい自分の玩具を前にし、目を輝かせる少年のように機体をみつめ、

3人が早く終わらないかな　ほんやりと考えて、じつと待つていることにした。

オリジナル機体設定

ここでは第1-3話までのMS設定を出させていただきます。
が、1話から読まずにここを読むのはネタバレが含まれますのであ
まりオススメはしません。

新型GATシリーズ、400系統MS。100系統は汎用型。200系統は最新装備搭載。300系統は航空能力、変形機構、といった様々な能力がある中、新型である400系統には極秘裏に

核を標準搭載したMSである。『ユートロンジャマーキャンセラー』を搭載し、核エンジンを

扱える機体が400系統なのであるが、その記念すべき初の機体がこの『ブリュナーク』である。

『ブリュナーク』はムルタ・アズラエルがCE71年次に入手した、

『フリーダム』、

『ジャステイス』の設計データを元に開発を行っていて、その原型となつた『フリーダム』

の連合製である。『フリーダム』のフォルムはそのままで、カラー

リングは爽快な青から

灰色系統の黒が特徴。武装等は特に変更はされていない。

マルチロックオン搭載型全周囲モニターを搭載し、PS装甲も採用。元々、イレギュラー（敵の新型兵器等）に対応する為にほぼ専用機として開発されている。

本機は第81部隊ファンタムペイン所属、クロト・ブル少佐の手に渡り、ベルリンでの戦闘で

『フリーダム』と対決している。後に、同所属である生体CPU、ステイリング・オーフレー

の手に渡る。その性能は『フリーダム』と同等でパイロットの技量によって機体の潜在能力は開花されるであろう。一様、『フリーダム』とフレームは同じに近いので『ミーティア』と連結する事もできる。名前の由来はブリューナク（Brionac）で、ケルト神話に登場する魔槍。「貫ぐもの」の意。

武装・ルプス・ビームライフル × 1
ラケルタ・ビームサーベル × 2
クスフィアス・レールガン × 2
バラエーナ・レールガン × 2
ピクウスフ 6 MM 機関砲 × 4
アーマー・ショナイダー × 2

GAT-411A 「フラガラツハ」

GAT-400 系統シリーズの記念すべき、2 機目の MS。『フリー
ダム』と対をなす『ジャステイス』
を元に開発されている。『ブリュナーク』同様、全周囲モニターと
マルチロックオンシステムを搭載している。
本機は『ジャステイス』と同様、接近戦闘を得意とした MS である。
しかし、『ブリュナーク』と違い、『ジャステイス』とは武装が異
なり、

背部に装備されているファトウム 00 は脱着することは不可能にな
つている。

そのため、ファトウム 00 はほぼ背部ブースターの役割が強い。
『ジャステイス』と武装が同じなのは唯一、両肩に装備されている
フランシュエッジのみで
他は『ジャステイス』より『デステイニー』に近い。
例えば、『ジャステイス』の腰部に搭載されていたラケルタ・ビ
ムサーベルは廃止。
折りたたみ式のシユベルトゲベルを装備。ファトウム 00 の側面
に装着する形に。
次に、折りたたみ式の超高インパルス砲アグニ。これもファトウム
00 の側面に装着。

さらに、胸部には『カラミティ』と同じスキュラを装備。近、中、遠全てに対応した機体に仕上がっている。

核エンジンの搭載でエネルギー切れを起こす事もない本機ならではの豊富な武装である。

この機体も、『ブリュナーク』と同様、対イレギュラー戦に着眼しており並みのパイロットでは扱えない機体のせいか、ほぼ専用機として開発されている。機体色は赤紫。名前の由来であるフラガラッハ（Fragara ch）は、ケルト神話に登場する剣。「回答者」「報復者」という意味。

パイロットはアウル・ニーダ

武装

ルпус・ビームライフル × 1
対艦刀シユベルトゲベール × 1
超高インパルス砲アグニ × 1
フラッシュエッジ・ビームブームラン × 2
580mm複列位相エネルギー砲スキュラ × 1
ファトウム00ブースター × 1

GAT-413A 『タスラム』

GAT-400シリーズの三機目。

ZGMF-X13A『プロヴィデンス』を元に開発されたMS。連合軍では初のオールレンジ攻撃を標準搭載したMSである（デストロイはMSというよりMA、スト

ライク、ダガーの

メビウスパックは標準搭載とはいえない） 本機の特徴は『プロヴィデンス』と同様

背部に搭載されているドラグーンシステムである。

ドラグーンシステムとは量子通信による無線通信を用いて、本機から脱着し

パイロットの精神コントロールにより自立攻撃する、いわばシーシリーズにおける

『ファンネル』のことである。全部で13基、計43門、ビーム砲を搭載。

『プロヴィデンス』とは異なり13基中4基は防御用に展開、フォームーションする

ことで、連合の月面基地『アルテミス』のモノフォーズ光波防御シールド

『アルミニューレ・リコミニール』を使用できる。（簡単に言つてしまふとビームで覆われた

膜の中から攻撃する事が出来る）が、アルミニューレ・リコミニールの性質上、

他機に展開し援護することは出来ない（アカツキ・シラヌイ装備とは異なる）。

本機は対イレギュラー戦用に開発されいるため、並みのパイロットでは扱う事が出来ず

ほぼ専用機として開発されている。カラーリングは『プロヴィデンス』とは異なり白色。

パイロットは空間感知能力がファンтомペイン中、最も高かつたステラ・ルーシュに

渡される。名前の由来はタスラムは、ケルト神話の光の神ルーが持つ武器の1つで、

魔弾とも呼ばれている。その名が示すとおりドラグーンこそ、魔弾の名に相応しいとも

いえる。

武装

ピクウス76MM機関砲 × 4
コーディキウス・ビームライフル × 1
防盾ビーム・サーベル × 1
ドラグーンシステム(ビーム砲 × 43)
アルミニューレ・リュミゴホール(フォーメーションに応じて)

他、後々更新予定。

第十四話『黄鶴』（前書き）

学校が忙しく、眠い日々が続きますが、頑張っています。

第十四話『黄昏』

「俺は今回、『ノワール』で出るぞ。」

クレタ沖での戦闘で中破した『ノワール』はその後、修復されネオ・ロアノーク大佐の

搭乗機として使われていた。しかし今回、ヘヴンズベースの指揮をネオ自身が行う事なので

『ノワール』をまわす事になったのだ。先に『ブリュナーク』は、ベルリン戦で大破した

『カオス』を失ったステイニング・オークレーに搭乗させる事に。

「しかし・・俺が扱えるんですか?こんな機体」

すこし不安気な顔を見せるステイニングであった。

確かに、最新鋭機といった『カオス』ではあっても、『ブリュナーク』の性能は

群を抜いている。だから、『カオス』からいきなり性能が跳ね上がったこの機体を

扱う事は本当に出来るのであるつか。しかし、クロト自身の病を思うと、そもそも言つてられない。

「今更、何を不安になつてんだよつ!」

「・・・」

「ううつ・・・」

アウルは彼のあまり見ない一面を見て、元氣づけようと茶化すも、逆効果に終わつたようだ。

だが、彼の言うとおり、今更何を不安になるのであらうものか。

戦闘が始まるまで残りあとわずかになつたのだから。

先に、ヘヴンズベースに国際チャンネルを使い、ギルバート・デュランダル議長自ら降伏勧告を伝令したのだ。その要求をのむか否かは別だが、回答時間として出された6時間はもうすぐ尽きる。

「デュランダルめ・・田にものを見せてくれようやつ！」

猫のように鋭い目をし、眉を細め苛たしそうに吐き捨てた。ロゴスメンバーの一人のジブリールである。彼は士官に顔を向け無言で頷く。

攻撃の合図が落とされたのだ。

合図と共に士官はザフト軍に向けて、ミサイルの発射を促す。すると、ヘブンズベースからミサイルは次々と発射され、白い尾を引くそれは

なめるように弧を描き、雨のよつにザフト軍団に命中していく。その光景を遠田から見ていた『ミネルヴァ』のブリッジにいる全員が息をのみ、

背筋が凍りつく。

やつとその状況を飲み込むことが出来たクルーであつたが、その中、騒がしく

声を上げたのが『ミネルヴァ』の副艦長であるアーサーだった。

「ええええええええええ！」

すつとんきょんな声をだす。思わずデュランダルも「なんだとー？」

と顔をこわばらせた。

しかし、それは彼らだけでなかつたであらう。『ミネルヴァ』のクルーだけではなく

他の戦艦やMSに搭乗している者たちも同じ気持ちだ。

陸から発射されていつたミサイルの雨は『ミネルヴァ』の周りの艦隊に次々と命中し始めた。

やつと『ミネルヴァ』も行動を起こす。

「アーサー！」ちらりも攻撃を開始するわ！」

「はつ・・はい！…」

タリアは思わず歯噛みした。言葉の通じる相手ではなかつた。

時同じくして、ファントムペインの四人組はすでに戦闘態勢にはいつていた。

全員機体のコンソールのキーボードを激しく叩く。次第にシステムが立ち上がり

それぞれの機体の特徴であるガンタムタイプのメインモニター、人間で言うと

目の部分に光がともし、PMS装甲に電力が伝わり次第に鉄灰色の装

甲は

それぞれ色鮮やかに変わる。

そして機体の真上のハッチが次第に、音を立てながら開いていく。そこから見える空は一面が白色で、その中を爆発や爆発音、ビームやミサイルが飛び交っている。ハッチが完全に開放されると、クロトら四人の機体が徐々にハッチからその姿を見せていく。

「準備はいいか？お前らーー？」

クロトは荒たらしい語氣で三人に向かつて言い放つと、三人は完全に戦闘モードに整つ。

「じゃあ、発・進！」

意氣揚々に昔の口調に戻るクロト。すると、白と黒の機体は背部のブースターを思いつきり噴かし、一度空中にフワリと浮かぶと、そのまま敵艦隊に向かつて吹つ飛んでいく。

「アウル、ステラ、準備はいいな？」

「OK、いつでもいいよ」

「……」

ステイニングは一人の答えが返つてくると、皮肉氣に笑みを浮かべた。

「さあ、パーティーの始まりだつ！」

彼は今のやつとりに満足する。あの時も新型の3機に乗つていた。

そして今回も新型か。へつ一笑いが込み上げてくるぜつ！

三人の機体もクロトの後に続き、機体を急加速をせるのであつた。

「勝たねばならんのだつ・・・・・！勝たねば・・・・・！」

ジブリーは悠然たる笑みを浮かべる。

「古の時代から我らの勝利は必然、確定事項・・・！糾弾も理想も良いが・・

卑怯者とののしり上げれば罵るが良い！だが、果たして私が勝った時、貴様は立っているか？

関係ない。勝てばもみ消しひねり潰せるのだ！

「一ベルシング、発射体制が整いました！」

ジブリールはほくそ笑むうちに、二ベルングの発射シークエンスは徐々に進んでいく。

一 偽装シャッター開放

いきなり基地のはずれに位置する白い山が動き始める。振動に連れて斜面を雪がすべり落ちる。雪煙を上げる山が、真つ一つに割れ、地下から巨大な田を思わせるマリナーの集合体が覗く。

そして地下から目覚めた、直径10kmにも及ぶパラボラ状の峡谷、

対空掃射砲『二一ベルング』だ。ヘヴンズベース基地の守護神ともいえる兵器だ。

巨大なそれがゆっくり田を開く。すると上空に降下するザフト軍の増援部隊をゆっくりとらえる。

上空でいくつものポッドが開き始め、なから大量のMS群が現れる。

「発射！」

二一ベルングから閃光が発せられると、閃光の中に捉えられたMS群はたちまち爆発を起こしていく。この巨大兵器はレーザー発生装置だったのだ。空に埋め尽くされていたポッドやMS群は一瞬にして真っ白な空間からその姿を消していった。

「ひょうひー派手にやるねえ！」

『フランガラッハ』のコクピット内でアウルは、ザフト軍のMSが一瞬で花火になっていく様を見て、うれしそうに言った。

「こいつは派手だな！ 中々楽しくなってきたじゃねえか・・・！ アウル、左だ！！」

わかつてると、アウルは『フランガラッハ』を瞬時に左へ旋回させ、
胸部のビーム砲を発射し、敵のコクピットを貫く。

「はつはあー！」めんね！ 強くてさあー！」

再び彼らの機体の目の前に新たに『ディン』や『ジン』が数機迫る。アウルは両肩のブームランを抜き放ち、すかさず投げる。

投刃されたそれは、一機の『ディン』のそれぞれの脚部に命中しますすべもなく撃ち落される。そして、脚部を破壊されひょろひょろと落ちる『ディン』にさらに追い討ちをかけ、
超^{アグニ}インパルス砲を腰部にどっしりと構え、胸部めがけ発射する。七色に光る閃光が砲門から放たれると胸部の中央に命中し、貫通すると同時に『ディン』は

大爆発を起こす。

アウルはそれぞれの武器の性能や威力を堪能するとスース越しに自分の“物”が悦になつているのが分かつた。

最高だ！これは！僕の物だ！

「へ・・アウルに負けねえぜ！！」

ステイングは『ブリュナーク』のマルチロックオンシステムを起動させ、敵のMS部隊を瞬く間にロックして、ためらいなくトリガーを指にかける。『ブリュナーク』の全砲門から火が噴くと多量の爆発が起きていく。

「ヒヤツーハツハ！最高だぜこりやあ！」

『ブリュナーク』の性能に舌を巻く。マルチロックオンシステムを器用に使いこなせるにはそつは時間は掛からなかつたのは彼の才能が伺える。

二人は互いの機体の性能に舌を巻くが、こいつにだけは絶対に負けない、そう思う。もはや彼らはMSの戦闘は撃破数の競争になり変

わっていた。

クロトは自軍の巨大兵器が放った光に飲み込まれたザフト軍のMS群が爆発する様子を見て絶句した。

何故、人は互いを認めず闘うのだ？俺は、こんなことを止めたくて、ここに戻ってきたのではないか？

自分の無力さを噛み締める。所詮は自分もチェス盤の一つの駒にすぎないのだ。

「ちつぽけな存在だな…俺は…」

避けたかった事態。だが、それでも、まだやるべき事がある。大切な『お仲間』を命をかけて守る事だ。

もう、ロドニアの失敗は繰り返さない。

クロトは、『ブリュナーク』がマルチロックオンシステムでMS部隊を撃破している様子を横目で確認し、きびすを返す。

パイロットスーツのポケットから管を一つ取り出す。それをパイロットスーツの首筋部分の穴に差し込む。黄色の液体がゅっくりと、クロトの体内へ流し込まれる。

霧がかかつたような頭の中がすうっと晴れる。その中で種が割れるような音が彼の中で

響いた。クロトの目が白色に変わる。『ノワール』は地面を思い切り蹴り上げ、

そのまま飛行モードで上空を華麗に舞う。

戦場は未だ混沌とし、倒しても倒しても終わりが無いようなくらい、MSが増え続ける。

彼は目の前から接近する数機の『ディン』を装備されている小型拳銃型ビームライフルで、一瞬にして数機の『ディン』の背翼を撃ち

貫き海面へ叩きつけた。

「へへ・・切りがないぜ！」

『ノワール』の背部に装備されているフラガラッハ3で、海面に浮いている

戦艦に近づいていく。『ノワール』が近づいてくるのが分かると、戦艦を守るために

再び『ディン』がマシンガンを連射して『ノワール』へ猛スピードで近づいてくる。

『ノワール』は一度、ブレードをしまい両掌に内蔵されている、アンカーを発射し、2機の『ディン』はそのアンカーに足を絡め取られる。『ノワール』は思い切り、両腕を交差すると、『ディン』は互いに

慣性の方向へ勢いよく振られ、強くぶつかる。大きな衝撃が起こり、『ディン』は中破した。

『ディン』がやられ、海面へ落ちていくと、すかさず戦艦が迎撃するためCWSを起動させ

『ノワール』を近づかせない。

「ああああああーー瞬殺ーー！」

『ノワール』は空中から思い切り片手のブレードを投げ飛ばし、戦艦の甲板にブレードが

突き刺さる。そして、一気に近づき、甲板へ機体を乱暴に着地させると、

戦艦は一瞬ぐらつく。『ノワール』は突き刺さったブレードを引き抜き、小型拳銃型ビームライフルに切り替えると、突き刺さった甲板の亀裂に向かって、ショーティを連射する。

戦艦は煙を吹きながら、真っ二つに割れていき、水しづきを上げる。

水しぶきの中から

華麗にジャンプし、『ノワール』は新たにヘヴンズベースへ向かつてくる敵軍を確認する。

その最中、クロトの後方から攻撃を合図^{シグナル}させる警報音が鳴り響く。

「なんだあ？！」

クロトは機体を回頭させると、ヘヴンズベースの中央から黒光りする禍々しい巨大な機体を目にすると。その巨大な機体は先行する味方部隊に関係無く、容赦なく背部に装備されている

四門の高エネルギー砲^{アーフブローワー}_{ドライゾーン}を発射する。

クロトはとっさに、機体を思い切り上昇させそれを回避するも、射線上にいた味方部隊^{ウインダム}が次々に爆発を起こしていく。

「あ・・め・・滅茶苦茶やりやがる！それに・・まだ“あんな物”があつたのかよ！」

クロトには聞かされていなかつたエクステンティット部隊と『テストロイ』。

彼の行動が前々から気に入らなかつた軍上層部による配慮で、クロトやネオには聞かされていなかつたのだ。彼は機体の中で、歯軋りをする。

死なせたくない！

あんな化け物に乗せたまま死なせるか！

だが、『デストロイ』が出てきてから急に姿を見せた機体が彼の横

を猛スピードで

突っ込んでいく。青と赤と白のその機体は背部から光の翼のような光を出しながら

『デストロイ』へ向かっていく。

「なんだありやあ・・・！新型か！」

青と赤と白の機体の後ろには、同じ新型の機体と『インパルス』が続いている。

もう一方の新型は、全体的に黒系統で、背部には巨大な物を背負つた重量感のある機体で

クロトには何だかすぐに分かつた。そつ、そのフォルムはまさしく『タスラム』の後継機だ。

正確には『タスラム』の原型機『プロヴィデンス』の。

「まさかあいつらー！」

クロトは彼等が『デストロイ』へ向かう意図が分かると、自分の機体もヘヴンズベースへ

吹っ飛ばす。

もう『お仲間』の死は見たくない。間に合えー！

ステイング達は前方から赤と青と白の機体と、ステラの乗る『タスラム』に似た機体、

そしていつもの『インパルス』が猛スピードで接近していくのを確認すると、彼等は

目的が『デストロイ』の撃破であることがわかつた。

このヘヴンズベースをかろうじて守っている要が、先ほど打たれた

『二一ベルング』と

『デストロイ』の高火力であるからだ。

だが、『二一ベルング』は放たれ、再受電しているが、もう一発をすぐには撃てない。

『デストロイ』に至つては、ベルリン戦すでに接近戦に弱いのは網羅されている。

しかし、そのためにはティング等機動性の高いMSが防衛を張つているのだ。

「アウル、ステラ！『デストロイ』を守るぞ、いいな！」

くへっ！またあいつらか・・性懲りもなく！…」

アウルは『インパルス』の姿を確認すると、もう一方の新型2機が目障りな

『ミネルヴァ』所属だと理解する。

今日こそ決着をつけてやる。

彼は背部ファトウムブースターのバーニアを噴かし、青と赤と白の機体へ急接近していく。

「あの馬鹿！フォーメーションを！」

遅れてステイリングも『フラガラッハ』に続く。

『ブリュナーク』が続くとその後ろに『タスラム』が続いた。

「シン・・？」

ステラは『インパルス』の姿が目に入ると、あの機体にザフトのシ

ン・アスカが乗っているのだとと思うと、喜ぶ。

また会えたっ！

「シン。いいな。目標はある『テストロイ』だ。あれを破壊すれば、こここの基地の攻撃の要は無力化される」

「ああっ！分かつてるとレイ！」

「だ・・大丈夫かしら？私達だけで」

ルナマリアは初めて、あの禍々しい機体を目の前にし、威圧感を感じる。先ほどの強力な攻撃でたじろぎしたので、恐怖を感じていた。

「ルナ！あれば接近戦に弱い！ソードインパルスに換装するんだ！」

「え！あ・・うん！分かつた！」

ルナマリアは『インパルス』に乗つてからまだ日が浅い。

そのためか、まだ『インパルス』の合体システムを最大限に扱えず、どの状況で装備を換装すればいいのかまだ、分かつていない。

なので、『インパルス』を熟知しているシンの指示をよく聞いた。指示を聞いてから素早く、『ミネルヴァ』にソードシルエットの換装を要請する。

すると、『ミネルヴァ』からシルエットが射出され、戦場へ淡々と

現れる。

そして、背部のフォースシルエットを脱着し、代わりにソードシルエットが背部に

装備される。すると、鮮やかな蒼色の装甲は真紅の装甲へ変わる。
ヴァリアブルフェイズシフト
VPS装甲の効果だ。

「ん？ 新型か……！ あれは……『フリーダム』？」

レイは内心、驚きを見せた。あの形状はまさしくベルリン戦闘でシンが撃破したはずの『フリーダム』。馬鹿なつ！ 何故つ！

「それに……『ジャステイス』！ そんな……『プロヴィデンス』まで！」

シンもコクピット内で驚きの声を上げた。

ベルリン戦で破壊したはずの亡靈『フリーダム』が目の前に存在する。

全大戦で消えたはずの『ジャステイス』、そしてレイの乗る『レジエンド』の前機

『プロヴィデンス』まで。

それに『ジャステイス』の姿を見ると、口の中に苦いものがこみ上げてくる。

アスラン

そう、『ジャステイス』は元々、全大戦の英雄、アスラン・ザラの愛機だ。

その『ジャステイス』が今日の前にいる。自分の手で討つたアスランの亡靈がいる。

「シン！動搖するな！くるぞっ！」

「分かつてゐる！あれには、アスランは乗つてない！」

くどうゆう経緯での機体のデータを奪つたかは知らんが、とにかくやるしかない

く覚悟を決めるしかないわね・・・！>

「ノルマニカニシテニ。」

「例の合体野郎もいるぞ！ アウル、ステラ、気をつけろよ！」

ステイシングは飛び込んできた青と赤と白の機体が『ブリュナーク』に対艦刀を振り下ろす。

ライフルを

「動きが早い！」

青と赤と白の機体は、『ブリュナーク』にビームライフルを連射しつつ、

背部ウエポンクラックに装備されている、高エネルギー長距離射程ビーム砲を放つ。

『ブリュナーク』は連射されるビームライフルはローリングしながら

らかわすも、

長距離射程ビーム砲まではかわせず、アンチ・ビームシールドでなんとか受けた。

「あの『フリーダム』より遅いぞ！ 偽者！」

『ブリュナーカ』のスピーカーから聞き覚えのある声を聞いた。

あの時のザフト野郎か！

「『フリーダム』より遅いだとお？ なめるなあつ……」

ステイリングは半ば切れ氣味で、『ディステイニー』へビームサーベルを一本構えながら

飛び込む。そして、その二つの得物を同時に振り下ろす。

だが、サーベルは『ディステイニー』には届かず、その前に、『ディ

イステイニー』の

バルマフィオキナ

掌でとめられる。掌はビームの膜で覆われており、サーベルをいとも簡単に抑えられたのだ。シンの類まれない技量における神業である。

「はつはあ！ 死ねよ！ てめえ！」

『フランガラッハ』が『ディステイニー』に躍り出る。『フランガラッハ』は背部ブースターのウェポントラックから超高エネルギー砲を腰部に構え、放つ。『ディステイニー』は急いで、高く上昇してビームを絶妙なタイミングで回避した。

「ちつ！ 逃げんなよ……」

↙『ティースティニー』と『ジャスティス』の中間みたいなもんかつ↙

『フラガラッハ』の**胸部**にエネルギーが込められ、回避した『デスティニー』に

放たれる。シンはそのビームをシールドで難なく弾く。そして『ティースティニー』のウェポントラックから今度は、**対艦刀**を構える。『フラガラッハ』もそれに応じて**対艦刀**を構える。

「はあああ！」

互いに、機体はぶつかり合い、剣と剣が交差して凌ぎを削る。その中心はものすごいスパークを起こし、アウルとシンの闘争心を駆り立てる。

僕が最強だ
亡靈め消えろ！

やつとの思いで、クロトは3体の機体に追いついた。

案の定、新型機は、『ブリュナーク』等3体の機体と交戦して、3対3の状況に。

『デストロイ』は遠距離にから飛来するザフト軍を叩くのが精一杯でスティング等

三人に援護はしていないようだ。そもそも、彼等は援護など考えてはいなかもしれない。

だが、スティング達3人がシン達に気を取られている隙に、海上から現れた『ゾノ』部隊が

『デストロイ』に接近し、5機あるうちの一機のコクピットをやすと潰された。

「あああ……」

クロトは急いで、『ゾノ』へ接近して両腕両足を小型拳銃型ビームライフルで破壊する。

「『デストロイ』4号機撃破を確認!」

ジブリールがいる司令室のオペレーターが、淡々と答える。彼は、一瞬で憤怒に満ちる。

「一体、奴等は何をやっている! 何の為の『デストロイ』防衛につかせてると思つて!」

ジブリールは怒りの形相で立ち上がり、背後のネオに罵声を飛ばす。

「も・・・申し訳ありません」

「宇宙へいく準備を整えろ! 貴様等に私の身は任せられん!」

ジブリールは、『ミネルヴァ』の出現に焦りを感じていて、5機ある『デストロイ』が

一機破壊された事でそれは爆発した。

このままではここが陥落するのも時間の問題だ!

彼は、隣にあるグラスに入ったワインを飲み干すと、苛立ちながら乱暴に椅子へ座る。

ネオは彼の行動を呆れながら内心愚痴を口にする。

（元々はあんた達が招いた不祥事じゃないか・・なんで俺たちまで
駆りだたせにやならんのだ・・？・・連合も潮時か・・）

ステラは半ばフワフワした気持ちで、『インパルス』へ向かってい
く。

君は俺が守る！

ステラ！ 言つたる？ 会こにいくつて！

彼女はシンとの事を思い出すと、うずうずしていた。
自分が生きていたなんて知つたら、驚くだろうな。
シンに会いたい。 そうほんやり考える。

フランフランと『インパルス』へ近づくが、『インパルス』は容赦なく、
長刀を『タスマム』へ振り下す。

ステラは、ビクッと驚く。

何故？ どうして？ シンなら分かつてくれるはずなのに

ステラはとつさに、『タスマム』の防盾ビームサーべルで長刀を防
ぐ。

その際に、機体のキーボードを左手で急いで叩き、接触回路をつな
げる。

「シン！ ステラ、会いに来たよ！」

『インパルス』の『クピット』から、あどけない少女の声が聞こえる。
ルナマリアはすこし驚く。

(誰よ? この子…)

ルナマリアは焦る。シン? 何故、『デステイニー』のパイロットを知っているのか?

連合のパイロットのくせに。・・・連合・・・まさか!

ルナマリアはハツとした。

まさか、シンが厳罰を受けてまで返したあの時のエクステンデットの女の子?

確か、シンは“ステラ”って・・!

彼女はやり辛い雰囲気を押し殺し、『タスラム』の右肩にビームライフルを撃ち込む。

ステラは、シンの事で頭が一杯で、ライフルをかわせず直撃する。右肩をやられ、強い衝撃が彼女を襲つた。

「めん!

ルナマリアは内心で彼女に謝罪する。

『お仲間』のステラの『タスラム』が上空から陸へ落ちていく様を見たステイニング。

「あの馬鹿! 肩をやられたぐらいでつーステラ! ! 無事か! ?」

ステイニングはステラに呼びかけるも、答えは返つてこない。彼の真横から強い衝撃が襲う。『レジェンド』と呼ばれた、『タスマム』のようなフォルムの機体が、『ブリュナーク』の横腹に蹴りを入れたのだ。慣性の方向へ吹き飛び、すばやく宙返りして受身を取る。

「ちー!」

＜貴様の相手は俺だ＞

（す・・ステラ…？）

シンは先ほど、『ブリューナク』とぶつかりあつた時に接触回路が開いたので

今のステイニングの言つた事がスピーカーを通して伝わってきた。

ステラ？ だつて・・ステラは死んで・・・

確かに彼女の遺体は確認しなかつた。だが彼女が生きているはずがない。

今でも覚えている。

『デストロイ』の胴体のコクピットの亀裂から見えた美しいプロンドの髪色。

雪のようにつき透けた白い肌。そして、守つてやりたいと思わせるあどけない顔と

女の子と感じさせてくれる華奢な体。もし・・今のことしが本当なら・・・！

シンはいても立つても困らなくななり、急いで地上に落ちた『タスマム』へと接近する。

「何をする気だ！？」

クロトは『デスティニー』が、『タスマム』に接近していくのを見る。

このままではステラがやられる！

そう思った次の瞬間、『ノワール』の背後に警報音が鳴り響いた。

「何だ！？」

空中から猛スピードで接近していくのは、オレンジ色の機体でそのフォルムは

『インパルス』そのもの。フォースシルエットを装備したそれは、『ノワール』にサーベルを振り下ろす。『ノワール』もそれに対応してフラガッハ³で凌ぎ、あい、離れ際に二連装リニアガンを放つ。

リニアガンから放たれた弾は、オレンジ色の『インパルス』が掲げたシールドで防御された。

「面倒臭いやつが出てきたなっ！」

「ふんっ！ストライクとはなっ！」⁴などせよ⁵いちからやらせてもらいうぜえ！>

オレンジ色の『インパルス』にオレンジのパイロットスーツ。

そう。彼こそハイネ・ウェステンフルスだ。

『ガイア』にコクピットを破壊されたと思ったが、実は生きているの、

重症をおい、これまでの戦闘はずつと『ミネルヴァ』で養成していたのだ。

議長からもうつた新たな剣は、今までの『グフ』や『ザク』を上回り、
VPS装甲も彼のパーソナルカラーに
変更されている。

³アーマブルフルフェイシング

⁴アーマブルフルフェイシング

⁵アーマブルフルフェイシング

「黄昏の魔弾は1人だけじゃないってね！ いつかやらせてもらわ
ぜ！」

「ステラ！」

シンは『タスマ』へ駆け寄り、『ディスティニー』のコクピット
内で『タスマ』との
接触回路を開いて、応じた。

「ステラ！ ステラア！」

シンは必死に叫ぶ。
愛する人が生きていた喜びが強く、ここが戦場だと忘れ去られてい
た。

彼女の姿を見たい。声を聴きたい。会つてこの手で抱きしめたい。
すると、ステラもようやく気付いた。

シンの声がする！

彼女も『タスマ』の内線を『ディスティニー』から発した信号を
つなぎ合わせ、

互いのメインモニターの上にお互いの顔が映る。

生きてた！

お互い、再び会えた事が嬉しく、ほとんど同時にコクピットのハッ
チを開いて

機体から躍り出る。

会えた！絶対に合えないと思つてたのに…

シンはヘルメットを投げ捨てて、ステラに駆け寄る。彼女もヘルメットを外してシンに駆け寄つていつた。

互いに強く抱きしめる。お互いの体の硬さや柔らかさを深く味わう。

彼女は少し長い黒髪で隠れている紅い瞳をまっすぐに捉える。

会えた喜びが強く、彼女の赤紫の瞳に涙が溜まつていく。

シン自身も彼女が生きて今ここにいることが嬉しく、なんともいえない感情が胸に

こみ上げていく。

彼女の匂い。彼女の髪。彼女の柔らかさ。それら全て、シンの体に伝わる。

「ステラ！良かつた！生きてたんだ！俺…君がいなくなつてずっと…！」

「シンにずっと会いたくて…ステラ、ずっと会いたくて…」

シンは抱きしめながら彼女の顔を見下ろすと、歓喜に満ちて、彼女のすみれ色の瞳から

涙が零れるのが見えると、ビックリしたくななく感情を抑えられなかつた。

彼は思わず、彼女の可愛い唇に自分の唇を強引にくっつける。

ステラは目を丸くさせ一瞬驚くも、口の中に好きな人の舌が入つてくるのが分かり、

彼に全て身をゆだねた。互いの舌が絡み合い、互いの体温を強く感じた。

すこしずつだが、お互いの体が熱くなつていいく。

シンとステラは、その幸福の時間が長く続けばいいのに、と思つ。

「うはあ・・・」

シンヒステラは互いの唇を離し、一呼吸いれる。

今までずっと戦闘ばかりで、『フリーダム』を怨みつづけて、尊敬していたアスランまでもこの手にかけた。

切羽詰つた状況だったから、シンはいつも不機嫌そうな顔だった。だが、今やつと掴んだ幸福を感じて、彼の本来の優しい顔が戻つていいく。

シンは申し訳なさうに言つ。

「うめん・・我慢できなくて・・・」

「ううん、ステラ嬉しかった！何だか気持ち良かつた・・・」

「え・・うーステラ・・・！」

初めてのキスだったが、どうやら上手く行つたようだ。

彼はコーディネーターであるから、初めてのナチュラルのようटアヒヒア手ではない。

初めてでも上達したナチュラルくらいの技はある。頬を染め、ステラの言葉に顔が熱くなる。

彼女もやつと落ち着き、彼に笑顔を向むけた。

「シン・・？」

「ステラ・・」

もう、絶対に離さない。離すものか。大切な者を失つてたまるか！

（守るんだ・・俺が・・ステラを・・・！）

シンは堅く誓い、ステラと再び唇を交わすのであった。

第十四話『黄昏』（後書き）

スパロボKでハイネが隠しコートとして手に入ります。もし、本編でも生きていたなら、こんな感じで最終決戦でアスラン達と共に戦うんだなあ・・・と思いました。

第十五話『黄昏ノ糸』（前書き）

何も浮かばず、そのばそのばでキーを打つてます。
文章になつてないと分かつていながらも書いてしまつた。。。プロ
ットからやり直すべきかも。。。

第十五話『黄昏ノ弐』

「シンは一体何をやつていいん...?」

『レジエンド』の「クピットから、シンとストラガキスをしている光景を見て腹が立つ。

いつも冷静なレイが珍しくも、苛立つていた。

その理由はやはり、『ブリュナーク』のことであろう。

互いの技量が同じであるか、致命傷を与える事が出来ない。

『ブリュナーク』はビームサーベルで、『レジエンド』は対艦刀で互いの得物を交差させ、しのぎを削る。

「ここつー落ちやがれ！」

『ブリュナーク』は一度後方へ機体をステップさせ、『レジエンド』から離れ、両肩の2連装レールガンの砲頭を起こし、『レジエンド』めがけ発射した。

「ちつ！」

『レジエンド』は左腕のビーム・シールドでそれを、防ぐも、その防いだ瞬間の隙を狙い

『ブリュナーク』の接近を許してしまつ。

「もうつたぜつー！」

『ブリュナーク』のビームサーベルが『レジエンド』の左腕を斬りおとす。

このままでは、完全にこちらが不利。レイは息をのむ。

まだ、この機体を扱うには早すぎた。いくらエース級の腕前とはいえるが、この『レジエンド』はアスラン・ザラ用に作られている。

最初からシン用に開発されている『ディステイニー』とは違うのだ。しかも、宇宙空間ではないため、『レジエンド』の持ち味であるドラグーンさえ使えない。

「ならばっ！」

レイは『ブリュナーク』から背を向け『デストロイ』に狙いを定める。

〈てめえ！逃げんな！！〉

レイは舞つよつこ『デストロイ』に接近して、コクピットへ対艦刀をコクピットへ突き立てる。蟹の甲羅のような形状の黒光の化け物は爆炎と共に散る。

その中、『レジエンド』は背部のドラグーン・ユニットを展開させ、『ブリュナーク』へ10本のビームが飛ぶ。だが、ステイングはそのビームを、ビームサーベルで全て弾く。

〈何！〉

レイは『ブリュナーク』の動きが、一瞬だけ『フリーダム』と重なり、驚愕した。

奇襲のつもりで仕掛けた攻撃を意図も簡単に弾かれたのだ。しかも、ビームサーベルだけで。

連合にまだこれだけの兵士が残っていたとは。レイは歯噛みした。

＜野郎・・・・・＞

迂闊だつた！『デストロイ』をまた一つ落としちつた！

完全な油断。

ステイングは自嘲した。

時、同じくして『フラガラッハ』は『インパルス』と交戦していた。

『フラガラッハ』は両肩ブーメランを一刃投げつけるが、
『インパルス』の対艦刀で弾かれ破壊される。

＜へえ！やるじゃん！＞

＜これでも私、“赤”なのよ！＞

＜・・あつ！＞

アウルは息詰まる。“アレ”から聞こえた声。
聞き覚えのある声。間違いない。

ルナか！

アウルはインパルスに向かつて言った。

＜それに乗つてゐるのルナなんだろう！？＞

＜あ・・アウル！＞

ルナマリアは驚愕した。

あの『ジャステイスもどき』に乗つてゐるのがアウル？

「アウル！止めて！あなたと戦いたくないの！」

彼女は叫ぶが彼は聞かない。『フラガラッハ』が胸部のビーム砲を『インパルス』へと放ち、『インパルス』は盾で防ぐ。それでも彼女はアウルに向かつて言った。

「どうして私達が殺しあわなきやいけないの？！」

『インパルス』は後ろへスライドしながら、『フラガラッハ』の射程外から逃げる。

「知るかつ！」

よつやくアウルが彼女の問いに答えた。

「お前がザフトだからだろうが！だから、何だつてやつてやるさー！」

「・・・つ！」

アウルはそう言い放つと、ウェポントラックから超高インパルス砲を構える。

その砲口が『インパルス』を捉えるが、アウルはトリガーを引かなかつた。

正確には引けなかつた。トリガーを引く指が震える。

今、撃てば相手は確実に死ぬのに・・・「クピットを貫けるのに・・・！」

こんな感情は初めてだ。数え切れないほどのMSを破壊してきた僕

なのに・・。

「クソ・・・！」

思わず操縦桿を握る手を「クピット」の機器に、思い切り叩きつけた。

とんだ甘ちゃんだ・・僕は・・。

空中で停滞する『フランガラッハ』にゆっくりと近づいていく『インパルス』。

「アウル・・・」

「・・・ハハ！笑えよ！兵器として作られた僕が、感情に左右されたんだからさあ！」

アウルの言葉にルナマリアは思い出した。

ロドニアの研究所で無残に転がっていた子供の死体。遺伝子を操作されたコードィネーターを嫌うブルーコスマスが作り上げた兵器。

強化人間。彼もそのうちの一人。でも・・。

アウルは兵器なんかじゃない！

「ああ。俺は約束は守るぞ。ステラを守る」

「シン・・・守る？」

「ステラ……」

「うつしてお互いの目を見ているだけで幸せになれる。

「」が戦場だという事を忘れられる。

守る。その言葉がどれほど彼女を救えるのだろう。

いや、彼女だけじゃない。この言葉で守られるのは俺もなんだ。彼女を守る。だから俺は死ねない。

そのとおり、『ディスティニー』の「クピットから通信が入った。

「シン！何をしているー。『テストロイ』を破壊するんだ！」

「レイ……」

「彼女との再会を喜ぶのは後にしてー。」は戦場だぞー。」

戦場。そうだ。このは戦場。

夢から現実に叩き落されるようだった。

「「めん……ステラ。もつ行かなきや」

ステラは彼が悲しそうな目をしたので、悲しくなった。また行っちゃう。ステラから離れる……。

「シン……もつと一緒に居たい」

彼女が悲しい顔で彼の体をギュッと掴んだ。

そして胸の中でポロポロと泣き始めた。

そんな彼女の気持ちを察してはやれたが、シンはどうしても出来なかつた。

本当はこのままずっとこのまましていい。出来れば戦争とかない世界で一緒に暮らしたい。

センソウノナイセカイ・・・

シンはハツとする。

そうだ。俺がやっている事は戦争の無い世界を作る為の戦いなんだ。その世界を作る為なら俺は・・・

「ステラ・・・」めんつ・・・

シンは彼女の腕を振り解き彼女を背にし、『デステイニー』のコクピットへ走っていく。

ステラは彼に強く腕を解かれたので、嫌われたと思うと、その場にペタリと座り込み

大泣きした。『ディステイニー』はゆっくりと立ち上がり、彼女の体を『ディステイニー』の

陰が包み込んだ。シンはコクピットから彼女の姿を見下ろすと、彼女の大泣きしている姿が目に飛び込んだ。

傷つけてしまった・・・。でも、待つてステラ。

もうすぐ俺が、戦争の無い新しい未来へ連れて行くから。そして・・・そこで暮そう！

『デステイニー』を飛翔させ、『デストロイ』へ向かっていった。

「シンとステラ・・・あんな大胆な事を・・・」

クロトは彼等が戦場のど真ん中でキスをしている光景を「クピットから見て、せせら笑う。

二人の姿を大きくズームアップさせると、一人が幸せそうな顔をしているのが分かった。

「良かつたじゃん。シンの奴」

〈余所見するんじゃねえ！〉

オレンジ色の『インパルス』が『ノワール』に向かつてビームライフルを連射する。

だが『ノワール』はフラガラッハ³でそのビームを弾き、『インパルス』へ接近していく。

〈悪かつたな！だがこれで終・劇！！〉

クロトは啖呵を切つて、『インパルス』の懷へ潜り込み、頭部のC IWSを連射する。

『インパルス』のVPS⁴装甲^{ヴァリアブルフェイズシフト}があるのにも関わらず、

そんな攻撃を！ハイネの視界を速射砲が包むが、逆にハイネの怒りを買うだけだった。

〈ちっ・・じんのおおー田障りだぜ！消えろ！〉

『インパルス』はビームサーベルを『ノワール』へ向かつて一閃するが、

『ノワール』はとつたに背部の『ノワールストライカー』を脱着し『インパルス』の真下へ潜り込むように交わす。

「何い！！」

ハイネは驚いた。想定していなかつた事をされて戸惑い、そして脱着された

『ノワールストライカ』はビームサーベルに一閃され爆発し、『インパルス』を後方へ吹き飛ばす。

「うわあああ！」

「これでええええええええ！」

『ノワールストライカ』を脱着させた『ストライクE』は元の白色に戻り、吹き飛ばされた

『インパルス』に猛スピードで接近していった。

そして、両腕に持つているフラガラッハ3で『インパルス』の四肢を一瞬で切り裂いた。

「なつ・に・！？」

「瞬・殺！」

頭部と胸部だけのダルマになつた『インパルス』は海上へ向かつて落下していく。

それを見下ろしながら、『ストライクE』は残り少なくなつた『デストロイ』の防衛に向かつた。

「クソ・・まだまだだな・・俺も！」

まるで、あの時のアスランのよつだな俺は。
ハイネは内心で、苦笑した。

「いやあ、『ミネルヴァ』に戻るしかないかね・・

海上に落ちる前に、素早く胸部とコアファイターを切り離し、戦闘機だけとなつた

『インパルス』は母艦に帰つていつた。

「アウルは兵器なんかじゃないよ・・」

「え・・?」

「だつて、兵器だつたら今頃あたしは死んでるじゃない?」

ルナマリアは笑つた。

そう。何度も何度も彼に助けられた。

彼は本当は優しい子なんだ。

「ルナ・・」

彼女は笑つてくれた。

彼女の同胞を何人も殺してきた僕に彼女は笑いかけてくれた。

何か懐かしい感じがする。

そうだ。

母さんに似てるんだ。

ルナを見るとあの場所の“母さん”を思い出すんだ。
僕にとって唯一の安らぎの場所。

僕も、ルナとしたい。

あのお馬鹿^{スマーフ}があの野郎としてるみたいに、僕もルナとキスしたい。
あ・・そうか。これが“恋”ってんだ。

「ルナ・・僕も・・・」

アウルが言おうとした瞬間と同時に、ついに最後の『デストロイ』
が撃墜されたシグナルが
コクピットに鳴り響いた。

「え・・・？」

アウルは最後に撃墜された『デストロイ』の近くにいるMSをズー

ムさせる。

トロロール^{トロロール}『デスティニー』
青と赤と白の新型機^{デスティニー}だ。

「あの野郎！」

『フラガラッハ』が『デスティニー』に体を向けようとした瞬間、
『インパルス』に
制止させられた。

「止めて！もう戦わないで！」

いくらアウルが強くとも、『デスティニー』に乗っているシンに敵
うわけがない。

今行つたら、確實に殺されてしまう。ただでさえ私のせいに混乱しているのに！

「シン、ルナマリア、聞こえるな。新型機はいい。撤退するぞ。」

レイの指示を聞き、シンとルナマリアは、燃える『デストロイ』達を後にし

『ミネルヴァ』へと向かった。

遠くなる、『フラガラッハ』をルナマリアは横目で確認しきびすを返す。

「よなら。アウル。

「待て！まだ決着は付いてねえ！！」

「よせ！追うんじゃない！……『デストロイ』を全機破壊された時点で、俺達は負けたんだ。」

クロトが淡々と言い放つ。それを聞きスティングは押し黙った。結局、あの中で唯一敵を落としたのはクロトのみ。彼はまだまだ、クロトの足元に及ばない事がわかり、釈然としない様子だ。

アウルは未だ、遠くへ行つてしまつたルナマリアが乗る『インパルス』を見つめていた。

彼女が小さくなるたびに、彼になんともいえない寂しさが入つてくれる。

ステラはさつきからずっと、『タスラム』のコクピット内で泣いていた。

目は真っ赤になり、まぶたは赤く腫れ、頬は垂れ流した涙で濡れて赤くなっている。

自分達の不注意が、ここを落とした事実は隠せない。
だから、間違いなく『廃棄処分』される。

その前に逃げなくては。

クロトは前々から実行しようとしてた計画を実行させようと決意する。

大天使に会いに・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5384c/>

機動戦士ガンダムSEEDブリュナーク

2010年10月9日20時49分発行